西祥郎さんの著作の「スエーデン人　リンネ」「ドイツ人　ルンピウス」「イギリス人・ウォレス」の 3 編の作品を一挙にまとめて掲載します。脚注と挿絵は編者が追加したものです。（編者）

目次

スエーデン人　リンネ 2

ドイツ人　ルンピウス 8

イギリス人・ウォレス 13

「スエーデン人リンネ（前）」（２０２１年０４月０５日）

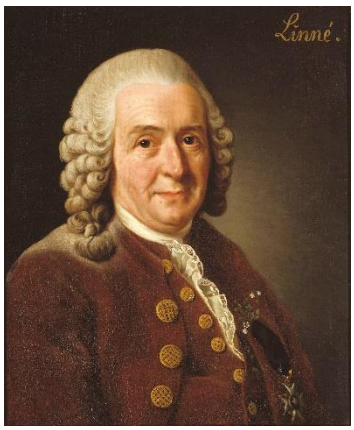
タクソノミーtaxonomyという学問体系がある。生物学の一部門としての分類学だ。何事によらず、国が違えば言語が変わり、土地が変われば名称が異なる。日本にも「難波の葦は伊勢の浜荻」という諺があり、「所変われば品変わる」とも言う。インドネシアでbunga matahariという花はスエーデンで太陽のバラsolrosと言い、スエーデンでは天使のラッパanglatrumpetと呼ばれる花がインドネシアでkecebung gunungとなっている。インドネシアのkucaiはスエーデンで中国草バワンkinesisk graslokになり、スエーデンのシトロン草citrongrasはインドネシアでseraiだ。

それらの違いを克服するために国際共通語を作ってやれば、外国人同士であっても意思疎通が楽だ。こうしてラテン語を使った共通語が作られた。上述の四種は順番にHelianthus annus、Brugmansia svaveolens、Allium tuberosum、Cymbopogon citratusである。

それら「学名」と呼ばれる名称は盲滅法に作られたのでなく、個々の類似性や関係を明らかにするために目・科・属・種などの階層構造を設けて名称のシステム化が行われた。このシステムのおかげで世界中の人間が、自分の母語における名称と学名を知っていれば、世界中の相手との情報交換を行えるようになった。こうならなかったなら、世界中の人間を相手にする場合、相手になる人間の言語の数だけ言葉を知っていなければ情報交換ができないことになる。

これは確かに効率がよい。しかもラテン語が選択されたというのは、当時のヨーロッパで学術言語がそれであったからという理由が大きい要因だったにせよ、どこかの民族の生活言語でなかったという帰結がもたらされたことは、平等という観点から見たとき、われわれを心地よくしてくれるものになっている。

現代世界では英語が国際共通語にほぼなっているから、同じではないかと考える人もいるだろうが、英語の場合は話が違う。世界人口の４%強が英語を日常生活の言語にしている。英語という国際共通語は、外国語学習をしなくても困らないひとびとがそれだけいるということだ。その不公平さが感じられないひとびとは幸いなるかなだろう。



タクソノミーの父と呼ばれるスエーデン人カール・フォン・リニア Carl von Linne は、１７６１年にノーベル賞を与えられて貴族に叙せられたあと、ラテン語式に Carl Linnaeus（ラテン語読みリンナイウス、スエーデン語読みはリニウス）と書かれることもなされた。日本語ではリンネと呼ばれているので、本稿では日本語一般名称を使うことにする。

１７０７年にスエーデンのラスルツ Rasult で生まれたリンネは幼いころから植物に強い興味を持ち、しかも蓄えた知識が大人を驚かせるほどのものだったことから、息子を自分の跡継にしようと考えていた牧師の父親も、自身が植物への深い造詣を持っていたために、息子を神学校にやらず、医者として生きる道を歩ませた。

リンネはルント Lund 大学とウプサラ Uppsala 大学で医学を修得した。だが植物への興味に駆られてかれはスエーデンの島々を渉猟し、珍しい植物を採集することを好んだ。１７３２年５月にはラップランド Lappland への調査旅行を行って、Flora Lapponica というタイトルの記録を残している。

ドーラナ Dalarna の知事が域内の有用資源発見のための調査を行ったとき、リンネもそれに参加し、かれはそこで運命の女性サラに出会った。ところが、サラの父親がふたりの恋の成就に条件をつけた。リンネに博士号を取れと言う。

リンネは博士論文を書き上げると、オランダのハーダーウェイク Harderwijk 大学に自分の著作「自然の体系」Systema Naturae と植物標本を合わせて持ち込み、博士号を求めた。博士号が下りるのに一週間もかからなかったと言う。

オランダで「自然の体系」が出版されて、リンネはオランダで一躍著名人になった。かれはオランダのあちこちにある植物園でひっぱりだこになり、それに応じるのに大わらわだったようだ。オランダで新進気鋭の植物博士になったリンネは１７３８年にスエーデンに戻り、運命の女性サラと婚約した。サラの父親は再びリンネに求めた。家族を養うためには職業を持たなければならないと。

リンネはストックホルムで医者の看板を掲げたが、スエーデン人は気心の知れた相手しか医者として信用しない。患者になってもらうためには、まず友達にならなければならないということだ。オランダでは植物学のプリンスと呼ばれて世間で知らぬひととてないこのわたしも、スエーデンに戻れば形無しだ、とかれは愚痴っている。[続く]

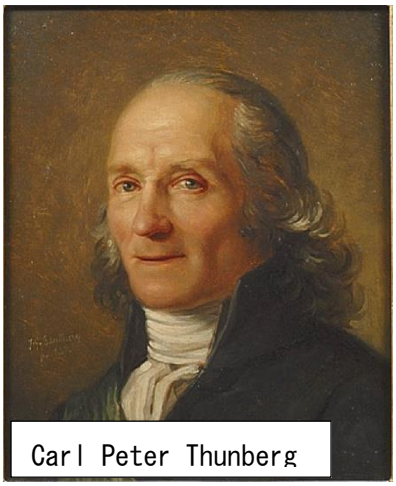
「スエーデン人リンネ（後）」（２０２１年０４月０６日）

リンネの才能は、世間一般のひとびとよりも先に、社会的な高位者が目を向けた。カール・グスタヴ・テシン Carl Gustav Tessin 伯爵がバリスコレジオ Bergs Collegio の講師にかれを抜擢した。王宮と政界に暮らす伯爵の人脈がリンネの未来への扉を開いたのである。王宮執事長がリンネをお抱え医師に任じた。１７３９年、かれはスエーデン科学アカデミーを設立した。

Carl Gustav Tessin

こうなっては、サラの父親ももはや何も言うことはない。早く娘をもらってくださいと頭を下げるばかりだろう。二年後、かれはウプサラ大学の医学部教授になった。

ウプサラ大学で教鞭を取りながら、リンネはその時代の植物学の先端を歩み続けた。生徒の間からこの教授の信奉者が続出した。世界をその手の中で操るようになったヨーロッパのその時代、生物学も世界に目を向け、視野を広げるのは当たり前のことだった。知識欲はおのずとヨーロッパの外の世界に向かってほとばしって行ったのである。



Carl Peter Thunberg

リンネ自身が世界に乗り出すことはなかったようだが、かれの弟子たちがその役割を果たした。そのひとりがカール・ピーター・テュンバリ Carl Peter Thunberg だ。テュンバリは１７７５年５月と１７７７年６月の二回、ジャワを訪れている。テュンバリがアムステルダムで学業中に、教授がアジアアフリカの保有地である南アフリカ・セイロン・ジャワに調査に行くよう勧めた結果だ。かれは１７７１年１２月、ＶＯＣの船でオランダを発った。

テュンバリはボゴールのメガムンドゥン Megamendung にある洞窟を訪れて、ツバメ walet を採集した。中華料理の食材になる「ツバメの巣」を作る、あのツバメだ。このツバメには Aerodrums fuciphagus という学名が付けられた。

スエーデン東インド会社のヨテボリ号が１７４３年に広東に向けての航海途上でバタヴィアに寄港した話は「ヌサンタラのスエーデン人」（２０２０年０９月３０日）で既述した。そのときもリンネの弟子が乗り組んでいたようで、弟子は各寄港地で目にした動植物を記録し、あるいは標本を持ち帰ることに努めた。それに加えて、広東から茶木をスエーデンに持ち帰る使命をも与えられていたそうだ。リンネは茶木をスエーデンで育てることを夢見ていたらしい。

しかしそう簡単に茶木をスエーデン人に持ち帰らせてくれる土地はなかったようで、弟子たちはたいてい茶木の標本を持たずに帰国した。弟子のひとりパール・オスベッキのプリンスカール号による旅行は大きい成果の上がった旅だった。オスベッキは多数の記録や標本を持ち帰ってコレクションを増やし、リンネを喜ばせた。しかしリンネの夢だった茶木はどうしたことか、オスベッキが手に入れて船に積み込むよう手配してあったにも関わらず、船の中に持ち込まれていなかったという話になっている。

植物だけでなく動物についても分類体系を作る以上、そこに人間も含まれて当然だ。リンネは人間に Homo sapiens という名称を与え、その下部分類を americanus, asiaticus, afrikanus, europeanus とした。

そして各項目の特徴を次のように書いた。

アメリカヌス：　皮膚は赤色。頑固で怒りやすい。

アシアティクス：　皮膚は淡色。吝嗇欲張りで戸惑いやすい。

アフリカヌス：　皮膚は黒色。緊張感なく、粗野。

ヨーロピアヌス：　皮膚は白色。優美で想像力を持つ。

これがヨーロッパ人の白人優越主義の形成に一役買ったのは疑いあるまい。ただし、そんな言葉に触発されてヨーロッパ人が有色人種の征服と支配、そして暗黒世界の文明化にまっしぐらに突進するようになったとは思えない。単に自らの行為を正当化する材料にされただけのように思われるのだが。

ともあれ、人間をサルの仲間の最高位に位置付けた分類法が宗教界から猛烈な反発を受けたことは想像に余りある。「アダムとイブが食べた木の実がリンゴだって？そんなはずはない。かれらが食べたのはバナナだったのだよ。」というのはそのときの反論だったのかどうか？

リンネが１７７８年に生涯を閉じたとき、７千７百種の植物と４千４百種の動物が学名を持っていた。［ 完 ］

「ドイツ人　ルンピウス（前）」（２０２１年０４月０７日）

Georg Eberhard Rumpf

１６２７年、ギョーグ・エバハート・ルンフ Georg Eberhard Rumpf がドイツのヘッセン州ヴェタオクライスに生まれた。かれの名が世界の植物学界に遺されたのは生涯を賭けた大著『アンボイナ植物誌』Herbarium Amboinense によるものである。その歴史的大作の著者名がゲオルギウス・エヴェラルドゥス・ルンフィウス Georgius Everhardus Rumhius とラテン語で書かれたために、ラテン語名の方が高い知名度を得ることになった。インドネシア人はルンフィウスをルンピウスと発音するので、本稿ではそれを使うことにする。

ルンピウスの母親がオランダ語を話したために、かれにとってオランダ語は身近なものだったようだ。学業を終えた若きルンピウスはオランダへ行き、ベニスとの通商に従事するという名目でオランダ西インド会社に雇われたものの、１６４６年に De Swarte Raef 号に乗組まされてブラジルのペルナンブコに向かった。当時オランダはブラジルでポルトガルと戦争状態にあり、どのような経緯だったのか不明だが、かれはポルトガルの捕虜になってポルトガルに送られたのである。

ポルトガルを離れることができたのは１６４９年で、かれはその足でドイツに帰り、父親の仕事を手伝っていた。母親が１６５１年に没すると、ドイツを去ってオランダに向かい、ＶＯＣに雇われた。１６５２年２月、かれは軍務社員の最下級オフィサーとして Muyden 号に乗組み、東インドに向かう。

バタヴィア到着は１６５３年７月、そして５４年に憧れのアンボイナに赴任した。アンボイナとは現在のアンボンのことだ。ルンピウスはＶＯＣの軍務社員を嫌い、文民社

員への転向を願い出て許可された。手始めは二級商務員としてアンボン島北部のヒトゥHitu王国を担当することだった。

１６６２年に一級商務員に昇格したかれは、長年の夢だったスパイスアイランドの植物研究に取り掛かった。１６６６年にルンピウスの植物研究の重要性を見込んだヨアン・マーツァイカーJoan Maetsuycker１２代総督はルンピウスをアンボンの総督代理の地位に据えた。その仕事に専念できる態勢をルンピウスに与えたのである。

かれはアンボンの娘を妻にし、妻の助力を得てアンボンの植物図鑑を作り始めた。最終的にかれが完成させたアンボイナ植物誌には、２千を超える植物が精緻な画像に特徴や効用などが書き添えられて掲載されている。

そのころ、かれはヨーロッパの学術界と頻繁に通信を行い、そこからさまざまな手引きを得たようだ。後にリンネが分類法を確立させたとき、アンボイナ植物誌は多大なヒントをリンネに与えたと言われている。

１６７０年ごろまで、ルンピウスの仕事はたいした障害もなく、とんとん拍子に進んで来た。だがその後、不運とそれを乗り越えるための不撓不屈の意志を証明することになる悲劇の時期がかれにまとわりついてきたのである。

かれの視力を低下させてきた緑内障によって、かれはついに失明してしまった。かれの一家はそれまで住んでいたヒトゥからアンボンに引っ越した。かれの妻と子供たちがかれのライフワークの完成に協力し、バタヴィアからも支援の手が差し伸べられて、かれの植物研究の完成をサポートした。給料が停止されることもなく、それどころか秘書とイラストレータが派遣されてルンピウスの仕事を助けたのである。植物の特徴や効用をイラストに添えるために、かれは原住民から話を集め、それを子供や秘書に筆記させた。

その次にかれを襲った悲劇は、かれの仕事の重要な協力者だった妻スザンナ Suzanna と娘の死だった。１６７４年２月１７日午後７時半ごろ、穏やかな月明の下で中国正月前夜の祝祭気分に包まれていたアンボン島一帯を猛烈な地震が揺さぶった。ルンピウス家の建物が崩れ、失明したかれを励まし、助け続けていた妻と娘がその下敷きになってしまったのである。[続く]

「ドイツ人ルンピウス（後）」（２０２１年０４月０８日）

そして大型の津波が陸地めがけて襲い掛かって来た。インドネシア史上最大と見られているこの地震で２千２百人超が死亡したと言われている。ルンピウスが書き残した実体験談によれば、地震の揺れはきわめて強く、まるでこの世の終わりが到来したと思わせるほどのものだったそうだ。

丘が崩れ、土地が割れた。だれもが立っていられずに地面に倒れ、ヴィクトリア要塞の鐘が、だれも打ち鳴らさないというのに、一斉に鳴り始めた。ルンピウスのその記述が、インドネシアで起こった大型天災の最古の記録になっている。

三つ目の災いは１６８７年１月１１日に起こったアンボンの大火災だった。ルンピウスの家も燃え上がり、かれが秘蔵していた多数の作品の多くが失われた。再びバタヴィアはルンピウスの汗と歳月の結晶である作品の復元のために、イラストレータと書記を派遣して来た。

１６９０年、ルンピウスの大図鑑が完成し、バタヴィアに送られた。受取ったヨハネス・カンパウス Johannes Camphuys１５代総督はそのコピーを作らせた。インドネシア語ウィキには、コピーが出来上がるまでに、なんと７年の歳月が流れ去り、１６９７年

にＶＯＣ本社に送られたと書かれている。一方英語ウィキでは、すぐにオランダに送られたが運んだ船が襲撃されて沈没し、カンパウス総督がコピーを作ってあったのが幸いして１６９６年にＶＯＣ本社に送られた、となっている。

ところが、取締役会ヒーレン１７は協議の末に否定的な結論を出したのだ。スパイスアイランドにあるスパイス類やその他の有用植物の情報が世界中に筒抜けになれば、世界中の盗人どもが照準を明確に据えて集まって来るに決まっている。オランダの国益のために、この情報は社外秘にしなければならない。こうしてルンピウスが生涯を賭けて作った大作は、ＶＯＣ本社倉庫の奥深くにしまいこまれてしまった。

１７０２年、自分のライフワークがどうなっているのかはっきり分からないまま、作者のルンピウスは世を去った。アンボンを愛したこの人物の墓がどこにあるのか、コンパス紙特集調査班が現地を訪れて取材したときにも、はっきりした場所を知っている人間を見つけることができなかった。

アンボンのパティムラ大学研究院長によれば、ルンピウスの名を聞いたことのある地元民はたくさんいるが、かれが何をしたのかという詳細まで知っている者は少ないそうだ。「ルンピウスの研究をベースにして、それが３百年後の今、どのように変容したのかということを調べるのは興味深いことだが、学生の中にそのような観点を持つ者が出て来ないのは、ルンピウスの業績が十分に認識されていないことを示しているように思われる。」

さしずめルンピウスは、郷土史に書かれない世界の偉人ということになるのだろう。だが偉人の定義を誤って、「どんな駄人もだれかの偉人」という定理に走ってしまえば偉人列伝は世界人名録になってしまうから、不用意に偉人という言葉で人間を形容しないほうが良いのかもしれない。

ＶＯＣ本社は１７０４年にアンボイナ植物誌の社外秘を解除したものの、出版社が見つからないまま社会への公開は延び延びになり、１７４１年になってやっと６分冊の大図鑑がヨーロッパの学術界に驚きで迎えられたのである。

大図鑑の中に登場する白蘭の名前がFlos Suzannaeとなっていて、われわれにロマンチシズムを感じさせてくれる。現在の学名はPecteilis susannaeだ。かれは愛する妻にそのもっとも美しい花を捧げたのだ。スザンナは純血アンボン娘でなくて、華人系の娘だったという説もある。

息子のパウル・アウグストPaul Augustも父親を助けてたくさんのイラストを描いた。ルンピウスの肖像画を描いたのもかれだそうだ。父親の没後、かれはＶＯＣ社員になり、アンボイナ担当商務員の職に就いた。

ＶＯＣはルンピウスのために記念碑を建立したが、その下に黄金が隠されていると考えたイギリス人によって破壊された。１８２４年にファン・デル・カペレン４２代総督が再建したものの、第二次大戦の爆撃でふたたび破壊されてしまった。ルンピウスの不運は延々と継続している。[完]

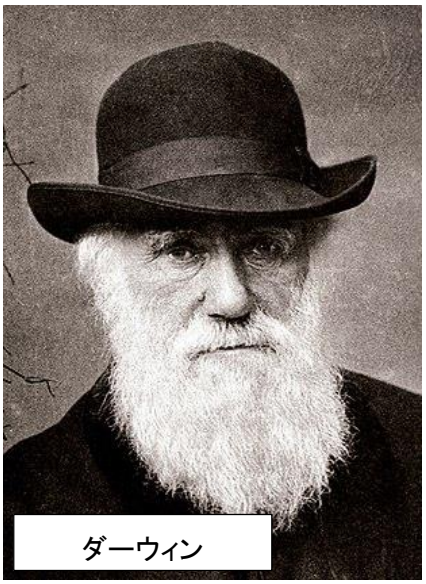
「イギリス人ウォレス（１）」（２０２１年０４月０９日）

進化論という言葉を聞くと、たいていのひとはダーウィン Charles Robert Darwin の名前を連想するように条件づけられてきた。おまけに進化論を提唱したり、発表したというような、あたかもかれが発見者であるような印象を与える書き方が使われているために、学校生徒はそういう印象に呑まれてしまう結果がもたらされているようにわたしには思われる。

進化論というものは古代ギリシャから連綿と人類史の中に培われて来たものであり、ダーウィンが見つけ出したものでは決してない。ダーウィンは進化論の方向性をより真理に近いものに向けさせた功績において賞賛されるべきであろう。かれが進化論そのものをどうこうしたと言うのは言い過ぎではあるまいか。

更に付け加えるなら、ダーウィンの名前を一躍不朽のものにした歴史的大著『種の起源』の核をなす自然淘汰あるいは自然選択が生物進化の鍵をにぎる仕組みであるという論証も、同時代の生物学者ウォレス Alfred Russel Wallace の理論に大きい影響を受けて成立したものであるという評価を下すひとびともいる。

特に、インドネシアのひとびとはウォレスの方により深い親しみを抱いているようだ。ガラパゴス諸島を調査研究の主舞台にしてヌサンタラの土を一度も踏まなかったダーウィンよりも、ヌサンタラを広範に渡渉してさまざまな原住民の暮らし・地形・事物・風物を書き残し、当時のヌサンタラの様子を世界中に知らせたウォレスの方にインドネシア人が親しみを感じるのは当然のことではあるまいか。


ダーウィン

１８０９年２月、イギリスのシュロップシャ州シュレイスブリでダーウィンが生まれた。父親はかれを牧師にしようとしてケンブリッジ大学クライストカレッジで学ばせたが、かれの興味は生物学に傾倒して行ったようだ。

１８３１年にダーウィンは大学の恩師の推挙で測量船ビーグル号の世界周航に参加することになる。ビーグル号がプリマスを出港したのは１８３１年１２月２７日だった。南米を回ってガラパゴス諸島に達したのは１８３５年９月１５日で、ビーグル号がそこを後にしたのは同年１０月２０日だったから、およそひと月間そこにいたことになる。

そこからの帰途は速く、オーストラリアのシドニーが３６年１月、それからココス島経由でインド洋を横断し、ケープタウンには同年５月、そしてフォルマス帰着は３６年１０月だった。

ダーウィンが神学を学んでいたころ、生物界の頂点に神がおり、生物界はすべてが神の創造した姿でこの世界に出現したものであって、美醜すら神の思し召しであるという思想をダーウィンは信じていたそうだ。それを打ち壊す役割を自分が果たすようになるとは、思いもよらなかったのではあるまいか。

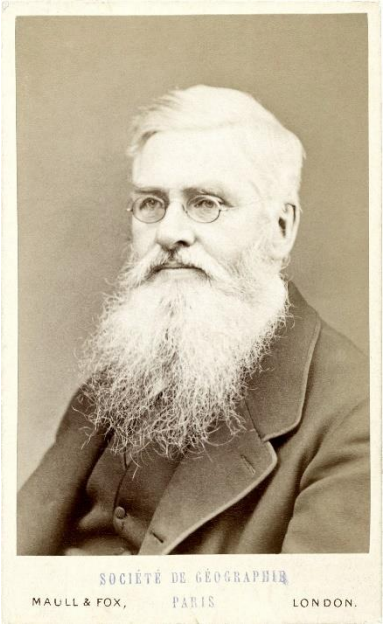
ダーウィンが試行錯誤しつつ生物進化のメカニズム解明に新説を投げかけようと研究にいそしんでいたころ、オランダ領東インドで調査研究を行っているイギリス人学者から２０ページの論文が送られて来た。差出人はウォレスで、学術界で旧知の間柄であり、生物進化に関する見解に共通性があったために、お互いに興味を抱きあっていた。

ウォレスはダーウィンを通してその論文が学会に提出されることを望んでいた。ダーウィンはもちろんウォレスの希望を満たしたのだが、かれはウォレスの論文を読んで打ちのめされ、一時は自分が書きかけの論文を破り捨てようとまで考えたという話もあ

る。ウォレスが組み立てた仮説がダーウィンのロジックの一歩先を行っていたということなのだろうか。

ふたりは１８５８年に共同発表を行い、ダーウィンの名前を世界史に遺るものにした著作『種の起源』は１８５９年１１月２４日に出版された。[続く]

「イギリス人ウォレス（２）」（２０２１年０４月１２日）



ウォレスは１８２３年１月にウエールズのマンモッシャー州リャンバドックで出生した。青年期は測量や土木技術の見習いからはじめて技師の仕事をも行うようになったが、科学と世界の見聞、そして昆虫への興味などが若きウォレスを探検博物学へと向かわせた。昆虫学者ヘンリー・ベイツと共に１８４８年にブラジルに向かい、１８５２年までブラジルで探査と標本採集を行って珍しい標本をイギリスの愛好家に販売した。

続いて１８５４年からオランダ領東インドに向かい、広大な地域を探検して数多くの生物標本を集め、また各地の状況や風俗習慣、原住民の生活状況などを記録した。１８６２年に帰国するまでに、かれは 12,[illegible] 種の標本を集めたそうだ。鳥類だけで 8,050 種、7,500 種の貝、哺乳類 310 種、両生類 100 種、甲虫類 83,200 種、他の昆虫は 13,400 種を占めた。東インドに滞在中も、かれはさまざまな標本をイギリスの仲介者に送ってコレクターや博物館に販売した。

ウォレス

イギリスの自然史博物館、大英博物館、キュー王室植物園やエジンバラの王室植物園、大英図書館などにはウォレスが送ったもの、ウォレスの没後に家族が寄贈したも

の、あるいはウォレスから買ったコレクターの遺族が寄贈したものなどが収められている。

ウォレスは自分用の標本コレクションを作り、余分なものは販売した。その膨大なコレクションの分析はいまだに終わっていないそうだ。４千７百種は新種として確定されているが、まだまだ全部が片付いたわけではない。たとえば、キュー王室植物園にあるウォレスコレクションでまだ片付いていないものは摂氏２０度未満の涼しいハーバリウムで保存されているものの、分析専門家がいないためにかなりのものがそのままになっている。キューのハーバリウムに置かれている標本は７百万件にのぼる。

ウォレスは種の起源と自然淘汰に関して副次的な位置付けに置かれ、極端なケースでは進化論という題目がダーウィンのひとり舞台にされてしまった印象があるが、ウォレスは動物地理学の分野でウォレス線というものにその名を遺した。

かれがロンボッ海峡～セレベス海～マカッサル海峡をつなぐ線の東と西で棲息動物と植物の相が異なることに気付き、それをヨーロッパ社会に発表したのは１８５９年のことだった。かれにその見解を抱かせたのは、スラウェシ・マルク多島海・ヌサトゥンガラが動植物の宝庫だったことによる。かれはそこで多種多様な生物に出会い、それをジャワ・バリ・カリマンタンのものと比較した結果がウォレス線の提唱につながった。おまけに「劣る個体は滅び、優れた個体が生き残って、その種は自然環境に適したものへと変化する」というダーウィンの進化論の骨格をなす適者生存原理をその地で考えつき、その仮説をダーウィンに手紙で相談したのである。

ウォレスがいなければダーウィンの進化論はどうなっていたかわからない、という評価が起こるのも無理はあるまい。世界は今、スラウェシ・マルク多島海・ヌサトゥンガラで形成される地域を英語でウォレイシア Wallacea と呼んでいる。ウォレイシアこそが進化論を生み出した土地であるという見方がインドネシア人に誇りを持たせたことは

疑いないだろう。ただまあ、そこまでの知識をインドネシア社会全般が持っているかどうかという話になると、わたしの声もトーンダウンせざるを得ないのだが。

ウォレイシアには６９７種の鳥が棲息していて、そのうちの３６％にあたる２４９種が原生種だ。哺乳動物は２０１種おり、１２３種が原生種である。このような場所は世界にざらにあるものではない。

ウォレイシアはアジア大陸およびパプア島～オーストラリア大陸から深海によって切り離され、その地理的な絶縁が動物の種の変化を促した。自然の変化への適応の優れていたものが生き残り、うまく行かなかったものは滅びた。そしてその適応が種に変化を起こさせた。新種の誕生が起こったのだ。ウォレスのロジックは的確だった。

ウォレスはウォレイシアを中心に置いた東インド旅行記を The Malay Archipelago というタイトルの本にした。出版されたのは１８６９年だ。

それは旅行記であり、各地の動植物の観察記録であり、またさまざまな現地人の生態であり、社会状況の記録でもある。１５０年前のインドネシアの状況がつぶさにうかがえる深い意味を持ったこの書がインドネシア語に翻訳されるまでに１４０年の時間を待たなければならなかった。[続く]

「イギリス人ウォレス（３）」（２０２１年０４月１３日）

ウォレスがシンガポールの土を踏んだのは１８５４年４月１８日で、３カ月近く滞在してからマラッカを訪れ、そのあと１１月にサラワクに入った。ボルネオ島の奥地まで転々と移動を続けて１８５６年２月１０日まで調査と採集を行い、再びシンガポールに戻ったのは２月１７日。かれはシンガポールをたいそう気に入ったようだ。人種と宗教と文化のるつぼであり、あらゆるものがイギリスよりはるかに廉価で売られているなどとかれは書いている。

１８５６年５月２３日、ウォレスはシンガポールから船でバリ島に向かった。かれの目的地はマカッサルであり、シンガポールから直接マカッサルへ行くこともできたのだが、途中でバリとロンボッに立ち寄ることにした。そうしたために、たいへん有意義な発見をすることができた。なにしろバリとロンボッの間では、地形も土壌もたいへんよく似ているというのに、生物相が異なっていることを発見することができたのだから。

シンガポールから中国人商人の持ち船クンバンジュプン号に乗ったウォレスは、６月１３日にバリ島のメインポートであるブレレン港に到着した。ブレレン Buleleng をウォレスは Bileling と綴っている。当時の現地人の発音がそうだったのだろう。

イギリス人船長とジャワ人乗組員が操るスクーナー[1]のクンバンジュプン号はバリ島北岸の穏やかでない海で投錨し、かれは船長と華人荷主と共に上陸すると、まず地元の華人バンダル bandar の家を訪れた。バンダルとは港の管理をゆだねられている大商人の

[1] 一般的には複数マストの帆船を指すが、ここでは二本マストの帆船であろう。

ことだ。そこには良い服装のバリ人が何人かいて、かれらは全員が黄金や象牙で飾られた柄のクリスを持っていた。木製の鞘もよく磨かれ、木目の美しいものだった。

その家の華人は中華式服装をせず土着民の服装をしていたため、ウォレスには見分けがつかなった。近所で女の物売が綿製品などを販売しているのを見て、ここがヒンドゥ教の土地であることをウォレスは再確認した。かの女たちは自分の夫のためにその仕事をしているのであり、イスラム文化の土地では絶対に起こらないことなのだから。

客に果実・茶・ケーキ・甘いものなどが供された。そのあと、バリ人の村を見に行った。村には高い土塀が取り巻いている竹製の住居が並び、住居の間を狭い道が通っている。かれらが訪問した数軒の家は、突然の訪問にも関わらず、いずれも親切丁寧な応対をしてくれた。

二日間の滞在中、かれは町の外に生物採集と土壌調査のために出かけた。これほどまでに土地を隅々まで耕し、美しい姿にして利用している場所をわたしははじめて目にしたとかれは著書の中で述べている。そのときまだジャワを訪れていなかったウォレスは、ヨーロッパのどこにもこのような場所はない、と書いた。

多少の起伏を伴った平地が海岸から内陸部へ１０～１２マイルほど伸びて、その先の森林と耕作地で満たされた丘陵部に続いている。ココナツやタマリンドや他の果樹が密

集して目印を作っている家屋や集落が四方に散らばり、ヨーロッパで最高の耕作地帯にも誇り得る整った灌漑システムが潤している豊かな水田がその間を埋めている。

水田は土地の起伏に合わせて、きわめてばらついた大きさに仕切られ、広い水田も狭いのも完璧な水平面に作られて、しかも隣り合う水田は互いに高さを変えてある。各水田は給水が自由に調節できるようになっていて、田ごとに水を満たしたり、水を干したりすることができる。こうして同じ時期に、ある田では田植えをし、別の田では刈り取りを行うようなことが行われている。

土地が広範囲に利用され尽くしていることから、野草は生育する場所がほとんどなくなってしまい、海辺に野草を求めるしかなかった。昆虫のバラエティを求めるウォレスにとって、自然の植生が必須であることは言うまでもない。現代のビーチ観光時代とは異なって、当時のバリ人にとって海辺海浜は放置されて当たり前の場所だったのだろう。［ 続く ］

「イギリス人ウォレス（４）」（2021年04月14日）

クンバンジュプン号は1856年6月15日にブレレンを発って、17日にロンボッ島のアンペナン Ampenan[2]に着いた。ウォレスはアンペナンを Ampanam と綴っている。かれはマカッサル行きの便船が得られるまでロンボッに滞在することにした。アンペナンからはバリ島とロンボッ島にある8千フィート級の双子の火山が日の出と日没時に霧や雲の間から示す壮麗な姿を眺めることができて、熱帯の一日に素晴らしい魅力を添えた。

ウォレスはバンダルのひとり、イギリス人のカーター氏を訪問して知己を得、カーター氏は滞在中の世話を引き受けることをウォレスに約束した。カーター氏の家は敷地内に住居・倉庫・事

[2] 現在のマタラム市の海岸沿いの一部

務所などが高い竹のフェンスに囲まれて建っており、建物もすべて竹で作られ、屋根は草ぶきだった。それらがこの土地で得られる唯一の建築資材だったのである。

数カ月前に町が大火災で燃えてしまい、建物再建のために建築資材需要が高騰して品薄高値になっているとの話だった。実に、建てるのにたいへんな時間とエネルギーをかけるのだが、燃える時には１～２時間あれば十分だったそうだ。

アンペナンで毎日路上を青少年が細長い棒を持ってうろうろしている。棒の先にトリモチが付いていて、それでトンボを採るのだ。コメの開花期になると、トンボが猛然と増える。トリモチでトンボを捕まえた子供は、羽をむしって籠に入れる。１千匹を捕まえるのに長い時間はいらない。

捕まえたトンボは油で揚げて食べるのだ。バワンと蝦調味料を混ぜて食べることもあるし、揚げただけで食べることもする。かれらはそれを美味だと確信している。ボルネオやセレベスその他の島々ではハチの子を食べる。巣から出してそのまま食べたり、あるいはトンボのように揚げる。マルクではヤシオオオサゾウムシの幼虫を集めてパサルに持って行き、食用として販売している。ありあまるほどの昆虫のおかげで、かれらは昆虫食を生活習慣の中に持っている。

アンペナン周辺であまり採集成果があがらないため、ウォレスは湾沿いのずっと南にあるトリン湾 Tring Bay のラブアン Labuan へ行くことにした。そこにはシカやイノシシが豊富にいると言う。

ウォレスは助手を連れている。ボルネオで雇ったマレー人少年アリと鳥の剥製作りの技術をもったマラッカポルトガル人マヌエルのふたりだ。三人は現地のアウトリガーボートを雇って海岸沿いに南へ下った。ウォレスはラブアンに住むアンボイナマレー人インチ・ダウッ氏への紹介状を持って行き、快く迎えられた。その地は話にたがわず動植物の宝庫であり、しかも珍しい動物がたくさん見つかった。

しばらく滞在してたくさんの標本を集めたのに満足し、そろそろマカッサルへ向かおうと考えてかれはアンペナンに戻った。ところがマカッサルに向かう船はいつまでたってもやって来ない。それで内陸部へ旅をしてみようということになった。

カーター氏は快く馬を貸してくれ、また付添いとしてココス諸島生まれのイギリス人、ロス氏が同行することになった。ロス氏は植民地政庁に雇われて、破産したロンボッのキリスト教宣教団の後処理を行っている人物だ。

ロンボッの平坦な地形を4マイルほど進んで、ロンボッの首府マタラム Mataram に着いた。ここは大きな村であり、巨木の並木に沿って大通りがあり、土壁の塀を背にして竹造りの家屋が並んでいる。ここは地元土着民ササッ Sasak 族のラジャ（王）が住んでいて、その向こうはバリ島からやってきてた征服者の領地カランガスム Karangasem だ。ウォレスはその綴りを Karangassam と書いている。

マタラムの中では、下層の人間は馬に乗ることが禁じられているため、ウォレス一行の中のジャワ人サーバントは馬から下りて徒歩で進んだ。ラジャや高僧の住居は赤レンガの柱で見映えよく造られているが、王宮は普通の民家とあまり違わない姿をしている。[続く]

「イギリス人ウォレス（５）」（2021年04月15日）

マタラムを抜けると、道は緩い上り坂になった。一行が美しい棚田の間の道を登っているとき、コメを背に負った馬を引く地元民の長蛇の列とすれ違った。コメはアンペナンに運ばれて、輸出されるのである。バリとロンボッの主要輸出産品はコメとコーヒーで、コメは平地で作られ、コーヒーは高地で作られている。コメの輸出量はたいへん大きく、ヌサンタラの諸島からシンガポール、更には中国にまで送られている。

毎日、島の各所からアンペナンにコメが集まって来る、カーター氏の領分だ。原住民が受取る金は中国の銅銭で、千二百個で1ドルになる。バリからは干し肉とオックステールも輸出されている。ロンボッからはアヒルと仔馬だ。

午後１時ごろ、一行は目的地コパン Kopang 村に到着した。ウォレスは Coupang と表記している。現在 Desa Kopang はロンボッのプラヤ国際空港の北側にあってリンジャニ火山の麓まで続き、島の中央部に位置している。

ロス氏がコパン村のプルブクル perbekel と面識があったことで今回の旅の内容になったわけだが、着いてみるとプルブクルはラジャを訪問しにマタラムへ行ったとのことだった。

プルブクルは村長を意味するバリ語だ。現代語はその形だが、昔はプンブクル pembekel という異なる接頭辞が使われていたのかもしれない。ウォレスは Pumbuckle と書いている。

ウォレス一行は馬をつないでから、表の日陰になっている竹製の床で待つように言われた。しばらくするとプルブクルのマレー語通訳がやってきて用向きを尋ね、プルブクルはしばらくすると戻るから待つようにと言われた。まだ朝食を摂っていないので何か食べるものを欲しいと頼むとすぐに用意すると返事されたが、ほんの気持ちだけのものがそれから２時間後に届いた。二皿の白飯と小さい揚げ魚四尾、そして野菜が少々。

食後、ウォレスとロス氏は村の中を歩いてみることにした。ほどなく村人の男や子供たちがやってきて、周囲を取り囲んで一緒に歩き、軽い会話などを交わして友好を示した。家の中からは、扉を少し開いて夫人やお嬢さんたちが顔を覗かせ、視線をまじわせ、微笑みを交わした。

午後四時ごろ、プルブクルがやっと姿を現わした。ウォレスが、標本採集の活動を行いたいので数日間滞在させてほしいと頼んだところ、プルブクルはたいへんな迷惑が降りかかって来たという空気を漂わせ、質問して来た。アナアグン Anak Agung の手紙はあるか、と。アナアグンは地元民が使うラジャの別称だ。

ここに滞在したいのならアナアグンの許しを得なければならないとかれは言い、すぐさまマタラムに引き返した。そんな小うるさい手続きなぞ必要ないと考えてやってきたロス氏とウォレスはこの対応に戸惑った。

そのプルブクルは王族出身であり、現在のラジャに対する謀反の嫌疑をかけられることにたいへんな気遣いをしていることがその様子からうかがわれた。ロス氏とウォレスも自分たちがそんな疑惑の中に巻き込まれる可能性に思い至り、不安を抱くことになった。

陽が沈んで夜になったが、プルブクルは戻って来ず、おまけにだれひとりとしてこの一行に近付く者もいない。夜９時ごろになって、やっとプルブクルが戻って来た。ラジャと高僧たち、そして大勢の付き人たちが一緒だった。

ウォレス一行とラジャたちはすぐさま握手を交わしたものの、完全な沈黙が数分間周囲を包んだ。それから一行は質問攻めにあい、逐一説明したがそのまま信じられた気配はなかった。一時間ほど話し合いが続き、夜食が出て食事をしたが、昼にもらった食事並みのもので、揚げ魚のない飯と野菜だけだった。その後また話し合いが再開され、深夜一時ごろにお開きになり、ラジャの一行は帰って行った。

ウォレス一行は翌朝日の出と共に目覚めて様子を見た。一時間ほどしてマレー語通訳が来たので、立ち去るからプルブクルに挨拶したいと言うと、プルブクルはラジャの所へ行ったと言う。一行が出発しようとすると、通訳はプルブクルが戻るまで待てと言った。またその伝で一日を無駄にされてはたまらないとウォレスは立ち去ることを決めた。通訳は泣き顔になっていたそうだ。[続く]

「イギリス人ウォレス（６）」（２０２１年０４月１６日）

ロンボッでササッ人の生活を統治している慣習法は血なまぐさいものだ。盗みは死刑である。カーター氏はかつて、自宅の金属製コーヒーポットを盗まれた。盗人は捕まり、コーヒーポットは戻ったが、官憲がカーター氏のところに盗人を連れてきて、妥当

と思う方法で罰せよと言う。かれらは、その場でクリスで突き刺せとカーター氏にアドバイスした。そうしなければ、そいつはまたあなたから何かを盗むに決まっている、と言う。しかしその実行はカーター氏に容易にできるものではない。

カーター氏は、もう一度わたしの敷地に入ったら射殺する、と盗人に警告して放免した。ところが数カ月後、同じ盗人がまたカーター氏の馬を盗んだ。馬は戻ったが、盗人は捕まえられなかった。

日没後、家の中にその家の主が知らない人間がいたら、その者はクリスで刺殺され、死体は家の外や海辺に投げ捨てられる。そのことを問題視する人間はひとりもいない。それがロンボッの慣習法になっている。

妻になった女性の倫理は厳しい社会監視下に置かれている。もちろん、人間の嫉妬がその社会倫理を作り上げたことは疑いがない。誰かの妻になった女は、タバコであれシリの葉であれ、どんなつまらない品であれ、夫でない男から受取ってはならない。その倫理を犯せばクリスが女の生涯を閉じるのである。

数年前にイギリス人商人がバリ人上流層の女性を伴って移住してきた。その女性は現地のラジャの一族とも関わりのある人間で、原住民からは高貴の女性と敬われていた。何かの祭りのときに、その女性が夫でない男性から花か何かを受取ったことがあった。それが世間で話題になりラジャの耳に入った。

ラジャはすぐさまイギリス人商人に使いを送り、バリ女性を差し出すよう命じた。イギリス商人は罰金をいくらでも払うから赦してほしいと言い張り、ラジャはイギリス人の名誉を重んじてこの問題を取り下げる姿勢を示した。

ところがしばらくしてから、ラジャの使いがイギリス商人の家を訪れ、ラジャからの贈り物があるから直接渡したいとバリ女性を表扉まで来させた。そして何が起こったか？使者はこれが贈り物だと言って女性の心臓をクリスで一突きした。

もっと重い不倫にはもっと重い罰が与えられる。姦婦姦夫は背中合わせに縛り上げられて、海に投げ込まれるのだ。海に棲んでいる巨大なワニが死刑執行人になるのである。ウォレスがロンボッに滞在中もそんなできごとがあったそうだ。

ウォレスが鳥の剥製作り作業に雇ったマヌエルは、そんな血なまぐさいロンボッでの暮らしに嫌気がさしたのだろう。ホームシックも手伝って、かれは契約を打ち切ってシンガポールへ帰ると言い出した。マヌエルが去ってから数日後、マカッサルへ向かう小さいスクーナーがアンペナンに入った。ウォレスは８月３０日にロンボッを後にした。

スクーナーは９月２日にマカッサルに入港した。ウォレスにとって、はじめて訪れたオランダ人の植民都市である。この町がきれいなのには訳があった。オランダ行政はこの町のヨーロッパ人社会に規則を定めていた。家屋は白塗りにし、家の前の道路に毎日午後４時に水を撒くこと。道路は掃き清められ、ゴミは覆われた排水溝に落とされて、大きいゴミ集積場に向かう。満ち潮のときゴミ集積場に海水が流れ込み、引き潮になるとゴミが波に運び去られる。

ウォレスはマカッサルに住むオランダ人メスマン氏およびデンマーク人商人への紹介状を持って来ていた。両氏はウォレスを歓迎し、助力を惜しまないことを申し出た。どちらも英語がとても流暢だ。オランダ人の多くはフランス語に長じているが、英語が流暢な者は珍しい。[続く]

「イギリス人ウォレス（７）」（２０２１年０４月１９日）

翌日、ウォレスはデンマーク人商人の同伴でマカッサル行政長官を表敬訪問し、長官の丁重な歓迎を受けた。ウォレスは長官とフランス語で会話した。オランダ人高官はみんなフランス語を達者に話す。

ウォレスは街中から２マイルほど離れたメスマン氏の持ち家に住んだ。小さいコーヒー園や畑があり、メスマン氏の住むカントリーハウスから１マイルほど離れている。家は高床式の竹造りで７フィートの高さがあり、地階は半ばオープンになって台所などもある。この家の周囲にある小屋はメスマン氏の雇い人が住んでいる。

ところがその近辺には野生の生き物が閑散としていて、そこでいくら頑張ってもたいした採集はできない。遠出しなければならなくなったために、ウォレスは行政長官を訪れてゴア Goa 王国のラジャ宛の紹介状を書いてもらった。この人物の自由な行動を許し、身柄の安全を保障するように要請するという内容の手紙だ。

長官はすぐに手紙を書いてくれ、メッセンジャーを呼んでウォレスに同行するよう命じた。ウォレスはメスマン氏に付き添われてゴアの王宮に行った。メスマン氏はゴアのラジャと親しいとのことだ。

王宮に着いたとき、ラジャは外にいて、上半身裸で建物が立つのを見ていた。西洋人のために椅子がふたつ用意されたが、王の家臣や従者たちは全員地面に座っている。メッセンジャーがラジャの足元にひざまずいて長官の手紙を差し出すと、秘書の者が封を開いて手紙をラジャに渡した。ラジャは一読してからそれをメスマン氏に渡し、ふたりの間でマカッサル語の会話がなされた。メスマン氏はウォレスが必要としていることがらを細大漏らさず話し、許可はすぐに下りた。ゴアの領地内では自由にどこへでも行って良いが、どこかに滞在することを決めたらすぐに王宮に連絡してほしい。それはラジャが人を送ってその場所の安全を確定させるためである。

そしてワインが供され、さらに甘い物とコーヒーが出された。コーヒーの産地で地元民が飲んでいるコーヒーにうまいコーヒーはないとウォレスは書いている。

メスマン氏が鹿撃ちに行く森へ行ってみると大いに期待できそうだったので、ウォレスはその森の近くに寓居を建ててもらおうと考え、ラジャに依頼した。しかしラジャは森の傍の村の家を一軒空けさせるから、そこに住めと言う。

二日後、ウォレスは王宮へ行って、その家を見たいので案内してくれと頼んだ。ラジャはすぐに用人のひとりに案内を命じた。村に着いて、かなり良い家に案内された。ところがそれは村長の家で、用人は村長と話し合いを始める始末。村長の側は何も用意をしていなかった。ウォレスはかれらを動かす方法を知っていた。「こんなことではラジャに文句を言わなければならないが、もしすぐに家が見つかるなら、ちゃんと家賃を払い、あんたがたの損にならないようにする。」

さっそく家を探しに行こうということになった。数軒見て、良さそうな家が見つかったので、そこの住人に家を空けてもらうことにした。約束の日に助手をそこへ行かせると、住人がまだ住んでいて、引っ越す様子はまったくなかったが、助手たちが来たので不平たらたら、やっと重い腰を上げたという報告だった。

村人に嫌われると不都合が起こるかもしれないので、もうちょっと印象を良くしようとウォレスは考え、その家の住人と村人仲間たちをその家に招いた。全員にタバコを配り、自分が何をしに来たかを話し、この家を無理に空けてもらった事情を説明し、追い出した住人にひと月分の家賃だと言ってルピー銀貨を５枚渡した。そして食材の卵やニワトリ、果実もすべて金を払うと約束し、更にいくつかの標本を示して、こんな物を持って来れば金になるぞ、と語った。

お開きにしたその日のうちに、十数人の子供たちが次から次にカタツムリを持ってやって来た。そして銅銭を一個もらい、信じられないような顔で、しかしうれしそうに帰って行った。[続く]

「イギリス人ウォレス（８）」（２０２１年０４月２０日）

村人たちの暮らしは、他のムラユ種族とあまり違わない。女たちは日がな一日、毎日食べるコメを搗いて洗い、薪と水を家に持ち帰り、綿を紡ぎ、洗い、染色し、それでサルンを織っている。織る作業はきわめて簡易なフレームを床に広げ、糸をそろえて模様

を作りながら織っていく。一日にできるのはせいぜい１インチくらいだ。男たちはシリの木や野菜を育て、年に一度田を耕してコメを植える。コメは収穫されるまで、多少の世話をしなければならない。あとは必要に応じて家の修理を行い、マットや籠などの家庭用品を作る。しかしたいていはブラブラしている。

ムラユ語を話せる村人はおらず、せいぜいムラユ単語をいくつか知っているだけで、ウォレスとは会話が成り立たない。おまけに西洋人をはじめて見たものだから、ウォレスに恐怖症を抱く者が出た。人間だけならまだしも、動物までがウォレスを怖がる。

村のどこへ行こうが、犬が猛然と吠え、子供は泣き叫び、女たちは走って逃げ、男たちはまるで人食いモンスターでも見たかのような目で凝視する。駄馬までが、ウォレスがやってくると脇へ寄り、ジャングルの中に駆け込んだ。おかげでかれは村の中で、極力人目につかないように、こっそりと行動しなければならなかった。いや、村の外でさえ、道を歩いていて向こうから水牛や馬に乗ったり、荷物を載せたりしてやってくる者があると、かれの方が藪の中に隠れて通り過ぎるのを待つのである。そうしないと、動物がパニックを起こせばたいへんなことになるからだ。

その年は雨季の到来が早かったために、１１月にかれはメスマン氏の持ち家に帰ることにした。だが雨季になると、スラウェシ島南部は常に水浸し状態になる。生物採集活動などできはしない。ウォレスは避雨を考えた。幸いにして、自分がいるのはこの地域一円の交通と物産の十字路だ。雨季の間、もっと条件の良い土地へ行って採集活動を行い、雨季が明けたらまたこの宝庫マカッサルに戻ろう。

カリマンタンから籐、フローレスやティモールから白檀や蜜ろう、カーペンタリア湾からナマコ、ブル島からカユプティ kayu putih 油、パプアからナツメグやマソイ masoi 樹の皮などがマカッサルに集まり、そして散っていく。マカッサルの華人やブギス人の商店では、地元で産するコメやコーヒーと共にそれらの商品がいつも売られている。

中でもパプア島の胸に抱かれたアル Aru 諸島から送られてくる真珠・真珠母・べっ甲・ツバメの巣・ナマコなどはヨーロッパに、中国にと送られて行く。ただ、マカッサルとアル間の交易と交通に従事しているのはすべてがローカルの人間であり、ヨーロッパ人もヨーロッパの船も皆無である。リンネが手に入れた極楽鳥の標本はそこから送られて来たものだ。ウォレスはアルへ行くことにした。

マカッサルから船は一年に一回、アルに向かう。西風が最強になる１２月～１月だ。そして逆向きに吹く東風の強まる７～８月にかけて、アルを出てマカッサルに戻って来る。マカッサルの現地人ですら、アルを訪れた者はあまりおらず、アルへの旅の体験談を物語ればひとびとはその人間に一目置いて、賞賛した。

ウォレスは数日後にアルに向けて出帆する予定の大型プラフ perahu の持ち主に紹介された。持ち主はジャワ人で、若い美人のオランダ人の妻を持つ、穏やかな物腰の知性的な男だった。乗せてもらうにあたってその金額を問うと、戻って来たときにあなたが払いたいと思う金額を払ってくれたらそれで良い、と言う。１ドルであろうが百ドルであろうが、それ以上くれとは言わない、とのことだった。

二本マストの大型プラフは１２月１３日早朝にマカッサルを出帆したが、豪雨の中の出帆はうまく行かず、故障が起こって港に戻り、１５日に天候が回復して再度準備にかかり、船はやっと涼風の下を出帆した。オーナーと船長以下、５０人ほどの乗組員が乗った船は航海を続けて１２月３１日にケイ島に接近し、そこで数日間滞在することになった。ウォレスは生まれてはじめて、パプア人の生活領域に踏み込んだのである。[続く]

「イギリス人ウォレス（９）」（２０２１年０４月２１日）

ウォレスはパプア人とムラユ人の違いについて、ただの外見の違いだけでなくビヘイビアがまるで異なっていることを強く感じた。パプア人の立居振舞に、活力に満ちてまるでやんちゃな小学生のような印象を得たようだ。ケイ島の住民はパプア系土着民と外来種住民がいて、外来系はたいていムスリムであり、かれらの先祖はポルトガル人がバンダ島に住み着いたときにそこから追い出されたひとびとだったそうだ。ケイ島で話されるムラユ語の語彙の中に、ポルトガル語源と見られる単語が混じっていることをウォレスは発見している。

翌日、ウォレスも船長らと共に島に上がった。海岸で木造船が造られており、また完成品も並べられているのを見た船長は即座にそこの小舟を二隻買いたいと商談を始めた。いくつかの銃・ゴン gong・サルン・ハンカチ・斧・金属盆・タバコ・アラッが船と交換された。ここではマネーは通用しない。バーターに使われるのはナイフ・布・アラッなどであり、タバコが小銭の役割を果たす。取引はタワルムナワルが当たり前であって、喋り合いが取引の重要な内容を成す。吹っ掛けと値引きを言い合い、商談には時間をかける。

ウォレスはここでも標本採集を行ったが、同時に村人に昆虫を持って来るように言い、薫りのよいタバコでそれを買った。

船長の買った小舟が完成したので、１８５７年１月６日午後４時、ウォレスの船はケイ島を後にした。アル諸島のドボに到着したのは１月８日。ドボはアル諸島に交易に来るブギス人や華人たちの滞在地としてできた町だ。立ち並んでいる家はやってきた交易者が住むためのもので、ウォレスたちが来たときはほとんどがら空きだったが、翌日から交易船が続々と到着したので、ほどなく空き家状態の家は減少しはじめた。交易者は建築資材を持って来て、空き家の間に傷んだ家屋を修理した。

ドボでバーターに使われるマネーはタバコ・ナイフ・サゴケーキ・オランダの銅銭貨ドゥイッ duit などだ。魚や果実などの物売には、それらで支払う。

ウォレスはそこで極楽鳥の採集を大いに期待したのだが、羽が生え変わってもっとも美しい姿になるのは９～１０月であることがわかり、この旅では諦めることにした。それを得ようとすると、もう一年ここに滞在しなければならなくなり、そんな時間の浪費をする気はウォレスにない。ただしキングオブパラダイスだけは、成長すれば一年中もっとも美しい姿で飛び回っている。そしてかれは、アルの内陸部への旅でついにそれを手に入れたのである。

３月１３日、ウォレスは内陸部への探検に出発した。水路を舟でさかのぼる。２時間ほどの行程のあと、乾いた広い土地に建物がある場所に着いた。大きな納屋のような小屋で、壁はない。ドボで雇った案内人はそこで滞在すると言う。中には十数人の男女と子供たちが住んでいて、料理用の火が二カ所で燃えている。

周辺を見分してから、期待できそうだと思ったウォレスはその家の持ち主と交渉した。５フィート幅の一面を一週間借りる条件で家賃を尋ね、鉈刀一本で合意された。

数日、雨模様の天気が続いたあと、晴れた朝が来た。そして採集に出かけた助手が美しい小鳥を持ち帰ったのである。ウォレスは有頂天になった。ついにキングオブパラダ

イスの完全な標本を手に入れたのだ。ヨーロッパ人の誰一人としてその完璧な姿を見たことのない、天然の美の極上のものが、今かれの手の中にある。

はるか遠い古代から、この美しい鳥たちが暗く陰鬱な森の中で生まれ、暮らし、死んで、世代交代を重ねて来た歴史をウォレスは思った。この未開世界の中に、その美を愛でる知性の目は存在しない。これほど優美な生き物が未開のジャングルの中に住む野蛮で知性の未発達な人間にその美と魅力を示すしかないという美の浪費の不合理さの一方で、文明化した人間がこの遠隔地の処女林に光を当て、住民にモラルや知性を教えたとき、それまでバランスの取れていた自然の関係が乱されて、この鳥たちが持っていた美しさが低下し、あるいは個体数が減少し、絶滅に向かうかもしれない。かれはすべての生き物が、そして大自然が、人間のために作られているのではない、という考えをそのとき抱いた。

［ 続く ］

「イギリス人ウォレス（１０）」（２０２１年０４月２２日）

ウォレスはその場所に二週間滞在して、同居している土着民の生活を間近に観察した。未開人の生活は単調さそのものだったとウォレスは書いている。まず食物に関しては、アルのひとびとはコメやトウモロコシやサゴやパンなどの主食を持っていない。かれらが食べるのは野菜・バナナ・ヤム・サツマイモ・未加工サゴなどで、サトウキビやビンロウジ、ガンビルやタバコを頻繁に噛んでいる。海岸部であれば、魚介類をよく獲るが、内陸に住む者が魚介類を獲りに行くのは稀であり、また時にはイノシシやカンガルーを狩ることがあっても、それはもっと稀だ。野菜と果実だけで生きているかれらはたいてい皮膚病や脚関節の潰瘍を持っている。ムラユ人のようにコメを主食にしている者たちにそのような疾病傾向は見られない。

ビンロウジとタバコ以外のアル人の贅沢はアラッで、外部から商人が持ち込んで来て、とても廉く売る。一日の漁労や籐のカット仕事で、半ガロンのアラッが手に入る。収穫期に集めたナマコやツバメの巣は半ガロン瓶のアラッ１５本分になる。それが手に入ると、家中の人間がそれを飲みつくすまで昼も夜も飲み続けるのだそうだ。

男たちはたいてい何時間も、時には日がな一日何もせず家の中で座り込む。野菜やサゴなどの食べ物を外から持ち込んでくるのは女たちだ。男はときどき狩りや魚取りを行い、あるいは家やカヌーを手入れしても、かれらは働くことを最小限にして、何もせずにただブラブラしているのを愉しんでいるように見える。日々の暮らしの単調さにバラエティを持たせたり、愉しみと呼べるようなものを持つことなく、ただブラブラしておしゃべりすることのみを人生の愉しみにしているようだ。

実際、かれらのおしゃべりはたいへんなものである。叫びや喚きや狂ったような笑いを中に挟んで、騒々しいおしゃべりが続く。ウォレスには何が話されているのか少しもわからないが、ウォレスが蚊帳の中に入って寝込んでしまっても、男と女と子供たちの狂騒曲は終わらない。助手のアリは、こんなにおしゃべり好きな種族を始めて見た、とウォレスに語っている。

アル人はパプア人より艶のある巻き毛を持ち、外見的にパプア人と異なるヨーロッパ的な繊細さを備えた容貌を持っていることにウォレスは気付いていたが、かれはその原因と思われる要素をそこで発見した。かれらが会話の中で使う「アカボ」という言葉の意味を尋ねて、「終わった」の意味であるとの説明を聞いたとき、ここでもポルトガル人の姿がウォレスの頭をよぎった。「ジャフイ」という言葉もしばしば耳にしたし、「ポルコ」という人名もウォレスの頭の中でつながった。

ポルトガル人はこの地までやってきて地元民と交わり、子孫を残すと共に文化の一部も残した。アル人の中には、ムラユ人・オランダ人・華人との混血子孫の特徴を示す者もたくさんいる。ドボには、ジャワ人やアンボン人がアル人の妻を持ち、家庭を築いて

混血の子供たちと暮らしているケースも見られた。そのような人種的混交がアル人の種族の外見的な特徴を作り出してきたことは大いに想像されるものだ。それはポルトガル人が来た三百年前よりもっと古い時代から起こっていたかもしれない。

アルはアンボンのオランダ行政府の所轄になっていて、オランダの砲艦がパトロールにやってくる。このような辺境の土地には折にふれて海賊が横行し、島の住民を襲って金になる物を奪って行く。だから島民たちもバジャッ bajak を恐れ、対抗するために武器を取る。

ウォレスがドボを発つ前にパトロール艦が到着しており、海賊はそれを恐れて鳴りを潜めていることを知っているウォレスは、その場所から島の裏側へ行くことを考えた。舟の漕ぎ手を募ると、みんな海賊を怖がって志願する者がいないから、海賊の話を一笑に伏してともかく漕ぎ手を雇い、出発した。[続く]

「イギリス人ウォレス（１１）」（２０２１年０４月２３日）

ウォレス一行は島の中央部にある村に行って滞在することにした。そこの住民は鳥を捕まえて海岸部に持って行き、バーターを行っている。また混血が進んだ海岸部よりもアル土着民の要素をたくさん残しているにちがいあるまい。

確かに内陸部の住民は混血要素がたいへん少なかったので、間近でじっくり観察することができたが、おしゃべり好きなのはまるで同じだ。朝から夜まで、休みなしに大声でしゃべり、叫び、笑っている。

男たちから子供までが、弓矢の名人だ。動き回るときには必ず弓矢を持っている。あらゆる種類の鳥を、時にはイノシシやカンガルーを射る。それらの肉を食べるので、野菜と果実だけの食事をしているひとびとよりも身体が健康だ。あるとき、狩ったクスク

スを見せてくれた。ウォレスが買おうとすると、ダメだと言った。かれらは肉を食いたいのだ。ウォレスはその皮を買い、すぐに皮をはいで肉をかれらに渡した。

村人たちはウォレスの国の名前を知りたがった。はじめて見た白人の国の名前が言えなければ、それを話題にすることさえ難しい。つまり話のタネの価値が半減してしまうのである。ウォレスがEnglandと答えると、みんなその言葉を真似したが、うまく発音できない。するとひとりの老人が、本当の名前を教えろと言い出した。「このわしの国はワヌンバイで、わしはオランワヌンバイ。ほら、誰にでも言えるだろう。ところがあんたの国は何だって？ Ang-lang? Anger-lang? N-glung? そんな誰にも言えないような国があってたまるか。あんたはわしらをからかっているのか？それとも何かわけがあって本当の名前を隠したいのだろう。」

ウォレスは本当だと言い張ったものの一座は信用せず、本当の名を隠したいのだということに落ち着いたようだ。更におなじみの質問が来た。「あんたはここで捕まえた鳥や虫などの生き物を丁寧に剥製にして箱に詰めているが、いったい何のためなのか？」

それはどこでも受ける質問であり、この村に来たときからも何人もが尋ねていた。ウォレスはいつものように答えた。「わたしの国に持って帰ってみんなに見せるのだ。生きている時のような姿にして飾ると、みんなはこれを見るために集まって来る。」しかし同じ老人が反論した。「あんたの国はキャリコやガラスやナイフなどのもっと素晴らしいものを作っている。ひとが見に来るのはそういうものだ。鳥や虫を見たってしようがないではないか。ひとはもっと良い物を見たいのだ。そもそも、どうしてそのように厳重に箱に入れるのか？あんたがそれを持って海に戻ったら、箱の中のものに何が起こるのか？」

ウォレスは冗談交じりに反問した。「何が起こると思う？」得たりとばかり、老人が答えた。「みんな生き返るのだろう。あんたたちは海の上で食べ物に困らない。」老人は続けて言う。「あんたが来る前、何日も雨が降り続いた。ところがあんたが来てか

ら、好天続きだ。わしにはもうよく分かっている。あんたはわしを騙すことはできない。」ウォレスはついに魔法使いにされてしまったようだ。

ここでは毎年９～１０月が乾季のピークになる。その時期になると水が得られなくなるために村人は森の中の水が残っている場所へ移動して暮らす。あるいは大きな竹筒を持って水を汲みに何キロも通う。持ち帰った水は貴重品のように大切に扱う。

その時期には、数百もの鳥や獣が渇死することもある。水のある場所に網を張ったり、そこで見張っていれば、珍しい生き物が捕り放題だ。ぜひ、ここでの滞在を延ばせ、と村人が言ってくれたのだが、ウォレスはそれに応じることができなかった。[続く]

「イギリス人ウォレス（１２）」（２０２１年０４月２６日）

ウォレスはワヌンバイで６週間滞在し、大量の成果を得ることができた。しかも、そこでの滞在は快適な人間関係の下で行われ、かれは未開人オランワヌンバイとの交際に深い人間的なつながりを築き、かれらの人柄を愛した。そこを去るにあたって、またここに戻って来たいと本心から思った。

村人たちはウォレスが去るのを悲しんでいるように見えた。たとえその悲しみの大部分を、自分たちにたいした値打ちのない虫や鳥を畑や農園の往復のときに適当に捕まえて帰ればタバコやビンロウジ、あるいはビーズや銅銭になるという、かつて一度もなかった幸運、さらには時にコメ・魚・塩などを分けてくれと頼むとそれが手に入った便利さなどが、その地にはじめてやってきた白人が去ることによって消滅してしまうという失望が占めていたとしても、長期間、起居を共にして気心の知れた人間との別れがもたらす悲しみがこの素朴なひとびとの心に混じっていなかったはずはないだろう。

ウォレスは残った塩やタバコをみんなに分け与え、家のオーナーにはアラッを与えて餞別にした。５月９日の夜明け前に舟は出発し、追い風のおかげでその日夕方遅く、一行はドボに到着した。

ドボに戻ると、そこは人間であふれかえっており、空き家はすべて埋まり、更に家が建てられているありさまだった。ウォレスは巡回監視官が来た時に審問を行う建物に入った。監視官はすでに去っていて、次に来るまでそこは使われないからだ。

ドボはとても活気のある場所に変わっていた。船はすべて浜に引き上げられて帰りの航海を待っている。たくさんの小舟が島の周囲を巡って交易し、故郷へ運ぶ商品を持ち帰ってくる。

今年ドボに来たマカッサルからの大型プラフは１５隻、そしてセラム、ゴラム、ケイなどから来た小型船は数百隻に上った。それらの船がアルから持ち帰る品は真珠母とナマコが最大で、べっ甲はそれよりちょっと少なく、さらにツバメの巣・真珠・装飾用樹木と木材・極楽鳥などで占められている。それがアルの輸出商品である。一方でアルに輸入されるものはアラッ３千箱（半ガロン瓶が１５本でひと箱）、それがアル人の年間消費量になっている。セレベス産衣料品は強靭なために人気が高い。加えてイギリス製キャリコとアメリカ製無漂白綿布、普通の陶器類、粗悪な家庭用刃物類、銃、火薬、ゴン、小型黄銅砲、象牙など。最後の三つはアル人が結婚する時に必要とする財産だ。妻をもらうとき、それが結納に使われる。

薪が山積みされた家の裏で、帆布や船の部品の修繕が行われている。また商品の真珠母は紐を通して一括りにされ、燻されたナマコは乱雑に並べられて天日干しされている。セラムやゴラムから来た船は戻り航海のためにサゴケーキをたっぷりと船に積み込み中だ。

色とりどりのさまざまな美しい鳥が家の表につながれてさえずり、放し飼いのカスワリが歩き回り、森で捕まえられたカンガルーがもう人間に馴れてじゃれついてくる。夕方になれば、タムタムやジョーズハープ、そして時おりバイオリンの音が遠く近く音楽を奏で、メランコリーなムラユ曲が夜半まで続く。

ひとびとは昼間、闘鶏で興奮し、籐作りのボールを蹴って遊ぶ。あるときは、何の行き違いか、喧嘩が起こりそうになり、一対一でなくそれぞれの二十人近い仲間がナイフやクリスを手にして対峙した。仲裁が入って長時間の話し合いのあと、何事もなく解散して緊張はほぐれた。そのあと、そのときの怨恨による喧嘩は何も起こらなかったようだ。

［ 続く ］

「イギリス人ウォレス（１３）」（２０２１年０４月２７日）

風向きが変わるまで、ウォレスはドボ近辺の自然の中で標本採集を行ったが、最初来たときよりも生き物が減っている印象を受けた。極楽鳥をもっと手に入れようと考えたウォレスは助手のアリをワヌンバイのかれらが泊った家に送った。その代金としてかなりの枚数の銀貨を持たせたが、アリは熱病にかかって数日間その家で手当てを受け、病気の癒えたあと、素晴らしい極楽鳥を１６羽持ち帰って来た。しかもそれに見合うだけの銀貨と交換され、残りの銀貨は騙されたり強奪されたりしないでそのままウォレスの手に戻ったのである。ウォレスは再び、ワヌンバイの未開人たちの人柄に感動した。

いよいよ６月の終わりになった。東からの強風が吹くようになれば、ドボに集まっていたひとびとはすべて船に乗って故郷に帰る。そしてドボは無人の境になるのである。みんなが一斉に帰り支度をはじめ、通りは大いに混雑した。船に帆を立て、貨物を積み込み、水や食糧を積み込んで出帆の準備に余念がない。

そして毎日、アルの島々のはるかな遠隔地からアル人が舟に乗ってやってきた。バナナやサトウキビをタバコやサゴケーキなどとバーターするためだ。かれらにとってはこのシーズンの最期のチャンスなのだから。

７月２日、マカッサルから来た１５隻のプラフは一斉に出帆した。船団を組んで帰ることに話が着いていたのだ。船団はバンダ島の南を通過してから西に進路を取り、ブトン西方の島影を見るまで三日間、大洋の中を南東からの持続的な風を受けながら走った。マカッサルに船が到着したのは７月１１日夕方だった。

ウォレスはこのアルの旅をたいへんな満足で終えた。１千６百種９千個の標本がかれの成果だった。極楽鳥の標本を多数得たことがかれに大きい満足を与えた。それらの標本の生態とともに、ヨーロッパ社会にとってまったく未知だった未開種族の暮らしを実観察できたことも、かれの満足度をさらに高めることになった。

メスマン氏の持ち家に戻ったウォレスは、アルの旅で集めた標本の整理に没頭した。それが終わった時、ひと月が経過していた。それをシンガポール向けに発送し、シンガポールからロンドンに送られた。ロンドンのエージェント、サムエル・ステイ―ブンス宛に送られたそれらの標本は、１０万米ドル相当の価値を持っていたそうだ。

ウォレスはまた、自分の銃を修理し、イギリスから送られて来た新しい銃ならびに採集と標本作りに必要な種々の器材を受取った。そして、年末までどうしようかと考えた。

いろいろと情報を集めた末に、ウォレスはメスマン氏の兄が住んでいるマロス Maros を訪れることにした。マロスはマカッサルから３０マイルほど北にある土地だ。マカッサルのレシデンから通行証をもらい、舟を雇って夕方マカッサルを後にした。舟は夜中に海岸沿いを走り、夜明けごろマロス川に入った。村に到着したのは午後３時ごろだった。

かれはすぐに副レシデンを訪れて荷物運び人を１０人集めてもらい、ウォレス自身のために馬を貸してもらった。夜のうちに運び人が来る手筈になっていたので、明朝早く出発するためにウォレスは舟の中で眠った。ところが夜のうちに来たのは一部分で、朝になってやっと全員がそろい、しかもみんなが軽い荷物を抱きしめようとしてひと悶着あって、荷物を公平に分けるのに手間取った。やっと８時ごろになって、メスマン氏の兄の農場への行進が始まった。

兄氏はウォレスを丁重に歓迎してくれ、滞在する間に住む家を数日で建ててくれた。兄氏は農場暮らしをたいへんエンジョイしていた。イノシシやシカ、野鶏、サイ鳥、ヒメアオ鳩などが豊富にいて、かれの銃と犬が毎週１～２頭の食材を作り出す。野牛のミルクもたくさん採れ、自分でバターを作っている。ウォレスはそこに滞在中、毎朝そのミルクを心行くまで堪能した。農場の一部でコメとコーヒーが作られ、またタバコすら育てられており、完璧な自給自足が行われている。ニワトリやアヒルを飼っていて、その肉や卵もたっぷり手に入る。たくさん生えているアレンヤシからはニラが得られ、その砂糖はちょっとした甘いおやつに最適であり、またニラをトゥアッにしてビール代わりに飲む。ウォレスはニラあるいはトゥアッのことを saguier と書いている。北スラウェシのミナハサ地方では今でもサグエル saguer という言葉が使われているが、南スラウェシではどうだろうか？[続く]

「イギリス人ウォレス（１４）」（２０２１年０４月２８日）

現代のマロスは蝶の宝庫として世界に知られているバンティムルン Bantimurung を東の山系に抱くマカッサル郊外の村だ。世界のだれもがそんなことを知らない時代にウォレスがそこへやってきたということは実に、奇跡的なできごとのように思われる。ウォレスは自分の家を出て、助手やガイドと共にバンティムルンに向かった。ただしバンティムルンという地名はウォレスの著書に書かれていない。９月末の、雨季が始まりかか

った季節の中を、３時間かけてかれは蝶の宝庫にたどり着いたのである。ウォレスはその一帯で美しい新種の蝶を多数捕獲した。

１０月に入って雨がちの天候が続くようになると、昆虫が増えるために採集は大いに期待できるのだが、いかんせん、ウォレスの家は乾季用に建てられているために、大量の標本に水濡れのリスクが高まる。マロスでの活動を諦めたかれは、１１月初めにマカッサルに戻った。そしてマカッサルからアンボンへ行くために、１１月１９日にオランダ政庁の郵便船に乗ったのである。ウォレスはその地名をアンボイナ Amboyna と書いているが、現代インドネシア語のアンボンで通すことにする。

郵便船は蒸気動力で走り、好天のときで時速６マイルだった。この船に乗った客はウォレスの他に三人しかおらず、余裕満天のスペースと丁重な待遇を心行くまで楽しめた。これまで、こんな愉しい旅は経験したことがないとウォレスは書いている。

客室係サーバントはおらず、乗客が自分で連れて来ることになっている[3]。給仕係は食堂やサロンで食事に関連したサービスをするだけ。船の中では、午前６時にティ—かコーヒーが希望者に提供される。７時から８時の間にティ—と卵やサーディンなどの軽い朝食が供される。１０時には、マデイラワイン、ジン、ビターズが１１時の本格的な朝食の食前酒としてデッキに用意される。この朝食は夕食と違わない内容で、ただスープだけがない。

午後３時にはティ—とコーヒー、５時にビターズなどが出て、６時半にビールとクラレワイン付きの夕飯、そして８時のティ—とコーヒーでその日の締めとなる。またビールとソーダ水はいつでも頼めるので、航海の日々をひもじく過ごすことは起こらない。

[3] 客室係に用事がある時は乗客が客室係を呼びに行く。

船はマカッサルからティモール島西端のクパン Kupang に１１月２４日に入り、更に島の北岸沿いを東航してディリ Dili に泊まった。１１月２６日にディリを出ると、次は一路バンダ Banda 島を目指す。

バンダ島到着は１１月２８日。そしてその翌日、船はついにアンボンに向けて出港した。バンダ島の住民についてウォレスは、人口の四分の三は混血であり、ムラユ・パプア・アラブ・ポルトガル・オランダがさまざまな割合で入り混じっていると見た。ムラユとパプアがベースだが、パプアの方がウエイトが大きい。多分パプア系が最初の土着民であり、ポルトガルがバンダを占領した時、かれらの一部がケイ島に移って現在に至っているというのがウォレスの見解だった。

バンダ島から２０時間で船はアンボンに到着した。ウォレスはドクター・モーニケ宛の紹介状を持って来た。モーニケ氏はドイツ人で、モルッカ Moluccas（現在のマルク）の筆頭医療担当官である。かれは英語の読み書きはできるのだが話せないので、ふたりはフランス語で会話した。夕方、モーニケ氏はモルッカ行政長官の官邸にウォレスを案内し、行政長官は滞在中の便宜をはかることをウォレスに約束してくれた。

島の北側内陸部の農園の小屋を３週間借りる手はずを整えていざ向かおうとしたものの、舟と人手を雇おうとして手間取ってしまった。アンボン人はまったく働こうとしな

い。やっとの思いでそこにたどり着き、採集活動を開始した。午前中は出歩き、夕方はたいていベランダで読書し、陽が落ちてから灯火に集まって来る虫を捕る。[続く]

「イギリス人ウォレス（１５）」（２０２１年０４月２９日）

ある夜９時ごろ、部屋の頭の上で何やら重い動物が這っているような音がした。しかし音はすぐに止み、ウォレスは床に就いた。翌日の午後、採集活動で疲れたかれは夕食前のひととき、カウチで横になり、本を読んでいた。目が天井に行って、そこに何か塊りがあるのに気付いた。最初は棟木と屋根の間に置いた亀の甲羅と思ったが、じっくりと見つめているうちにはっきりした。それはとぐろを巻いた巨大な蛇だったのである。昨日の怪音の正体がいま判明した。パイトンが柱のひとつをよじ登り、屋根の下を心地よい居場所を探して移動していたのだ。

ウォレスが屋根の下に蛇がいることを助手の少年たちに知らせると、ふたりはすぐに家から飛び出してウォレスに早く家から出るように言う。ふたりは怯えて何もできそうにないことを見て取ったウォレスは、農園の作業者を呼んで来させた。

６人の作業者がやってきて家の外で相談し、ブル Buru 島人がひとり進み出て来た。ブル島は蛇の多い島だ。かれは籐でしっかりした輪を作り、他方の手に棒を持って、パイトンに近付いた。棒でパイトンを突くと、パイトンはとぐろを解いて身構える。すると籐の輪をパイトンの頭から通して胴まで下げ、そうやって床に引きずり下ろした。

人間と大蛇の格闘が始まった。パイトンは柱やいすに身体を巻きつけて抵抗する。しかしブル島人はついに蛇のしっぽをつかむのに成功し、全速力で家の外に飛び出した。５フィートくらいの高さの家の床から地面に飛び降りると、パイトンを振り回して近くの木に頭を叩きつけた。しかしそれはうまく行かず、蛇は近くの倒木の下に潜り込んだ。再び棒でつついて追い出し、しっぽをつかんでスイングをかけ、木に頭を打ちつけ、ぐったりしたところを手斧で頭をはねた。体長１２フィートで胴の太いパイトンが

地面に横たわった。犬や小さい子供なら、きっとひと呑みだろう。ウォレスはそいつの下で一晩ぐっすりと眠りこんでいたのである。

ウォレスはクリスマスイブにアンボンに戻り、モーニケ氏の邸宅に１０日間滞在した。農園での滞在は二十日間で、そのうちの５～６日は天候や体調のために十分な活動ができなかったにもかかわらず、ウォレスは十二分に満足できる採集成果をあげた。

アンボンでの西洋人の生活についてウォレスは、熱帯の条件に適応した習慣が作られていると述べている。たいがいのビジネスは朝７時から１２時までの午前中に行われる。暑熱の日中は緩い綿の衣服を着て休息し、夕方に薄い洋服を着て訪問し合う。しばしば日没後に帽子をかぶらないで散歩する。クリスマスはあまり賑やかにせず、新年に年賀の挨拶訪問をし合い、夕方に行政長官の開催するパーティに集まる。

町に住んでいるアンボンの土着民はポルトガル・ムラユ・パプアまたはセラムの三つが混じり合い、更に華人やオランダの血が混じっている者もいる。古くからのキリスト教徒はポルトガルの影響を外見や慣習の中に強く漂わせている。ましてやポルトガル語の単語が現在の地元言語であるムラユ語の中に頻繁に使われるのだから、なおさらだ。

男たちはふだん、白いぴっちりしたシャツに黒いズボンをはき、シャツの上に黒いフロックを着ているが、祭りや聖なる日には燕尾服とシルクハットで集まる。女たちは黒ずくめのドレスを着る。今は全員がプロテスタントになっていても、祭りや結婚の儀式などでは、カトリック式のやり方や音楽が使われ、音楽にはゴンが混じり、踊りは土着民風のものが行われている。[続く]

「イギリス人ウォレス（１６）」（２０２１年０４月３０日）

１８５８年１月４日、ウォレスはアンボンからテルナーテに移動した。テルナーテの土を踏んだのは１月８日の朝。ここでウォレスが頼ったのは土着したオランダ人のダウフェンボーデン氏だった。紹介状を持って同氏を訪れたウォレスは、同氏に家を一軒世話してもらった。

キングオブテルナーテの異名をとるダウフェンボーデン氏は大金持ちだ。テルナーテの街の半分はかれの地所であり、多数の船を持ち、百人超の奴隷を有している。当然、テルナーテのラジャと親しく、ラジャとラジャの家臣への影響力も小さくない。ラジャを動かしたければキングにアプローチすればいい、という意味でかれがその異名をとっているのかもしれない。

ダウフェンボーデン氏はイギリスで教育を受けたために、完璧な英語を話し、文学や科学に造詣が深く、この地域一帯では稀有な知性だと言えよう。

世話してもらった家はオーナーが中華系土着民で、ウォレスはその家を三年間の借家契約にした。その間ウォレイシアのあちこちに出向いては戻って来るベースキャンプの役割をその家に持たせたのである。テルナーテは西洋人の生活をかなりのレベルで満たしてくれる町だ。近辺各地の未開の土地で３～４カ月暮らしたあとにこの家に戻って来ると、ミルクや焼き立てのパン、魚・卵・肉・野菜をいつでも食べられて、休養と栄養補給に努めることができる。

その家はポルトガル人が海岸に建てた要塞のすぐ傍にあり、街に近く、通りを５分も歩けばパサルと海岸に着く。山に向かう逆方向の道に西洋人の家は一軒もない。ここから北東に向かって１マイルほどが原住民の居住地区になっていて、山や街の外へ出かける場合も気を遣わないで行える。家の中は十分な広さがあって、荷造りや開梱、標本の仕分けや整理が楽に行える。

この平屋建ての家は広さが４０フィートの方形で、表と裏にベランダがあり、中央ホールの左右に部屋が四つある。家屋の周囲は果樹で囲まれ、常に冷たい水が汲める深井戸が裏にある。家の屋根は高さ３フィートの石の壁の上に立てられた頑丈な角材の柱で支えられている。ベランダを除いて、柱の間はサゴヤシの葉脈が整然と並べられた枠が張られていて、天井も壁と同じようになっている。床はスタッコ造りだ。

その家は現在、テルナーテ市中央テルナーテ郡サンティオン町ジュマプアサ通りに位置する家屋だとされていて、家の横をアルフレッド・ラッセル・ウォレス小路が走っている。２００８年にインドネシア科学院LIPIに所属するウォレス財団がその家に記念碑を建てることを計画した。そのときの住人はパウ~ガ・チャンドラ氏で、その家は１９８４年に前の住人から買ったとのことだった。ウォレス財団が訪れるまで、チャンドラ氏はウォレスのことをまったく知らなかった。

財団がこの家をウォレスの住居と判定したのは、かれの著書に述べられている位置と周辺環境、そして家の裏手に井戸があることなどが一致したためだ。だが郷土歴史家のひとりは、「調査から決定までが早すぎる。もっと念入りな調査が行われるべきだ。」と述べて、その判断に全幅の信頼が置けないことを指摘している。

記念碑の定礎式がテルナーテ市長列席の下に行われたものの、２０１２年のコンパス紙記事によれば、記念碑はいまだに建っていない。財団とチャンドラ氏の間での土地の移管問題が決着していないためだそうだ。

現在ジュマプアサ通りという名称になっている表通りは２００８年にそれまでのヌリ通りからウォレス通りに変えられた。ところが２０１０年になって、ウォレス通りはジュマプアサ通りにまた名称変更されたのである。[続く]

「イギリス人ウォレス（１７）」（２０２１年０５月０３日）

ウォレスが印した足跡は現在のテルナーテのどこを探しても見つからない。チャンドラ氏の自宅をときどき西洋人学者が訪れることがある。ウォレスがウォレイシアでの調査活動のための本拠地を置いたテルナーテに、ウォレスの足跡を求めてやってくるようだ。

チャンドラ氏の家がそうだと言われているだけであって、チャンドラ氏にそんな確信はない。しかもチャンドラ氏は自分の家族の暮らしの便宜のためにその家に手を加えている。裏の井戸は既に閉ざされて、もう使われていない。１５０年超も昔の家屋と設備をいまだに使っている人間など、いるはずもあるまい。やってきた訪問者たちはたいてい、不満そうな顔でチャンドラ氏の住居を辞去するばかりだったそうだ。

ところが２０１９年のコンパス紙に、ウォレスの家論争に対抗馬がいることが報道された。ジュマプアサ通りの第一候補者は現在空き家になっていて、オーナーのチャンドラ氏はマルクに住んでいる。第二候補者はテルナーテ王宮に近いソアシオ地区にある家で、王族のひとりが住んでいて、ウォレスが描写した家によく似ており、裏に井戸がある。しかし、その二者は１キロほど離れているのだ。ソアシオ地区のその家も近くに要塞があるが、それは放置されたポルトガル要塞でなく、オランダのオラニェ要塞なのである。オラニェ要塞は１６０７年に古いポルトガル要塞を壊して建てられたものだ。

ともあれ、活動のための基地を手に入れたウォレスはテルナーテのレシデンと警察に挨拶に訪れてテルナーテ住民のひとりになり、このベースキャンプを中心にしたマルクの他の島々やニューギニアへの探検旅行の長期計画を組む愉しみを満喫した。

テルナーテ住民についてウォレスは、テルナーテムラユ人、オランスラニ、オランダ人の三種類だと書いている。オランスラニ orang serani は現代インドネシア語でキリスト教徒を指す言葉で、ナザレのひとびとを意味する Nasrani に由来している。ウォレ

スは自著の中で orang Sirani と書き、ポルトガル人キリスト教徒の子孫を意味するムラユ語と説明している。

テルナーテにやってきたもっとも古い種族はマカッサルと組んだムラユ人だったようだ。かれらはジャイロロに王国を築いて在来土着民を駆逐した。現代インドネシアでの地名は Jailolo が標準になっているものの、ウォレスは Gilolo と綴っていて、多分当時の地元での発音がジロロだったように思われる。ウォレスがジロロと述べている島の名称はハルマヘラ島のことであり、今ジャイロロという言葉が示すものは島内の郡の名称、および人と文化そして王国名に関して使われている。

テルナーテとジャイロロではムラユ語ベースのたいへんよく似た言葉が話されており、外来ムラユ人たちは原住民の女を妻にして子孫を残し、ムラユ語を使う混血の種族を作ったにちがいない。その後、ポルトガル人がやってきて既に混血している地元の女性を妻にし、キリスト教徒の家庭を作ったのがオランスラニの先祖だ。更に華人やアラブ人もやってきて土着化し、血と文化が入り混じった。

それ以外にも、パプア人や域内他島の者が奴隷としてテルナーテに定住している。このテルナーテで、奴隷とご主人様という関係からは想像もつかない、常識からまるで外れたありさまをウォレスは実見した。

ウォレスはテルナーテに居を構えるとさっそく、ジャイロロを訪れることにした。するとダウフェンボーデン氏の息子ふたりと借家オーナーの弟の三人が同行してくれることになった。かれらが船とクルーを用意してくれたのだが、午前３時出発のオーダーをしたのにクルーは誰ひとりやって来ず、４人は暗闇の中で待ちぼうけを食わされた。クルーはかれらが所有している奴隷だ。[続く]

「イギリス人ウォレス（１８）」（２０２１年０５月０４日）

５時になってやっと出現した奴隷たちをご主人様が叱ったが、その叱り方はいかにも甘ったるく熱のないもので、奴隷たちからは笑いと冗談だけが戻って来た。いざ船に乗り込もうとすると、リーダー格の男が「自分は行かない」と言い出した。ご主人様はその奴隷を何とか従わせようと説得し、懇願するありさま。そして最後に「行けば客人がきっと何かくれる」とウォレスを釣り針にくくりつけたのである。

向こうに着けば、飲み食いは思うがままで、しかも大してすることはない、という説明とその釣り針が効果を発揮して船はやっと出発し、３時間の櫂漕ぎと帆走でセディンゴレ Sedingole に到着した。しかしそこは鳥や虫の貧しい地区だったため、ウォレスはドディンガ Dodinga へ移ることを希望した。

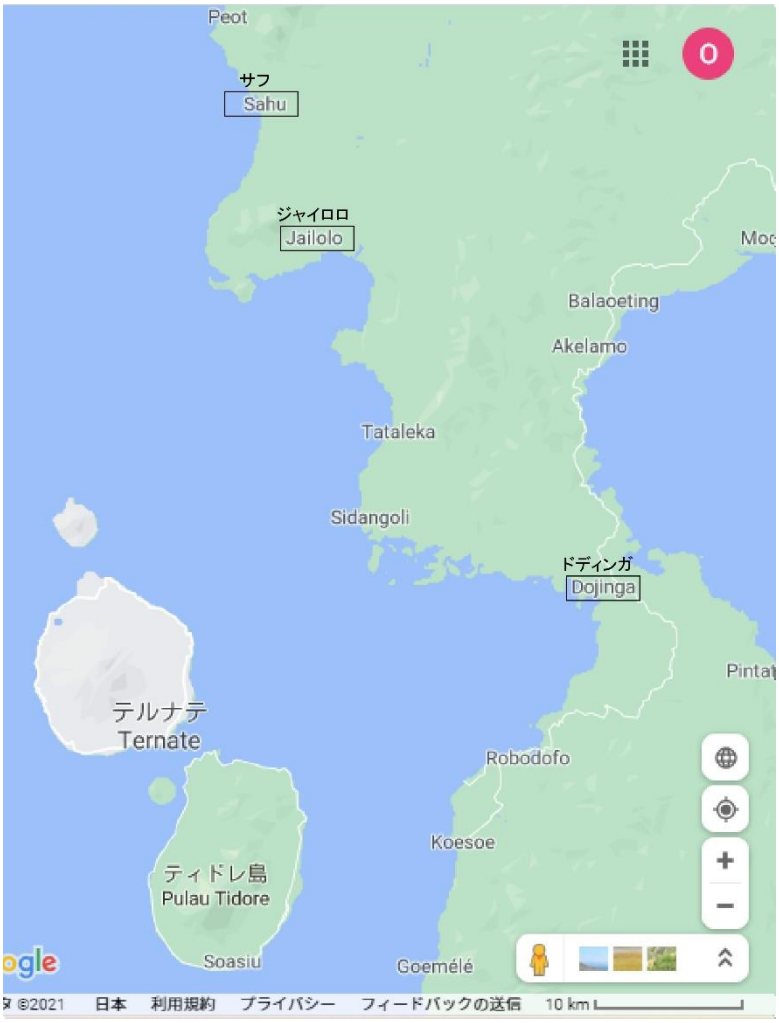
セディンゴレで二日間、一行は鹿や鳥を狩ったが、たいした成果はなかった。いよいよドディンガへ出発しようとしたとき、また奴隷の反乱が起こった。「ドディンガ？俺たちゃそんなとこへ行かないよ。テルナーテに戻るんだ。」ご主人様たちはそれに従うほかなく、ウォレスとふたりの助手そして荷物はセディンゴレに残され、テルナーテのひとびとは自分の町へ帰って行った。

幸運にも、ウォレス一行はそこで小舟を雇うことができ、その夜のうちにドディンガに到着した。ドディンガはテルナーテのちょうど対岸に位置している。ウォレスはすぐに村長を訪ねて空き家を求めたが、一軒もない。仕方なく、荷物を下ろしてあった浜辺で茶を飲むしかなかった。

うまい具合に、ひと月５フルデンの家賃を払えば家を空けてくれると言う住民がいて、屋根の雨漏り対策をきちんと行うことを条件に、ウォレスはその家に入った。家主は毎日ウォレスを見に来て、話をした。ウォレスが条件の屋根改善をその都度要求しても、返事は毎回「ヤー、ナンティ」だけであり、しびれを切らしたウォレスが家賃に条件を付けた。それがなされるまで、一日当たり四分の一フルデンを家賃から引き、自分

の物が濡れたら１フルデンを引く。家主はさっそくその仕事を半時間ほど行い、必要最小限のことだけをして帰った。

ドディンガに近い場所にポルトガルの要塞が壊れかかった姿で建っており、そこにはオランダの一部隊が駐屯している。ひとりのオランダ人伍長に率いられた４人のジャワ人兵士がその兵力で、それがこの島でオランダ政庁を代表している唯一の存在だ。



村人はテルナーテ人ばかりであり、原住民がアルフロスAlfurosと呼んでいる土着民の姿を見ることがない。アルフロスは島の東岸部や北側半島の内陸部に住んでいるので、ウォレスはアルフロスを見に行きたがったが、このときは果たされていない。

１８５８年２月、ウォレスはドディンガでの活動の合間に、その借家で「原種から無限に離れようとする変種の傾向について」と題する２０ページにわたる論文を、発熱の状態下に書いた、とコンパス紙の記事のひとつは述べているが、別の記事では、マラリアのせいと考えられている発熱状態下にウォレスはドディンガの家で適者生存原理の構想をまとめ、テルナーテに戻ってからその手書き論文を書

き上げた、と記されている。その論文の作成場所名としてテルナーテと書かれていたために、ウォレスの論文は後にテルナーテペーパーという名称で人口に膾炙した。

ウォレスの論文は、東インドにおける実地調査を基にしてかれが考えた、生物の種が変化するプロセスとその傾向に関する概要を仮説にまとめたものだ。その仮説の根本をなす理論は、強い種が生き残り弱い種が滅びるという大自然の摂理だった。その原理はいま自然淘汰・適者生存という名称で呼ばれている。[続く]

「イギリス人ウォレス（１９）」（２０２１年０５月０５日）

その論文をダーウィンに送って、ロンドンの学術界に発表してもらおうとウォレスは考えたのである。テルナーテからシンガポール経由でロンドンに送られたその論文にダーウィンは強いショックを受けたという話がある。ダーウィンと友人たちは生物進化の理論について、ウォレスが看破したものと同じような説を立てていたのだが、ウォレスの論文はその内容の明快さにおいて、ダーウィンたちの一歩先を歩んでいたというコメントもネット上に見られる。

１８５８年７月１日に行われたロンドンのリンネソサエティ会合でダーウィンはウォレスからの依頼を果たした。それから１５カ月ほど後に、ダーウィンの著作「種の起源」がヨーロッパの学術界を震撼させることになる。

パプアへの旅からテルナーテに戻った後の１８５８年９月に、ウォレスはまたジャイロロを訪れた。この二度目の訪問では、北の半島部のジャイロロ村へ行った。そこは８０年くらい昔にテルナーテのスルタンが住んでいた土地で、オランダ政庁がスルタンに現在のテルナーテの街に移るよう要請した結果、失われた都になった。

そこには鳥や虫も少なく、成果が期待できなかったためにウォレスはもっと北にあるサフ Sahu 村へ移った。海岸沿いに１２マイルほど北にある場所だ。ウォレスが著書の中でその地名を Sahoe と綴っているのは、オランダ語綴りをそのまま書いたからではあるまいか。

サフにはムスリムとアルフロスがたくさん住んでいて、郊外一円に住んでいるアルフロスが毎日食べ物を売りにサフ村にやってくる。またサフ村の富裕層（たいてい華人やテルナーテ人商人）がかれらの労働力を買うため、それを目的にして来る者も多い。ウォレスはそこでアルフロスの人種的特徴をじっくり観察した。かれらはムラユ系よりもパプア系の特徴を多分に持っている人種だった。身体的特徴に加えて、振舞いもムラユ系のような控えめさがなく、声も傍若無人のうるささだった。

ウォレスはパプア島の鳥の頭の鼻先の北にあるワイゲオ Waigeo 島から戻った後の１８６０年にまたジャイロロ島を訪れ、今度は島の南部へ調査に行ってアルフロスの姿がほとんど見られないことを知った。そこは完璧にムラユ系種族の舞台であり、アルフロスは北部にしか住んでいないのである。

ウォレスの思考がたどりついたのは、この島はムラユ系種族の土地であり、パプア系はもっと後の時代にやってきて島の北側に住み着いたのではないかという推論だった。元々、そこはパプア系種族の領域になっていなかったということだ。

ドディンガからテルナーテに戻ってから、ウォレスはいよいよパプア本島に向かう準備に取り掛かった。原住民とのバーターに使う品物を仕入れ、また助手を４人に増やした。今やウォレスの懐刀になったアリが助手仲間のリーダーになる。助手とは言っても、必要に応じて何でもしなければならないサーバントだ。

１９５８年３月２５日、ダウフェンボーデン氏所有のスクーナー、ヘスターヘレナ号がテルナーテを出帆した。パプア島北岸沿いに通商を行うのである。４月１１日朝、，この船はドレ Dore 湾の外島マンシナム Mansinam 島沖に停泊した。パプア本島側のドレとマンシナム島は海を隔てて３キロほどの距離にあり、マンシナム自体は全長４キロほどの細長い島である。ウォレスが Dorey と綴っているドレはマノクワリ Manokwari の旧名だ。

マンシナム島にはふたりのドイツ人宣教師が住んでパプア人へのキリスト教の布教活動を行っている。そのひとり、オットー師はすぐにヘスターヘレナ号にやってきて、ウォレスを朝食に招いた。

パプアにおける福音伝道の事始めが１８５５年２月５日にマンシナムに上陸したオットー師とガイスラー師のふたりの宣教師なのである。今マンシナム島はパプアのキリスト教伝道発端の地としていくつかの施設が作られている。オランダ政庁がそこに蒸気艦船のための石炭デポを設けていたので、宣教師は最初そのデポに建てられた水夫用の粗末な小屋を住居にした。[続く]

「イギリス人ウォレス（２０）」（２０２１年０５月０６日）

ふたりはティドーレのスルタンからの紹介状を持って来たのだが、原住民はそれを信用しなかった。紹介状には、このふたりは善良な人間であり、善良なる意図と目的を持ってパプアを訪れると書かれているが、スルタンが言う善良という言葉が信用できないということだったのだ。

歴史的にパプアは古い時代からテルナーテ・ティドーレ・バチャンとのつながりを持っていた。１４世紀ごろにはパプアの鳥の頭地域がティドーレスルタン国の支配下に落ちて、乱暴な徴税が行われ、諸権利の執行においてもパプア人に不公平な扱いが行われがちだった。毎年税金を取り立てに来た者が徴税と称して略奪を行い、人間を捕まえて奴隷にした。

ティドーレのスルタン自体がパプア人にとって善良さの欠如した存在と見られていたのだから、善良でない人間が善良という言葉を使っても、なかなか信じてもらえないのも当然だろう。宣教師ふたりはそのあおりを受けたことになる。

放っておけばそのうちにいなくなるだろうと考えて、地元民は宣教師を相手にしなかった。まったく言葉の分からない土地に投げ出されて、しかも住民が相手にしてくれなければ何が行えるだろうか？男たちがみんなそっぽを向けば、あとは女と子供にアプローチするしかない。それでもふたりは相手にしてくれる人間から言葉を学び、ウォレスが来たとき、オットー師はたいへん流暢に現地語を話していた。

ガイスラー師は踵に潰瘍を患い、半年ほど家から出られない状態になっていたので、オットー師だけが船にやってきた。ウォレスは宣教師の家に案内され、ガイスラー師とそのドイツ人の若い妻と一緒に朝食を摂った。夫人は英語もムラユ語も話せなかったので、ウォレスとは何も会話ができなかった。

宣教師たちは聖書の現地語への翻訳を進めているものの、現地語はあまりにも語彙が貧しく、ムラユ語の単語をたくさん使ってその穴埋めをしなければならない。そこでの宣教師たちの活動に原住民があまり好意的でない理由を、ウォレスはかれらが行っているビジネスにあると考えた。もちろんウォレスはティドーレスルタンに関わる背景を知らない。

教団はかれらへの給料が低いことの埋め合わせとして、物品売買を許可した。商行為なのだから、廉く買って高く売るのは当然のことだ。どこの未開人もそうであるように、パプア原住民も将来のことを考えない。食糧が豊富なときは無駄使いをし、食糧が

減ると飢える。コメが収穫されると、その大部分を宣教師に売って、ナイフ・ビーズ・斧・タバコその他の必要品に交換する。数カ月後、雨季になって食糧が減ると、コメを買い戻すために宣教師のところにやってくる。そのためにべっ甲・ナマコ・野生ナツメグなどの品を持って来るのだが、かれらが売ったときの価値よりもはるかに高い。

ビジネスだから当然であり、自分が将来のことを考えないで行った結果がそれなのだというように、果たしてパプアの未開人が考えるかどうか。そうは思えない、とウォレスは書いている。商業的福音伝道に対して原住民が抱く印象は、教えられる内容への信ぴょう性を傷付けるのではないか。

われわれが来たのはあなたがたにより良いものを与えるためであるというイエズス会式のやり方が未開人への布教に際して採られるべきものだろう。未開人から利益を得ながら宗教上での人間のあるべき姿をいくら教えても、うさん臭さが付きまとうのではないだろうか、とウォレスはコメントしている。[続く]

「イギリス人ウォレス（２１）」（２０２１年０５月０７日）

ドレとマンシナムの海岸部居住者たちは海の上に家を建てて住んでおり、家と陸地の間を橋で往来する。ウォレスの住む家をオット一師が原住民に頼んでくれたものの、居住者がいつ海中に落ちるかもしれないような家が用意された。仕方なくウォレスはドレ村側の陸地に家を建てることにした。原住民が手伝いに来てくれて、ウォレスと助手たちと一緒に働いたが、原住民の中にムラユ語を話せる者がひとりもおらず、工事は難渋した。

ウォレス一行が来たのは雨季の終わりごろで、十日間は毎日午後雨が降り、夜中も雨が降り続いた。それから段々と雨が減った。しかし、そのうちにドレは鳥類や虫の貧しい土地であることが分かり、ウォレスは大いに失望した。

周辺の土着民の村を訪れて、鳥や虫を持って来れば買うことを村長に話したが、たいして効果はなかった。野生の鳥・イノシシ・カンガルー・クスクスなどがいるにはいるのだが、普段から土着民はほとんど狩りをせず、したがって白人のために獲物を狩って報酬を得ようとする者も現れなかった。

ドレの住民が交易に訪れる百マイルほど西のアンブバキ Amberbaki にウォレスは助手二人を送って極楽鳥を買わせようとした。ところが、助手が持ち帰って来たものは全く売られていないという報告だった。かれらはアンブバキの森に入って鳥を撃とうとしてみたが、ウォレスの喜びそうな鳥は影も形もなかったそうだ。

ドレ滞在中、ひっきりなしに誰かが病気や怪我に倒れ、助手のひとり、ブトン出身の１８歳くらいの青年が死んだ。ウォレス自身もしばしば、家から出られない日々が散発的に発生した。ここへ来ることを熱望した時と同じくらいの熱意で、このパプアから去りたいと思った、とかれは書いている。

外へ出られるとき、鳥を得ることを諦めたウォレスは新種の昆虫探しに没頭した。ドレを去る日が近付いてきたころに、かれはたくさんの甲虫を採集することができた。６月１日には生涯最大の成果になった一日で９５種の甲虫類を得て、帰宅後ピン刺し作業に６時間を費やしている。

１８５８年７月２２日にヘスターヘレナ号がドレに戻って来た。船はドレに数日間滞在し、２９日にウォレス一行を乗せてテルナーテに向かった。たいていの土地では、そこを去るに当たってウォレスは残念な思いを多少なりとも感じるのだが、ドレについてはそのような感傷は少しもなかったそうだ。憧れのパプア行はどうやらかれに、失敗の評点を与えさせたように思われる。

ヘスターヘレナ号は１７日間かけてテルナーテに到着した。普通はその時期、東あるいは南よりの風が吹くのに、このときはどうしたことか西からの微風が続き、普通の時

期の三倍もの時間がかかってしまった。早くテルナーテに戻って新鮮なミルク入りのコーヒー紅茶、焼き立てのバターパン、うまい鶏肉や魚料理を満喫したかったウォレスにとっては、最後までケチの付いた旅だったと言えよう。

しばらく休養を取ったウォレスは１８５８年９月にふたたびジャイロロを訪れた。このときは、テルナーテのレシデンが北側半島部にウォレスのための家を用意するよう指示を出してくれたので、家探しの必要がなかった。そのとき、ジャイロロ村では成果が得られず、かれはサフ村を訪れた。その話は上に書いた。

サフ村からテルナーテに戻ったウォレスは次にバチャン Bacan 島を訪れることにした。この旅は他のだれも通らないルートなので、舟を借りて自力で航行しなければならない。テルナーテの現地人居住地区へ行って貸し舟を探したところ、小さいボートと大きい船が見つかった。小さい方が廉いことは決まっている。島々を海岸線伝いに航行するのは小さい方が楽であり、安全だ。

ウォレスは四人の助手を同行させることにしていたので、荷物を積み込むと人間が入る余裕のほとんどなくなる小さいボートにもうひとりだけ、水先案内人を雇って加えた。雇ったのはパプア人奴隷で、粗野でなく、注意深いところがウォレスの気に入った。ボートはラウ・ケントンという華人からひと月５フルデンで借りた。[続く]

「イギリス人ウォレス（２２）」（２０２１年０５月１０日）

１８５８年１０月９日朝、一行は海に乗り出した。ところが百ヤードも進まないうちに風が正面から吹いてきたので、仕方なく陸地に寄せる。午後３時ごろ、やっと前進が

可能になった。日没時に砂浜に上陸して食事を摂り、夜７時ごろ移動を再開した。そのときドナティ彗星が出現したのを見て、全員が驚いている。

１０月１０日、風向きが悪く、ティドーレの村近くで時間を過ごすことになる。鳥や昆虫を探してみたものの、珍しいものはまったく見つからなかった。日没ごろやっと出発して隣のマレ Mare 島に達し、朝までそこにいた。

１１日、モティ Moti 島に到着。更に移動を継続して夜８時ごろにマキアン Makian 島に着いた。１２日はマキアン島を海岸沿いに南下し、上陸して採集活動を行う。夕方には島の南端に到着し、そこから次のカヨア Kayoa 島への１５マイルの海峡を渡ることになる。ところがまた風向きが悪くなったために、炎天下に櫂漕ぎを強いられる破目になった。なんとか海峡を渡って対岸に着いたのは夕方。１３時間をかけて１５マイルの海をやっと越えた。

ウォレスはマレを Mareh、モティを Motir、カヨアを Kaioa、バチャンを Batchian と綴っている。

１４日はカヨア島を海岸沿いに南下する。その途中でサンゴ礁の浅瀬に出くわし、全員が海中に降りてボートを引っ張る破目に。夜中に港村に着いたので、そこで一泊することにした。浜辺に近い場所に建物があり、そこはテルナーテのレシデンが業務で訪れるときに使用する宿舎だそうだ。そこにはプリブミ商人たちが泊っていたが、ウォレスはかれらに混じって寝た。

翌朝、ウォレスは村長を訪れて、数日滞在したいからレシデンの宿舎を開けさせるように依頼した。村長がそこへ行くと、ウォレスがそこを使うという話を聞いてプリブミ商人たちはみんなどこかへ引っ越し、空き家になっていた。

ウォレス一行は荷物をその宿舎に入れて仕事をしやすいようにアレンジし、終わるとさっそく採集活動にかかった。ウォレスは昆虫をたくさん採集して、午後、その整理をしていると、大人も子供も総出で村中がウォレスのしていることを見物に来た。

１６日、ウォレスは処女林の中に分け入って素晴らしい場所を発見した。さまざまな甲虫が実にたくさん棲息している。７０種くらいを捕獲した。そのうちの１２種ほどは新種のものであり、それから数日間、かれは毎日そこへ通って新種の数を増やして行った。鳥はたいして魅力的なものが得られなかった。

ウォレスはカヨアの土着民に興味を抱いた。ムラユとパプアのミックスで、テルナーテやジャイロロと同種なのだが、使っている言葉が違っている。周辺の土着語と似てはいるものの、明白な違いがある。ひとびとはムスリムであり、したがってテルナーテに従属している。

この土地で採れる果実はパパイヤとパイナップルだけ。コメ・トウモロコシ・バナナは豊富だ。水質の良い湧水はウォレスたちが上陸した場所から近いところにひとつだけあるそうで、全住民がそこの水を飲んでいる。ここの男たちは優れた船大工であり、良い船を作って他の種族に販売している。

カヨアで５日間過ごした後、ウォレス一行はバチャンに向かい、１０月２１日夕方、最終目的地に到着した。バチャンにもテルナーテのレシデンの宿舎がある。バチャンのスルタンの秘書と名乗る人物にレシデンの紹介状を渡すと、秘書氏はその宿舎を使うように勧めた。ところが、そこは水の便が悪く、また建物の構造がウォレスの仕事の便に即しておらず、おまけに原住民居住区の中にあるために、ウォレスはそこを遠慮し、原住民居住区の外の、自然に近くて大自然に出入りしやすい場所にある家を使いたいと依頼した。

すると、村から炭鉱へ行く道路沿いにスルタンの持ち家があるから、明日それを見に行こうという結論になった。炭鉱から４マイルほど手前の道路脇にあるその家に入ることに決めたウォレスは、助手たちに建物を修理させて、翌日そこに入った。その日午後にウォレスはスルタンに面会し、家を借りることの謝意を表明した。[続く]

「イギリス人ウォレス（２３）」（２０２１年０５月１１日）

このスルタンは感受性に満ちた老人で、ウォレスの仕事に興味を抱き、ウォレスのコレクションを見に来ることを約束した。バチャンは鉱物資源の豊かな島であり、黄金も埋蔵されていて、住民人口が多ければこのスルタン国ももっと経済発展が可能なのに、人口が少ないために鉱物資源の開発が一向に進まないことを、スルタンはたいへん嘆いた。

石炭が見つかったのは数年前で、それをオランダの蒸気船で品質検査するために港まで運び出すべく道路が作られた。結果的に品質があまり良くないと評価されたことから、この炭鉱は見捨てられた。しかし最近、別のスポットでの採掘が開始され、囚人を中心にして８０人がそこでの採掘に投入されているものの、いかんせん、人数が少なすぎる。道路のメンテナンスだけにでも何人もの作業者が必要なのだから、採掘作業にかかる人数はおのずと減ってしまう。もしも品質が十分であると判定されたなら、線路を設けてトラムで港に搬出する計画になっているそうだ。

翌朝、採集活動が開始された。助手は鳥を撃ちに森に入り、ウォレスは虫を探しに別の場所を探査した。そして戻って来た助手のアリが持ち帰った鳥を見たウォレスは狂喜した。これまで見たことのない極楽鳥の一種、standardwing bird-of-paradise だったのである。両翼に長い一対の白い羽があり、鳥はそれを自由に動かすことができる。後にこの鳥は発見者であるウォレスの名前にちなんで Semioptera wallacii という学名が付けられた。日本語ではシロハタフウチョウと呼ばれている。

バチャン島には土着民がいない。内陸部は無人の境であり、海岸部にいくつか村があるだけだ。バチャンの住民をウォレスは四種に分類した。最初にやって来たムラユ系バチャン人はテルナーテのムラユ系とほとんど違いがないが、言葉はテルナーテよりもはるかにパプア系言語の影響が深く及んでいる。次にテルナーテやアンボンと同様のオランスラニで、ポルトガル系の外見を残していても、肌の色はムラユ系よりも暗い。祖先の伝統的習慣を顕著に持っており、また言葉はムラユ語に多数のポルトガル単語や熟語を含めている。三つ目はジャイロロ北部に由来するガレラ Galela 人。パプア系の特徴を持つ背の高いガレラ人はこの地域一帯を放浪し、大型のアウトリガープラフで別の島に渡り、海岸部に住み着いてシカやイノシシを狩り、干し肉を作り、森を切り拓いてコメやトウモロコシを栽培している。四つ目はスラウェシの東半島部に由来するトモレ Tomore 人。かれらは別の種族に皆殺しされるのを避けるために、バチャンに移住して

来た。背は低く、言語はブギス系の言葉を話す。かれらは野菜を栽培して、村人に売りに来る。

バチャンに着いてからほどなく、植民地政庁は従来からのドゥイッ銭を新たにセント銅貨に変更したことを広報した。セントに交換するためにドゥイッはテルナーテに送らなければならない。ウォレスは持って来ていたドゥイッ貨６千個を送った。かれは一日に５～６百個を使うのだから、バーター経済でない土地に行く場合は大量に小銭を持参することになる。

そんなことをしたためだろう、ウォレスの住居に泥棒が入った。泥棒が入ったと思われる時刻の前後にウォレスの住居の方に行って戻って来た男を目撃した者がいたので、その証言を元にウォレスは容疑者を告訴した。ところが、その容疑者はウォレスの住居に近い川へ水浴びに行っただけであり、帰りに何かをサロンに包んでひっそりと持ち帰ったのは、ココナツの実を二個取って来たのだが、他人に見られると恥ずかしいから見られないようにしただけだと釈明し、結果的にその容疑者は無罪放免された。[続く]

「イギリス人ウォレス（２４）」（２０２１年０５月１２日）

１２月半ばに、ウォレスは村の中に引っ越した。今度は村の西側の調査を行おうと考えたためだが、テルナーテに戻りたくなった時も行動に移しやすい。オランスラニの部落に手ごろな大きさの家が見つかった。オランスラニの日常生活習慣を知るのにも好都合だ。

オランスラニはキリスト教徒であり、クリスマスと新年を絶え間ない銃撃・ドラム・バイオリンの音の中で祝う。音楽とダンスが大好きなかれらが習慣的に行っている社交の集いを訪れたヨーロッパ人は驚くこと請け合いだ。

暗い家の中の床は土間で、薄暗い明かりが二つ三つ、闇をほのめかしているばかり。楽団はバイオリンと笛、太鼓とトライアングル。そして白と黒のポルトガル風衣装を着た大勢の若者男女が集まって、カドリル・ワルツ・ポルカ・マズルカなどをたいへん活発に、しかも上手に踊る。供されるのは泥っぽいコーヒーと甘いスナック類。ダンスは何時間も続けられ、すべてが秩序と礼儀正しさの中で進行する。この種のパーティはコミュニティの主要メンバーの回り持ちで週一回程度開かれる。来たい人が自由にやってきて、あまり仰々しくない雰囲気で参加している。

三百年もの間にかれらは言語を替え、ポルトガルに関する知識もほとんど消失してしまったというのに、かれら自身の本質がいかに厳然と維持され続けているかということについては、実に驚き以外のなにものでもない。かれらは見かけから立居振舞まで、ほとんど純粋ポルトガル人そのものだと言える。かれらは家財道具の貧しい家に住んでいても、ヨーロッパ風のドレスや日曜日のための黒づくめのスーツを必ず持っている。かれらは額面上でプロテスタントになっているのだが、日曜日の夕方は音楽とダンスの華麗なる一時になるのである。

男たちは良い腕前のハンターであり、週に二三回、鹿やイノシシの獲物を部落に持ち帰り、魚やニワトリの食事に豊かさを加えている。ここの島々でフルーツコウモリを食べるのはほぼ、このオランスラニだけで、その醜怪な生き物をかれらはたいへんなごちそうだと思っている。

そのフルーツコウモリは年の初めに大群をなして果実を食べに飛来し、日中は小島の枯れ木に数千匹が集まってぶら下がる。そこを棒で叩き落すと、たいへん容易に籠一杯のこうもりを収穫できる。料理の際にはたいへん注意深い処理が必要とされる。皮は強烈なキツネ臭を発散するので、皮をはぐとき、慎重な作業をしなければならない。料理には大量のスパイスや薬味を使い、できあがった肉は野ウサギのような味わいがある。オランスラニはムラユ人より料理が巧みであり、味付けのよいご馳走のバラエティには

圧倒的な差がある。バチャンのオランスラニはサゴをパン代わりの主食にし、たまにコメを食べ、野菜と果実はたいへん豊富だ。

ポルトガル人がアジアの土着民女性との間に作った子供たちが、その両親のどちらの系統よりも色黒になっているのはまったくの不思議である、とウォレスは書いている。マラッカのポルトガルプラナカンもそうだったし、マルクのどこへ行っても同じようになっている。南米でウォレスが見たポルトガル人子孫とそれは正反対の現象なのである。ブラジルでは、ポルトガル人とインディオの子孫は肌の色がインディオのそれよりも明るい。バチャンの女性は外見的に男よりも柔和であるにせよ、粗野でいかつい印象が強く、オランダとムラユの混血女性の美しさにはとても及ばない。純血ムラユ女性と比較しても、たいていの場合負けている。

バチャン村周辺を調べ尽くしたウォレスは、１８５９年３月２１日にカシルタ Kasiruta 島へ向けて出発した。カシルタはバチャン島の北西にほぼ横並びになっている島だ。そこにはバチャンスルタンの持ち家もあり、ウォレスはその家を使う許可を得ていた。

すべての荷物を積み込んだウォレスのボートは翌早朝にカシルタの小さい川に入り、一時間ほどでスルタンの持ち家に着いた。その日はほぼ終日雨が降り、午後遅くやっと上がったので、ウォレスは周辺の散策に出てみたものの、唯一の踏み分け道は泥沼になっていて前進不可能。まわりの処女林はあまりにも深く、暗く、湿っていて、鳥も虫も期待できそうにない。ここの住民はサゴ・果実・魚・狩猟で生きており、処女林を開墾して何かを栽培するようなことをしない。[続く]

「イギリス人ウォレス（２５）」（２０２１年０５月１７日）

翌日、助手を丘の方に送って鳥を狩らせたが、ありふれた鳥しかいなかった。明日出発する、とウォレスは即座に決めた。翌早朝、ボートは川を下って河口に出てから、海岸沿いに北へ向かった。およそ２時間後に、ガレラ人の住む小屋がいくつか建っているラグンディ Langundi 村に到着した。

ガレラ人はここでダマル damar（英語で dammar gum）を採集している。砕いたダマルはほぼ１ヤードほどの長さのヤシの葉のパイプに詰めて、たいまつを作る。この地方に住むたいていの原住民にとっては、それが唯一の夜間照明になっている。

ウォレスたちはラ~グンディに１０日間いたが、鳥も虫も新種のものが見つからないため、４月１日にそこを引き払った。舟は早朝にラ~グンディを出発して、夕方にはバチャン島側の川に入り、川沿いに良さそうな家が建っているのが見えたので、そこに泊まってみることにした。家のオーナーは尊敬できるムラユ人であり、寝室を貸してくれ、またベランダを使うことも許可してくれた。周囲の森林に包まれたその場所が期待を抱かせるものだったため、ウォレスはしばらくその家の一部を借りることにした。

翌朝、家の周囲を歩いてみたウォレスは、珍しい昆虫をいくつか捕獲した。しかし数日間の滞在で、鳥と蝶があまりいないことがはっきりしたため、そこを去ることに決めた。ところが、そこでの滞在の最後の日に素晴らしいことが起こったのである。

ウォレスはバチャンに来て以来、ニコバルピジョン Nicobar pigeon（日本語はミノバト）を手に入れることを期待していたのだが、その日までこの鳥の姿を見かけたのはカヨア島でただ一度きりだった。ところがここでの最後の日に、助手がついにニコバルピジョンを持ち帰って来たのだ。ウォレスのバチャン旅行が満足できるものになったのは間違いあるまい。

ウォレスはテルナーテに戻ることにした。テルナーテからバチャンまで来るときに使った小さい借りボートは、荷物を積んで水先案内人と助手数人が乗り、先にテルナーテに向けて出発した。ウォレスは政庁のボートでテルナーテに帰る手配をしたのである。

政庁のボートはバチャンの植民地軍守備隊にコメを届けるためにやってきていた。そのボートがテルナーテに帰る時に同乗させてほしいとウォレスは指揮官に依頼して了承された。バチャン出発は４月１３日であり、ウォレスはちょうど６カ月マイナス１週間、テルナーテを離れていたことになる。

ニコバルピジョン（ミノバト）

このボートはコラコラ kora-kora と呼ばれるマルク地方土着のもので、左右に竹のアウトリガーが付いており、舷側は低く、悪天候にはきわめて弱い。舷側には１２人の漕ぎ手が座り、中央部はキャビンがあって荷物や同乗者を収容することができる。

櫂漕ぎが行われるとき、木製ドラムが打ち鳴らされる。ドラムのビートに合わせて漕ぎ手が動きをそろえるのだが、なんともすさまじい喧噪が船内に満ちる。ドラムを叩くのはふたり、そして漕ぎ手もかれらもテルナーテスルタンに命じられてその仕事に従事している者たちである。

ほとんどがテルナーテのムラユ系である漕ぎ手はマットを持って舷側に座り、寝る時もそこで眠る。食べ物は乾燥サゴと塩魚、漕ぐ時は滅多に唄わないが、目的地に着くときに気分が高揚すると唄ったりする。かれらはあまりしゃべらない。

同乗者はジャワ人兵士が３～４人、刑期を終えた犯罪者ふたり、学校長の妻と使用人、華人商人。コラコラはテルナーテへの帰路にあちこちの場所に立ち寄ったので、三日間の航海になった。その間、同乗者は狭いキャビンの中で雑魚寝した。

船首に小さい調理場があって、そこでコメを炊いたり、湯を沸かしてコーヒーを淹れることができる。もちろん材料は全部自前だ。しかも大勢がその場所を使うから、各自がもっとも妥当と思う時間にそこを使うことになる。だから食事の時間はひとによって大違いになった。[続く]

「イギリス人ウォレス（２６）」（２０２１年０５月１８日）

テルナーテに到着する前日、コラコラはマキアン島に立ち寄った。大勢が浜に上陸してたくさんのバナナや果実を取って来た。その夜、みんなが眠りに落ちた直後に蛇騒動が起こった。二匹の毒蛇がキャビンの中にひそんでいたのである。蛇退治を終えて、みんなは安心して眠りに落ちた。

翌日、ウォレスと助手は懐かしいテルナーテの家に戻って来た。バチャンの旅で得たすべての物は無事にその家に届いた。

１８５９年５月にウォレスは、かつてマカッサルからアンボンへ行く時に一日滞在したことのあるティモール島クパンを訪れたあと、６月に北スラウェシのマナド Manado に向かった。マナド到着は６月１０日で、マナドに昔から定住してビジネスを行っているイギリス人のタワー氏に迎えられた。

キングオブテルナーテの異名を取るダウフェンボーデン氏の息子のひとりがマナドで事業を行っており、タワー氏の友人でもあった。タワー氏はまた、友人のネイス氏も紹介してくれた。ネイス氏はマナドのネイティブであり、インドのカルカッタで教育を受けた人物で、英語・オランダ語・ムラユ語がかれの母語である。

マナドの小さい町はたいへん小ぎれいなところだが、周辺が何マイルにもわたってコーヒーとカカオの農園になっており、ウォレスの採集活動に適した場所を探すのはたいへんだ。マナドの新たな友人たちはそんなウォレスにさまざまな助言や支援を惜しまずに与え、ウォレスの仕事を大いに助けてくれた。

ミナハサの土着民はヌサンタラ島嶼部の住民の中で、ちょっとした変わり種だ、とウォレスは書いている。肌は明るい黄色や褐色でヨーロッパ人に近い。背は低めだが頑健な造りであり、顔つきもオープンで見目が良い。加齢が頬骨を高めるために顔の相が変化する。頭髪はムラユ系と同じで黒い直毛だ。

内陸部に住んでいるのは純血種であり、男女共にハンサムだが、海岸部の住民は混血が進んでいて、周辺地域の土着民とあまり違いがない。

精神面やモラル面の特徴も、ミナハサ族はたいへんな特異さを持っている。もの静かで柔和な姿勢が顕著であり、自分より上位にあると思われる相手に対して服従的になるため、より高度な文明に出会うと、その習慣を学び、見倣おうとする。かれらは頭の良い工人であり、かなり高い知能教育を受容する能力を持っているように思われる。

ミナハサ族は比較的最近まで蛮族であり、いくつかの部落には酋長に率いられた部族が住んで、互いに殺し合いをしていた。家屋は高い柱の上に作られ、敵が攻め込めないようにしたいた。かれらは首狩り族であり、また人食い族だったと言うひともある。酋長が死ぬと、その墓には新しい首が二個備えられた。敵の首が得られないときには、奴隷が敵の身代わりにされた。

人間の頭蓋骨は酋長の家の最高の装飾品だった。集落の外にあるのは道なき道の土地にいささかの水田や野菜畑、果樹林などだけ。かれらの宗教は大自然の特殊な現象が未開人の精神に湧き起こさせるたぐいのものであり、燃える山・奔流・湖などが神のすみかであり、ある種の樹や鳥が人間の行動や運命に影響をもたらすと考えた。神は人間を、存命中あるいは死後に、動物に変える力を持っていると考えられ、神を慰撫するために祭りを行った。

周囲のすべてを敵にして戦争し合う隔絶された小コミュニティが、生活改善やモラルの進歩への欲求も展望もなしに他律的な状況の中で代々生き続けて来た、という真の野蛮さの姿をわれわれはそこに見ることになる。そんな歴史に変化が起こったのは、１８２２年にコーヒーの農園開発とそのトライアルが行われたときだった。[続く]

「イギリス人ウォレス（２７）」（２０２１年０５月１９日）

海抜５百フィートから４千フィートまでの高地でコーヒー栽培が驚異的な成功を示し、酋長たちにコーヒー栽培の勧誘が強く行われ、ジャワからプリブミ指導員と種が送られ、農園作業者には周辺部落で栽培される食糧が用意され、生産されたコーヒーを政府買取所に引き渡すと政府の定めた価格で買い取られ、マヨール Mayor の地位を与えられた酋長にはその５%が支給された。

その後、マナド港と高地を結ぶ道路が作られ、村々の間も小さい道路網でつながれた。宗教伝道団が町にやってきて布教を行い、また学校が作られた。土着民がコーヒー

栽培で得た金を目当てにして、華人商人が衣服やさまざまな品物を販売しにやってきた。その一方で地域は行政地区に分割され、ジャワで優秀な業績をあげたヨーロッパ人もしくはヨーロッパ系プリブミ監視官が送り込まれた。監視官は担当行政区の総合的監督を行い、今やマヨールとなった酋長の相談役になり、民衆の保護者になり、酋長とその配下の民衆が植民地政庁との間に行うあらゆる関係の仲介者にもなった。

監視官はその職務のために毎月一度所轄地域内のすべての村を訪れ、月報を直属上司であるレシデンに提出した。村と村の間で戦争の種になっていたあらゆる諍いは、より文明的なシステムを行う監視官によって調停され、土着民はその決定に服従する傾向を持ち、実力抗争が消滅していった。そうなると、敵の攻撃への防御として作られてきた砦のような住居は不便さばかりが目立つようになり、監視官が持って来た家屋構造の住居に一律に建替えられた。ウォレスがやってきたのは、そんな野蛮時代からまだ四十年も経過していない時期だったのである。

６月２２日午前８時、ウォレスはロッタ Lotta 村の訪問に出発した。タワー氏が最初の３マイルを馬車で送ってくれ、そこからネイス氏が馬でウォレスをロッタ村に案内した。巡回視察を終えたトンダノ Tondano 地区監視官がそこにいて、ウォレスが観察のために村々を回るための案内兼付添い役を買って出てくれた。

南へ下るほど高原は上昇して涼しさが増し、美しい景観が楽しめる。村を三つほど通過したが、どの村も小ぎれいで清潔さに満ち溢れ、ウォレスを感嘆させた。木造の家々は６フィートほどの高さのしっかりした青色の柱の上に作られ、どの家にも手すりで囲まれたベランダがあり、家の周囲はオレンジの樹や花をつける灌木で囲まれている。そしてこの地の景観は、美しいと言われてウォレスが想像していたものをはるかに凌駕していた。

午後１時ごろ、トンダノ地区の中心地トモホン Tomohon に到着した。一行は土着民マヨールの家で食事することになった。マヨールの家は風通しの良い大きな家で、地元産

の硬い木で作られ、優れた職人の手で形よく組み上げられていて、ウォレスはその完成度に驚かされた。家具調度品はヨーロッパ風に整えられ、見映えの良いシャンデリアランプが吊り下がり、テーブルも椅子も地元の腕の良い職人の手で作られたものだった。

きれいに櫛の入った黒い頭髪にこざっぱりした白い正装のふたりの少年が客人ひとりひとりに水の入った容器と清潔なナプキンの載った盆を渡し、さまざまに調理された鶏とロースト・シチュー・フライのイノシシ肉、そしてコウモリ肉・ポテト・米・野菜のフリカッセが上等の陶製食器に置かれて供され、豊富なクラレワインとビールが添えられた。スラウェシ島の山の中の土着民首長の食卓にそのようなあり様を見出したことに、ウォレスは信じられない思いを抱いた。

マヨールは黒のスーツにパテント皮の靴を履き、自然で優雅にふるまった。ホスト席に着いて歓待してくれたが、あまり多弁でなかった。会話はすべて地元の公用語であるムラユ語でなされた。監視官は東インド生まれの混血であり、かれにとって流暢な言葉は唯一ムラユ語だった。[続く]

「イギリス人ウォレス（２８）」（２０２１年０５月２０日）

マヨールの父親はここの部族の酋長であり、木の皮の衣服を着て高い柱に載った家に住み、その家は人間の頭蓋骨が至る所に飾られていた。その息子がここまで変わったというのは、驚嘆すべき変化だろう。もちろんウォレス一行はできるかぎりの最良のもてなしを受けたわけだが、マヨール側はこのようにヨーロッパ化してヨーロッパ人と交際できることにたいへんなプライドを感じているのが明白だ。

食事とコーヒーの後、監視官のベンスナイダー氏はトンダノの自宅に向かったので、ウォレスは自分の荷物が到着するのを待ちながら、トモホンの町を散策した。結局、荷物が到着したのは真夜中だった。

夕食も昼食と同じように、豪華な食事が供された。そして休息する段になって、たいへん小ぎれいで快適な寝室に案内された。

翌朝起きてベランダの温度計を見ると華氏６８度になっていた。ここは海抜２千５百フィートであり、普通の最低気温なのだそうだ。ウォレスはバラ・ジャスミンその他の良い香りの花々の匂いに包まれて、ベランダで新鮮なバター付きパン、卵、コーヒーの朝食を摂った。そして午前８時、十数人に担がれた荷物と共にトモホンを出発した。

海抜４千フィートの高い峠を越えた後、道は下り坂になって５百フィートほど降下し、ミナハサで最も高所にある村、ルルカン Rurukan に着いた。スラウェシ島でもきっと最高所ではあるまいか。ここはほんの十年くらい前にできた村で、ウォレスがここまでの道中に見て来た村々と同様の、きれいで清潔な様子をしている。高所が生物体系にどのような変化を及ぼしているのかを観察するため、ウォレスはしばらくここに滞在することにした。

この村は山岳斜面にできたあまり広くない平地に作られており、ここから斜面は眼下のトンダノ湖めがけて、緑の絨毯となって下降して行く。村の周囲はコーヒー農園で、農園は政府が開き、農作業は首長に統率されて村人たちが行っている。

草取りの日や獲り入れの日が定められていて、その日にはゴン gong が打ち鳴らされ、総数７０軒の村人たちがそれを合図に農園に向かう。各戸からその仕事に出た時間数が記録されて、収穫を政府に納めて得た金はその時間数に応じて各戸に分配される。政府のコーヒー収集倉庫は各地区の中心部に設けられ、各村が産物をそこへ納入すると政府が定めた低い固定価格で買い上げる。マヨールや首長には一定比率で給付がなされ、それ以外の報酬は村人の間で分配される。このシステムはたいへん円滑に機能している、とウォレスは書いている。原住民の生活秩序を確保するのにこれは優れた方法であり、だれかれ構わず自由市場原理に従わせることが良いことであるとはかぎらないのだから、オランダ領東インド植民地政庁はミナハサ土着民の文明化をすぐれた方法で行って

いるというのがウォレスの意見だった。ここの村人はかなり広い水田を営んでいて、毎年、数百ポンド相当のコメの収入も得ている。

ルルカンでの滞在でウォレスは村の端にある家に住んだ。絶壁から下の谷川を覗き込むようにして建っている印象だ。そのベランダからの風景は実にすばらしい。朝はたいてい温度計が華氏６２度を指し、日によって８０度まで上昇する日もあれば、ほとんど終日変化しない日もあった。熱帯用の衣服で毎日過ごしているウォレスは、日によって涼しいばかりか、寒く感じることすらあり、外の湧水で水浴するときなど、まるで氷のようだと思うこともあった。［ 続く ］

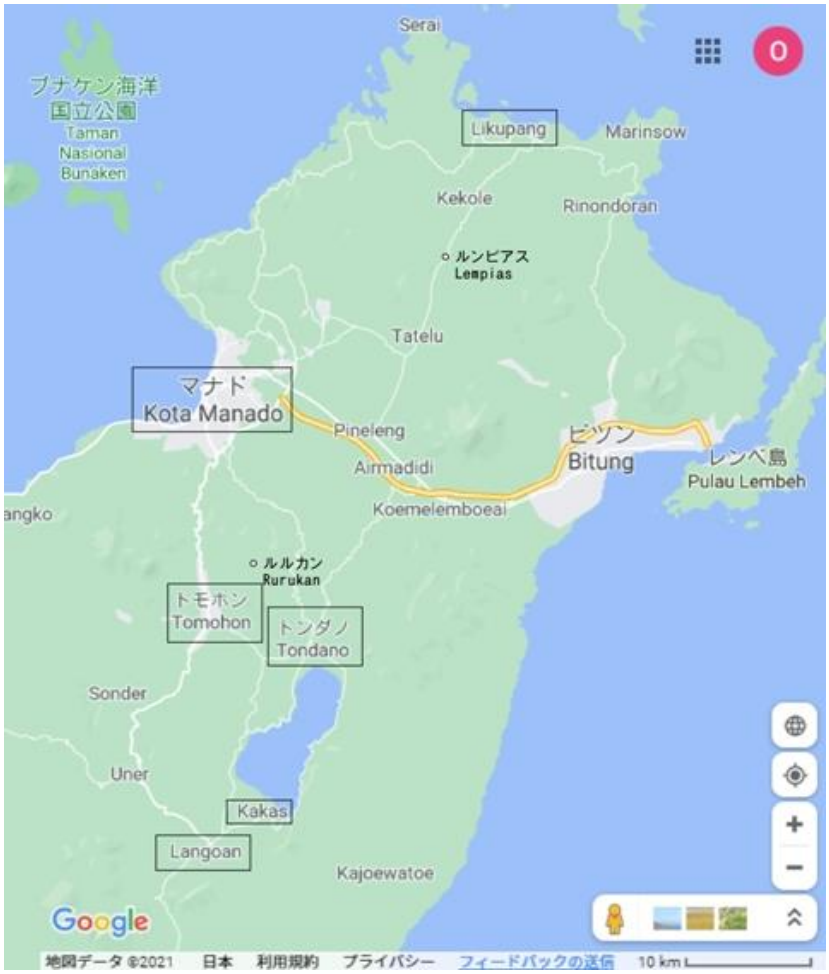
「イギリス人ウォレス（２９）」（２０２１年０５月２１日）

このような高所で下界と異なる動植物相を見ることができるかもしれないと考えていたウォレスはたいへん失望した。気温が低くて高地であるという地勢的特徴が暑い低地とは異なる生物相を見せてくれるのではないかというかれの期待は、当てが外れたのである。鳥や四つ足動物は単に低地より数が少ないというだけで、特別変わった種は見出せなかった。植物でさえよく似たありさまで、低地では見ることができないというものなどまるで見当たらなかった。コメですら、この華氏８０度を超えない土地で豊かに実っているのだから。それでも昆虫だけは低地より多少とも異なるものを見つけることができた。

ウォレスはミナハサの山岳地帯が急斜面でさえ肥沃な土壌の土に覆われていることに着目した。ミナハサの山岳部にそのような現象を生んでいる原因がそこにあるのではないかという見解だ。ヨーロッパや他の地方にある、岩が露出して土の乏しい山岳地帯で見られる現象は、それがゆえにミナハサに当てはまらないのではないかとかれは考えた。

数日後、ウォレスはルルカンを後にしてトンダノ湖に下った。そこには人口７千人のトンダノ村があり、ベンスナイダー監視官が住んでいる。夜は監視官の家に泊まり、翌朝９時にトンダノ湖をボートで縦断する旅に出た。１０マイルほど離れた対岸のカカス Kakas 村に向かう。

カカス村の首長の家で昼食を摂ってから、４マイルほど南のラゴワン Langowan 村に案内された。そこが生物採集のためには適地だろうとみんなが推薦したのだ。ウォレスは村の来訪者用ゲストハウスを宿舎に与えられた。ふたりの地元民が鳥撃ち役と森林案内役の仕事を与えられた。



翌朝、森を目指したウォレスは、森に到達するためにコーヒー農園の中を４マイルも歩かなければならないこと知った。これでは採集と観察活動に使える時間がかなり狭められるため、時間がもったいない。かれはもっと森に近い場所に移ることを希望した。

ベンスナイダー監視官と隣の地区の監視官がウォレスの希望に合う場所として、ラ~ゴワンから更に６マイル南に下ったパンフ Panghu 村を推薦した。ウォレスは火山の温泉を見に行ったあと、その翌日にパンフ村に移った。パンフ村の旅人用の宿がウォレスの宿舎になった。その建物は旅人が休憩したり夜を明

かすために建てられたもので、ベランダと部屋がひとつずつの小さいものである。だが確かにその建物からは森が近いために立地条件は悪くない。ウォレスの期待は高まった。

ところが、鳥撃ちの助手が、ひとりはトンダノで熱と下痢に倒れて同行できなくなり、もうひとりもラ~ゴワンで胸部に炎症が起ったために置いて来ざるを得なくなった。パンフ村の地元民を最初は当てにしたのだが、この年は雨季が早まったために稲の獲り入れで村人たちは大忙しの態であり、ウォレスに付き合える者などひとりもいない。しかし地元の子供二人が吹き矢の名手で、粘土の弾丸を使って小鳥を獲り、頻繁にウォレスのところに持って来た。珍しい鳥も中にはあったものの、鳥のコレクションは停滞気味だった。

反対にウォレス自身が集める昆虫は大いに成果が上がった。量的にも質的にも満足できるものだったようだ。もちろん、いくつかの新種も手に入っている。

雨季に入って活動があまりできなくなり、しかも鳥撃ちの助手もいない状態でパンフ村に

長居をしても仕方ないため、ウォレスはマナドに戻った。マナドでは、２週間使ってコレクションを乾燥させて送り出し、助手を新たに雇って再出発の準備を整えた。今度はマナドから東方にあるクラバッ Klabat 火山の麓のルンピアス Lempias 村を目指すのである。

荷物担ぎ人は自分の村から隣村まで運ぶだけ。隣村に着いたらその村の者にバトンタッチする。おかげで、荷物の引き継ぎのたびに出発が遅れ、１８マイルの距離なのに一日がかりになってしまった。最終的に荷物が全部届いたのは真夜中だった。

ウォレスはルンピアスでバビルサとアノアの頭蓋骨を手に入れた。またマレオも手に入れた。この地域へやってきたのは、それが目的のひとつだったのである。１０日ほど

採集活動を続けてから、ウォレスは北スラウェシ半島部の先端リクパンLikupangへ移動した。そこはバビルサやアノアの宝庫だ。[続く]

「イギリス人ウォレス（３０）」（２０２１年０５月２４日）

リクパンの気象は山岳部と大違いであり、四カ月間、雨が一滴も降らない。それでウォレスは一週間、ビーチに泊まることにした。マルク行政長官であるゴールドマン氏の長男が塩の製造プロジェクトのためにリクパンに来ており、ウォレスの来意を知って、狩猟パーティを行うことを提案した。

ウォレスはゴールドマン氏の子息、リクパンのマヨールとその配下の男たち十数人、そして二十匹ほどの猟犬に付き添われ、人里離れた猟場へ出かけた。最初はボートで移動し、上陸してから徒歩で森の中を進む。目的地に向かっているとき、一行はすでにアノア１頭とイノシシ５匹をしとめた。ウォレスはアノアの頭部を確保した。

目的地に着くと、数日間滞在するために小さい小屋が作られた。ウォレスはマレオを狩って皮をむくのに専念し、ゴールドマン氏の子息とマヨールはイノシシ・バビルサ・アノアを狩ることにした。

一行は三日間で大量のイノシシとアノアを２頭獲得したが、アノアは猟犬のために標本にできるような状態でなかったため、ウォレスは頭部だけをもらった。狩猟パーティはお開きになり、一行はリクパンに戻ることになったが、ウォレスはもう三日そこにいてマレオをもっとたくさん狩ることにした。

最終的に状態の良いマレオが全部で２６羽採集され、毎日マレオの肉と卵を飽きるほど食べることができた。三日後、マヨールが約束通りボートを送って来たので、ウォレスは荷物をそれに託し、ウォレスと助手ふたりは地元民のガイドに付き添われて陸路をリクパンに向かった。およそ１４マイルの距離を、密林を抜けて帰ったのである。

数日後、ウォレスはリクパンからマナドに馬で戻った。そして、次のアンボン行き郵便船が来るのを待った。

ウォレスがマナドを去ったのは１８５９年９月で、１０月にアンボンに入り、アンボン湾の奥にある小さい家を借りてひと月滞在した。かれはそこで北スラウェシ・テルナーテ・ジャイロロで集めたコレクションの梱包を行った。１１月にテルナーテに向かう郵便船がアンボンに来ることになっていて、コレクションをそれに託してテルナーテに送り、ウォレスはアンボンからセラム Seram 島の探査にかかることにしていたからだ。ウォレスはセラム島を Ceram と綴っている。

かれが求めていた蝶がそこで豊富だという話を聞いていたためにウォレスはパッソ Passo に家を借りたのだが、シーズンが外れていたことが分かってがっかりした。鳥も豊富でなかったものの、珍種を手に入れることができた。また美しく珍しいコガネムシを手に入れることもできた。

パッソのその家はアンボン湾と東側の海を切り離す地峡になっていて、東側からやってきたボートはその砂州の上を引きずられて地峡を通過し、アンボン湾に入って行く。ウォレスが借りた家の前を右から左から、引きずられたボートが往来しているという図だ。

パッソに滞在中、パンの実を豊富に食べることができたのはたいへんな贅沢だった、とウォレスは書いている。パンの実は種も果肉もおいしいので、種が植えられることがあまりなく、結果的にパンの樹はどこへ行っても少ない。おまけに結実シーズンも短いために、外来者にとってはきわめて珍しい食べ物になる。たまたまその村は周囲にパンの樹がたくさんあって、ウォレスは毎日その実を食すことができた。

スライスして揚げたり、カリやシチューにもしたが、一番おいしいのは丸ごと熾火で焼き、中身をスプーンですくい出して食べる方法だとウォレスは書いている。ウォレス

に言わせると、ヨークシャープディンのようだそうだ。甘味をつけても、塩味でもおいしい。肉と一緒にグレービーソースで調理すると、けっこうな野菜になる。[続く]

「イギリス人ウォレス（３１）」（２０２１年０５月２５日）

１８５９年１０月２９日午前３時、セラムに向かう船がアンボンを出た。数日前に出港を予定していたファン・デル・ベック船長は、やって来ない乗組員を探し回って、やっと全員を集めた。これで出発できると思いきや、今度はウォレスの助手がふたり姿を消すという難儀が続いた。

ひとりは別れの盃で酩酊していたのが見つかったが、もうひとりは湾の向こう側へ行ってしまったという話で、連れて行くのを諦めるしか仕方なかった。出発した後、船はアンボン東側の村に立ち寄って宣教師の住宅建設用の木材を積み込み、三日目にセラム島のハトスア Hatosua に到着した。そこには船長の所有する農園があり、ウォレスはそこに滞在して観察と標本採集を行うことにしていた。

広さが２０エーカーあるその農園は主にカカオとタバコが栽培されていて、作業者が住んでいる小屋がある一方、屋根付きのタバコ乾燥場もあって、ウォレスはその一画を使わせてもらうことになった。テーブル・イス・ベッドなどを配置して数週間滞在する構えを作ったものの、数日で期待外れであったことが判明した。

甲虫はたくさんいるが、バラエティに乏しく、しかも既にアンボンで見ている種ばかりであり、近くの森も踏み分け道は皆無で、おまけに鳥も蝶もあまりいない雰囲気だ。ここに長居をしても、セラム島のことは分からないと考えたウォレスは場所を変えることを計画した。

知り合ったポリグロットのファン・デル・ベック船長は物知りで愉しい男であり、かれと別れるのは残念だったが、採集と観察のほうが重要なのである。サパルア Saparua

の副レシデンに手紙を送り、移動のためのボートの手配を依頼したところ、乗組員が２０人もいるかなり大型のボートがやってきたので、夕方エルピプティ Elpiputi に向けて出発した。エルピプティは現在 Elpaputih という県名になっている。

エルピプティで数日滞在するつもりだったが、二日かけて着いてみると付近に処女林もなく、ここも時間の無駄になりそうだったので、ウォレスは移動を続けることにした。

更に１２マイル進むと、カカオ農園の建設が真っ最中のアワイヤ Awaiya 村があった。多分、現在 Awaya という名称の村がそれだろう。ヨーロッパ人農園マネージャー氏が付き添ってくれて村の首長に会いに行き、ウォレスが滞在するための家を世話してもらった。ボートと２０人の男たちはそこで解放した。

アワイヤ村は最近できた村で、住民は内陸部から移り住んだ土着民がほとんどを占めている。セラム島の海岸沿いの村々は、内陸部の土着民を教化するためにアクセスの便の良い場所に引っ越させる受け皿として植民地政庁が作っている。同時にそこに農園を設けて移住した土着民の仕事場を用意し、生産物は政庁が集めて経済資源にするという、実に巧みな好循環システムが行われている。

アワイヤ村には学校があり、アンボン人プリブミが校長で、毎朝たくさんの生徒がやってくる。学校は宣教団の布教活動の一環として営まれていて、原住民のキリスト教化

が図られている。大きい村にはたいてい、宣教団の人間が駐在している。しかし外から見た限りでは、キリスト教化がなされた村と、未教化村の違いはあまり目立たない。セラム島北部や東部沿岸の村々はムスリムであり、南西部がキリスト教徒のエリアになっている。

アワイヤ村の住民は褐色の肌に縮れ毛で体格の良いパプア系のひとびとが大半で、裸に近い姿で暮らしている。キリスト教化した原住民は服を着るようになるので、それが目印になっているようだ。

ファン・デル・ベック船長はキリスト教徒村の住民を、救いがたい怠け者である上に、泥棒で嘘つきで酔っ払いだとこきおろした。アンボン在住の友人やヨーロッパ人居住者あるいは商人たちも、まったく同じ批判をした。サーバントに雇うのなら、たとえ前科者であってもイスラム教徒の方がましなのだそうだ。[続く]

「イギリス人ウォレス（３２）」（２０２１年０５月２７日）

イスラム教徒は宗教の中で自制を習慣付けられ、決まりを破らないことが実生活の中で身に着いている。豊かな欲望に加えて犯罪や怠惰への誘惑に包まれているひとびとと、そうでないひとびとが一緒にそこにいるというのが現実の姿なのである。それに加えてもうひとつある別の要因としてウォレスが感じたのは、原住民キリスト教徒が持つ傾向として、キリスト教徒になったことでヨーロッパ人とほぼ同等の地位を得たのだという意識に浸り、それがイスラム教徒に対する自分たちの優越感をかき立て、その結果として商売をしたり自分の土地を耕作して生きる努力をするのを見下すオリエンテーションを持たせていることだ。

文明化のまだ未発達なレベルのひとびとにとって、宗教とは儀式的形式的なものがほぼ全体を占める。キリスト教ドクトリンの理解も、モラルの教えへの服従も弱い。そんなキリスト教徒原住民の中で、ポルトガル人プラナカンであるオランスラニはまだ優れ

た階層だろう。より文明的であり、勤労的・生産的であって、ムラユ人とあまり遜色がない。ただし酔っ払い傾向という大きい弱点が長所を割り引いている。

アワイヤ村でも、ウォレスのコレクションはたいした進展がなかった。そこから数マイル先にあるマカリキ Makariki 村から、セラム島を縦断して北海岸に抜ける道がある。アワイヤ村で三週間過ごしたころ、ニューギニアで知己を得たローゼンベルフ氏がウォレスを訪ねて来た。同氏はいま、セラム島のその地域の監督官をしている。そしてセラム島内陸中央部の山中の清流で捕まえた珍しい蝶をウォレスに見せ、その場所に数日滞在すればウォレスにとって大きい成果が上がるかもしれないと勧めた。

翌日、ローゼンベルフ氏はウォレスを誘ってマカリキを訪れ、ウォレスがセラム島中央山岳部への徒歩旅行を行うための荷物担ぎ同行者を集めるよう、マカリキの首長に指示した。クリスマスが近づいているため、早急に出発する必要がある。二日間でひとを集めることで合意がなされ、ウォレスはアワイヤ村に戻って旅の準備を行った。

ウォレスが雇ったアンボン人鳥撃ちはアワイヤに残して、鳥を撃って皮をはぐ仕事を続けさせることにした。ウォレス自身は６日間の旅程に必要な最低限の荷物を持ち、蝶の捕獲が上手なアワイヤの若者ひとりだけを連れてマカリキに向かった。

１８５９年１２月１８日、同行を命じられたマカリキの６人の男たちとともに、ウォレスはマカリキ村を出発した。男たちはウォレスの荷物と自分のための荷物を担いでいる。最初の一時間、たくさんある泥穴を隠している濡れてもつれた下草の上を一行は元気よく歩いた。いくつか小川を越えてから、セラム島で一番大きいルアタン Ruatan 川の岸に出た。この川は深く、流れが速い。しかし迂回路はないのだ。

男たちは荷物を頭の上に載せて流れを越えて行った。水はほとんどかれらの腋の下まで達している。中のふたりがウォレスの渡河を助けるために戻って来た。ウォレスは川に入り、腰の上まで流水に浸った。深みでウォレスが前進しようとして脚をあげたあ

と、なんと足を川底に下ろすことができなかった。ふたりに助けられて、ウォレスはなんとか渡河に成功した。いつも裸足で出歩いている原住民の足の裏の握力はたいへんな強さだとウォレスは感心した。

そのあとしばらく進んでから、半時間ほど朝食を摂り、ふたたび正午ごろまで歩き続けた。地層が砂礫から岩石に変わって低い丘に囲まれた窪地から山峡に入り、水流を渡り、あるいは森を横断しているうちに午後三時になって、空が雲に覆われ、山の方から雷の音が聞こえて来た。嵐が近付いているのだ。早急にキャンプの準備をしなければならない。キャンプに良い場所を探していると、ローゼンベルフ氏が前に使った小屋が見つかった。

かれが寝るために作った小屋の枠だけが残っているので、すぐに枝葉を伐り集めて屋根を葺く。そのときにはもう雨が降り始めていた。男たちはウォレスのための寝屋を用意してから、それぞれが適当な場所を探して嵐が通り過ぎるのを待った。嵐の後は至るところで小川が激流に変わるため、いずれにせよ、前進するには水が引くのを待たなければならない。嵐が去ったので火を熾し、ウォレスはコーヒーを愉しんだ。男たちは魚とバナナを焼いて夕飯だ。すぐに闇が降りてきて、初日の夜はゆっくりと休んだ。[続く]

「イギリス人ウォレス（３３）」（２０２１年０５月２８日）

１９日の朝は午前６時に出発した。前日と同じような行程を３時間ほど続け、その間に三十数回、膝までくらいの深さの小川を渡った。朝食の後、また前進を続けて、山越えの長い道を通過した。山は海抜１千５百フィートくらいの高さだ。その急な斜面を下ったところに小川があり、そこが島の中心部だった。ウォレスはそこで二～三日、採集活動を行うことにした。

男たちはウォレスのために寝屋を作り、かれら自身は前の旅人が作った寝屋を使った。ウォレスはそこに二日半いて、全部で６０匹近い蝶を採集することができた。ウォレスはひと月ほど、このような山の奥深くに滞在したいと思ったものの、山奥には村がないため諦めざるをえない。もしも人里があれば、クリスマスを終えてからかれはまたやってきたことだろう。

６日間の旅を終えてマカリキに戻ったウォレスは、その足でアワイヤに向けてボートで出発した。ところが海上で嵐に見舞われ、その日夕方遅くずぶ濡れの状態でアワイヤに帰着することになった。

セラム島に滞在中、ウォレスはひっきりなしに超小型のダニに噛まれて、頭から足まで炎症だらけになった。目に見えないのだから、蚊や蟻などの害虫より始末に悪い。アンボンに戻った後にそれが重篤化して、二カ月間、外を出歩くことができなくなった。

１８６０年２月２４日、体調を回復させたウォレスは二度目のセラム島探査に赴いた。マルク行政長官から全村落首長に宛てたウォレスへの協力要請状をもらって、ウォレスはまずアマハイ Amahai にボートで向かった。アワイヤが現在のエルパプティ湾のほぼ入口に位置しているとするなら、マカリキは湾の一番奥深く、アマハイはマカリキからずっと南方の湾の端にあり、アワイヤと湾をはさんで対面している。

ウォレスはアマハイに到着して首長に舟の手配を頼んだ。このような状況に直面するとあれやこれや理由をつけてすぐにできないことを言いだすのが普通の展開であるというのに、アマハイの首長は稀に見る傑物だった。なんと即座に舟の手配を命じ、必要な人数を集めてその夜のうちにウォレスの荷物を積み込ませ、マストを立てて帆を張らせ、いつでも出発できる手はずを整えた。プリブミ首長の中にこのような人物がいることに、ウォレスは感銘を受けた。

舟は翌朝５時に出発し、東方に向けてセラム島南岸を進む。途中セパ Sepa に立ち寄ってからタミラン Tamilan で夜を過ごした。翌日昼ごろ、ハヤ Haya に到着。アマハイか

ら乗って来た舟はここまでしか行けないので、ハヤでボートを手配しなければならないのだが、十分な大きさの舟がない。

だったらハヤにあるボートを２隻使えば十分に事足りるわけだが、ハヤのラジャは４隻使うよう主張した。多分、ラジャの配下にある四つの村のふたつだけに義務を与えるのが難しかったのだろうとウォレスは解釈した。アマハイを出てから上陸した村々はすべてムスリムの村だが、どの村でも酒を分けてくれと求められた。本当に名前だけのイスラム教だとウォレスは書いている。

翌日、ハヤを出てトゥルティ Teluti 湾に入った。海上からセラム島中央山系の姿がよく見える。総勢６０人が操る４隻のボートは速い太鼓のビートに合わせて元気よく櫂漕ぎを続ける。太鼓の喧噪と漕ぎ手の唄、そして叫び声。４隻の船団は穏やかな海上を順調に走った。

トゥルティに到着すると、地元のオランカヤとラジャの部下が一行を出迎えた。ウォレスが数日間滞在するための宿舎が用意されていて、そこで歓迎会が開かれた。しかし鳥に関する情報を地元民に尋ねてみると、珍しい鳥の情報はない。ラジャがトゥルティに珍しい鳥がいるという話をしたのでやってきたが、どうやら長居する価値のない場所のようだとウォレスは思った。[続く]

「イギリス人ウォレス（３４）」（２０２１年０５月３１日）

トゥルティ村は人口が多いが、乱雑で汚い。サゴの樹は普通、低地の湿地帯で成育するものなのに、ここでは珍しくサゴ林が山の斜面にできていた。ウォレスが細かく観察したところ、多雨のために斜面にできた湿地にサゴ林があって、特殊な要因がその現象を起こしているのでないことが判った。

トゥルティの原住民はほんの狭い土地にトウモロコシやサツマイモを植える程度で、大した栽培活動を行わず、サゴを主食にして生きている。それがここの地における昆虫類のバラエティを狭いものにしている。

村のオランカヤはきれいな服を着、上等のランプや高価なヨーロッパ製調度品を持っているものの、日々の食生活は他の貧困者と同様のサゴと魚を食べているだけだ。

ウォレスはトゥルティに三日逗留してから、ハヤから来た時と同じサイズのボート２隻でトボ Tobo に向けて３月６日に出発した。トボにしばらく滞在するつもりだったので、その間中ボートをずっと使わせてほしいと依頼し、トゥルティ側は強い難色を示したものの、最終的になんとか了承させることができた。

３月７日夕方、バトウアサ Batuasa に到着。ここからトボのラジャの領地が始まる。トボ村そしてオソン Osong 村で漕ぎ手を増やし、オソンからはトボのラジャまでが乗り込んで一緒にキサラウッ Kisalaut に進んだ。ラジャはキサラウッに家を持っていて、ウォレスにそこを使うよう勧めた。キサラウッで三日過ごしたウォレスは、そこに長居しても意味がないのを確信して、ゴラム Goram 島へ行きたいとラジャに要請した。そのために、プラフと乗組員を貸してほしい、と。ウォレスが Goram と書いた島の名称は、原住民が Gorom と呼んでいたものであり、マジャパヒッ時代のナガラクルタガマには Gurun という名前で登場する。インドネシア人にとって母音の音がいかに融通無碍であるかを端的に示す一例だろう。

ウォレスの要請に対してラジャは手元にある一隻を使わせようとせず、数マイル離れた場所にあるものを取り寄せようとした。数日かけてやっと届いたそのプラフは小さすぎて、ウォレスの荷物を全部載せることができない。ラジャは即座にもう一隻用意せよと命じ、三日間で持って来させるとウォレスに約束したが、三日が六日になっても影も形もない。最終的に隣村のプラフを使うことになった。それなら、最初からそうすれば

すぐに出発できたではないか。そして舟の再手入れ作業が行われ、更に舟の持ち主とラジャの用人の間の激しい口喧嘩が伴われて、十日以上が無駄に費やされた。ウォレスはその間、何ひとつ仕事をすることができなかった。鳥も昆虫も普通のものばかりだったから、珍しい種の個体をたくさん集めて商品を増やすことすら不可能だったのだろう。

４月４日、ウォレスは終にキサラウッを後にした。乗った舟は積載量４トンの小さい舟であり、ウォレスの大量の荷物を積み込むとき、寝るのと料理のためのスペースを残しておかねばならず、たいへんな苦労をした。舟の乗組員は４人きりで、かれらは船首と船尾に設けた３ｘ４フィートの草ぶきのスペースを交代で使うだけ。この舟でバンダ海北部を航行しようと言うのである。

４月５日、舟はセラム島東端を通過し、さらにまっすぐ東方に向けてゴロン Gorong 群島最大のマナウォカ Manawoka 島を目指した。現代インドネシアでマナウォカと呼ばれている島をウォレスはマノウォルコ Manowolko と書いている。ちなみに、ゴロン群島はマナウォカ島・ゴロム Gorom 島・パンジャン Panjang 島および周辺の小島で構成されているというインドネシア語の解説がある一方で、少々ややこしいことに、Gorom 島を Gorong 島と書いているインドネシア語記事もあり、本著では群島名をゴロン、単独の島名をゴロムと使い分けておくことにする。[続く]

「イギリス人ウォレス（３５）」（２０２１年０６月０２日）

ところがマナウォカ島に接近したころ、逆向きの強い海流に押されて櫂漕ぎがはかばかしくなくなった。このままでは、マナウォカへの上陸を諦めなければならないかもしれない。だがもっと危険なのは、バンダ海の大海原に押し流されてしまうことだ。舟にある飲用水は一日と持たないのだから。

舟が危ないポジションになったと感じた時、ウォレスは櫂を漕ぐ乗組員に酒を飲ませた。いきなり元気を取り戻した櫂漕ぎ人たちの釈迦力の活躍で、舟は危機を脱して陸地に近付いて行った。

マナウォカに上陸したウォレスは、屋根のある広いスペースを提供され、そこで休んだ。そのとき、地元のラジャはゴロム島に出かけていてマナウォカにいなかったが、客人到来のニュースを使いが届けて来たので、夜中にも関わらずマナウォカに戻って来た。

翌日、ウォレスはラジャの来訪を受けた。この地のラジャについて、ウォレスは３年前にアル島を訪れた際に会った人物ではないかと予測していたが、その予測が正しかったことが証明された。ラジャはたいへん親密にウォレスを遇した。

ケイ島へ行きたいので船と乗組員を用意してほしいとウォレスが頼んだところ、そりゃ難題だとラジャは顔をしかめた。この時期、島の船と男たちは総出でケイやアルに出かけており、そこへ行くのが困難な船と男たちしか残っていない。ラジャは、一応は当たって見る、と約束した。その間、ウォレスはマナウォカ島の観察に歩き回った。

マナウォカは長さおよそ１５マイルのサンゴ礁でできた島で、内陸部は直立したサンゴ礁の崖になっており、島内には異なる組成の岩もなく、また自然流水も皆無だそうだ。崖の上に登る道が何カ所ができていて、その上が島民の野菜畑になっている。

ここの主流派島民はセラム島のムスリム村民よりも純粋なムラユ系の特徴を示している。ムラユ系のひとびとがここへ定住するためにやって来たとき、先住民は多分いなかったのだろう。セラム島ではパプア系アルフロスの要素が優勢でムラユ系の特徴はあまり強く出ていないのに対し、ここはちょうどその正反対という印象だった。ムラユやブギスの特徴をベースにして、その上に薄くパプア系の特徴が混じった外見は、見映えの良い姿を作り出している。マナウォカの下層のひとびとは近隣諸島の先住民ではないかと思われ、パプア系の外見が濃い。

ゴロム語はセラム島東端地域から近隣の小島までもが使っている。セラム語との類似点はたくさんある一方、東インド島嶼部のどこの言語にもない要素もゴロム語に含まれていて、独自の個性を有しているように思われた。

最終的に舟一隻と５人の男たちが用意され、ウォレスは４月１０日にマナウォカを出発した。舟は島の海岸沿いを東航する。１１日朝、島の東端を通過した。西南西の強風のために、舟はワトゥベラ Watubela 諸島の方角へ舳先を向けることを余儀なくされた。現代インドネシアの地名 Watubela はウォレスの著書にマタベロ Matabelo と書かれている。

ワトゥベラまでの距離は２０マイルもない。５人の男たちは悪天候と荒波を嫌って航行を続けることに反対した。ウォレス自身も嫌な感じがしたものの、今回のこのケイ島行きのチャンスを無駄にするにしのびず、行ってみようと主張した。

乗り出してみたはいいが、激しい舟の揺れにウォレス自身がダウンしてしまうありさま。三四時間してから、舟板に伸びているウォレスに「ほとんど乗り切った」という男たちの声がかかった。しかし舟は揺れ続けているから、ウォレスものびたままだ。二時間ほど経過して揺れが穏やかになって来たので、ウォレスが起き上がって観察して見ると、陸地はまだまだ遠い。海流は逆方向に強く流れていて、前進がはかどらない。夜になって追い風が出たので帆を張り、追い風が止むとまた櫂漕ぎを行う。こうしてカシウイ Kasiui 島に午前４時に到着することができた。ウォレスはカシウイをキシウォイ Kisiwoi と綴っている。３マイル進むのに１２時間を要したことになる。[続く]

「イギリス人ウォレス（３６）」（２０２１年０６月０３日）

上陸して休息し、朝になって朝食を愉しんだ。前日の朝以来、何も食べていなかったのだから、やっと人心地がついたようだ。食事を終えるとまた舟に乗り、海岸線を航行する。ワトゥベラ諸島の最南端にあるウタ Uta 島までやってきたものの、ケイ Kei 群島の手前にあるテオル Teor 島を通過するために好都合な追い風が吹くのを待って、二日間風待ちを行った。

南風を頼りにウタを出発したところ、風は突然北東風に変わり、ボートは南に戻らざるを得なくなった。テオル島の方角に一時間進んだあとで西南西の風を受けたため、ボートは大きくコースから逸脱した。夜になって、ボートが目的地からたっぷり１０マイルも風下の大海に入ってしまったことを知った。このままでは、大量の荷物のために水面ぎりぎりまで沈んでいるボートで大海の中を一週間も進まなければならない。５人の乗組員は不安をあからさまに示した。下手をすればニューギニアの海岸に流れ着き、蛮人の手で皆殺しにされる可能性もある。

口々に戻ろうと提案する５人の男たちを、この風では出発地に戻ることは不可能だとウォレスは説得した。その場所からだと、ウタ島よりもテオル島の方が近い。ともあれ、風と海流に翻弄されているボートが１０時ごろ、幸運にもサンゴ礁に乗り上げたのである。おかげで風と潮に流されるリスクは回避できた。翌１８日朝、風がウタの方角に向かって吹き始めたのを幸い、ボートはワトゥベラへと走り、ワトゥベラに上陸して数日過ごした。その間ウォレスは状況を子細に検討し、最終的にケイ島行きを諦めてゴロンに戻ることにしたのである。

セラム島探査がたいへん大きな不満に終わったのと同じくらい深く、ケイ島行きの放棄もウォレスに残念の思いを抱かせた。アル島で有頂天の成果をあげることができたのだから、ケイ島にもその再現の可能性は大いに存在していたとウォレスは信じている。それがセラム島～ウタ島という動物相の貧困な場所を往来するだけに終わってしまった

のだから、仕事をしてその成果を得るという行動論理のバランスシート上ではじかれた数字は、悲惨としか言いようがなかったのではあるまいか。

サンゴ礁でできたワトゥベラ島はあらゆる場所にココナツヤシの木が生えていて、原住民はヤシの木で生きている。真水を得るのがたいへん困難であるため、飲料は若いヤシの実の液体であり、それは島のどこへ行こうが、ヤシの木に登りさえすれば、いつでもいくらでも手に入る。果肉が固まって来ると、その上にゼラチン質の層ができる。それが原住民にとってのご馳走になっている。成熟したヤシの実の水は捨てられる。

ワトゥベラ原住民はそのヤシの実からヤシ油を作り、買い付けに来るブギスやゴロンの商人に売る。商人たちはそれをバンダやアンボンに運んで売る。ヤシ油作りが島をあげての産業になっているのだ。

ココナツヤシ以外にはアレンヤシの樹があり、その実はシリの葉を噛むときの副素材に使われる。実はスライスし、乾燥させてペースト状にこねる。シリの葉を噛むのはムラユ族やパプア人の伝統的な習慣だ。やっとひとりで走れるようになったくらいの幼児が口に赤いペーストの塊をはさんでいるのを目にするのは、その年頃の幼児がタバコを吸う姿を目にするのよりはるかに大きな違和感をもたらすものである。とはいえそれがかれらの習慣なのであり、乳離れしていない子供にすらそのようにしているのだから。

ココナツヤシの花穂から採集した液体を発酵させると、パームワイン palm wine ができる、とウォレスは書いている。パームの語がココナツを含んだものとして使われている用法だろう。それをココナツワインと呼ぶ人もあるだろうが、ウォレスが単語を誤用したわけではあるまい。

ワトゥベラのパームワインは実においしい飲み物で、ビールよりもサイダーに近いが、ビールくらい酔わせる力がある。ウォレスにとって、ワトゥベラでの数少ない贅沢品がそれだったようだ。[続く]

「イギリス人ウォレス（３７）」（２０２１年０６月０４日）

原住民の食べ物はココナツとサツマイモ、時たまのサゴケーキ、そして加熱して油を採ったあとの残りかすなどがメインであり、その貧しく偏った食事がしばしば発疹や壊血病を招き、また子供たちの顔にただれを起こさせて醜いものにしている。

住民の居住場所は島の高所に設けられており、狭く急な斜面や階段を登って行く。生活環境は腐った殻や油粕などの廃棄物に満ちていて、住居も暗く、油っぽく、きわめて不潔だ。生活状態も不潔で野蛮であり、衣服も洗濯しないぼろ布を身に着けているだけで、洗濯するということは思考の中に置かれていないようだ。

そんな惨めな日常生活をしているにもかかわらず、かれらは金持ちであり、生活必需品ばかりか贅沢品すら購入できる原資と方法を持っている。女たちはみんな重い黄金のイヤリングを着け、どの村もブロンズの小型砲を十数門持ち、村の首長はウォレスに会うときに花柄のサテンと絹のローブを着用した。だが首長のような上流層のひとびとですら、住居は一般庶民とたいして違わず、また食べ物にも差がない。各村に鶏はたくさんいて、ウォレスは鶏卵をプレゼントされた。しかし村人たちは鶏や卵を自らの食用にせず、ペットや商品として扱っている。

南東風が毎日吹くようになったので、ウォレスは４月２５日にマナウォカに戻った。そして翌日、ゴロム島の首府オンドル Ondor に移動して、そこにひと月滞在した。ウォレスはラジャの家を間借りした。

ゴロム島住民は商人である。かれらは毎年、タニンバル Tanimbar、ケイ、アルの島々やパプア島西部のウタナタ Oetanata からサルワティ Salwatty までの北海岸一帯、ワイゲオ島、ミソオル島（現代インドネシアの綴りは Misool で、ウォレスはオランダ式の Mysol と書いている）などを訪れる。そして西方へはティドーレ・テルナーテ・バンダ・アンボンまで航海ネットワークをつないで商品の流通販売に従事している。

ゴロム商人が頼りにするプラフは船作りの達人、ケイ島民が作ったものばかりであり、その造形美と制作技術の巧みさにかけて他に非類のないものだ。ケイ島では毎年、大小の船が数百隻作られ、この島の代表産業になっている。

ゴロム島からの輸出品はナマコ、マソイ樹皮、野生ナツメグ、べっ甲などがあり、セラムラウッ Seram Laut 島やアル島に運んでブギス商人に売る。 手工産品としては帆布・粗い綿布・パンダンの箱などもあるが、陸上での生活は概して怠惰であり、アヘン吸引に金と時間を費やすために生活クオリティは貧困だ。

このわずか１０マイル程度の島に十数人のラジャがいる。ラジャの生活レベルは一般庶民と大差なく、形だけの統治者として座しているだけだ。ところが植民地政庁からオーダーが下って来ると俄然、首長としての動きを展開する。自分より高位のオーソリティが背中に付いたとたん、権力を振るい始めるのである。

ゴロム島内アマル Amar 地区のラジャの話によれば、植民地政庁が島内の統治に干渉し始めたのは数年前からで、それ以前は島内各ラジャの領地ごとにお互いが商売敵になって暴力的な争いがひっきりなしに起こっていた。商売敵のプラフ同士が海上で戦争したり、商売に訪れた島の同じ村を目指していた別々のグループが途中で出会って戦争するというようなことは普通だったそうだ。

ところがより文明な上級統治者が原住民の頭上に乗って破滅的な闘争の抑止を図るようになってから、どのような諍いも平和的に解決することが習慣化してきた。ヨーロッパ人による蛮族の土地の領有支配がもたらす優れた効果がそこにある、とウォレスはそれを評価している。

しかし決して諍いがなくなったわけではないし、暴力による解決が消滅したわけでもない。ある日、ウォレスの滞在している村で、長銃と重い弾帯を持った５０人ほどの男

たちが村の中を通過して行った。かれらは村の境界線に関する諍いについて、相手方と交渉するために協議の場所に赴く途中、その村を通過したのだ。

協議が穏やかに進展せず、交渉が決裂して戦争する必要性が起こった場合のために、かれらは万全の備えで交渉に臨むのである。[続く]

「イギリス人ウォレス（３８）」（２０２１年０６月０７日）

ウォレスはマナウォカで小型プラフを一隻、１００フローリンで購入した。かれはそれを自分の航海に最適な形に改造する意向だった。ゴロム島にケイの船作り職人が数人移住しているから、改造作業はゴロムで行う方が楽だというアドバイスに従って、そのプラフをゴロムに運ばせた。

ウォレスがこの船で長い航海をするための最適な仕様にするのがプラフ改造作業の目的だったのだが、作業が始まったとき、ウォレスは自分の採集活動を中止しなければならなくなったことを悟った。かれ自身が改造現場に常にいなければ作業が行われないことが判明したからだ。おまけに船の内部改造はウォレス自身が行わなければならないことも明らかになった。ふたりの助手に手伝わせて、ウォレスは内装作業に取り組んだ。

自分たちの船がこれまで見たこともないような形に改造されていること、白人がそれを自力で行っていること、それらの信じられないような事実が展開されているのを知って、大勢の原住民がたいへんな興味を抱いて見物にやって来た。

改造作業のために雇った者たちはたいへん時間にルーズであり、あれこれさまざまな言い訳を用意して、半日くらいしか働らかない。そもそも、食べ物が何もないからという理由で、全員が給料の前借を要求するのである。ウォレスが前借を与えると、翌日は必ずやって来ない。二～三人を超えて揃う日は滅多になく、ウォレスが二度と前借を了承しなくなると、二度と顔を出さなくなる者が少なからずいた。ウォレスは月給でかれ

らを雇っているから、月給を取りながら一日も働かないのは犯罪行為だ。ウォレスは村警察に訴えて、犯罪者への措置を行った。金を返すか、それとも働くか、である。

そんな苦労をして、プラフの改造はやっと終わった。ケイ人船作り職人５人が改造作業の最後まで残った者たちだった。いったい何人がウォレスのプラフ改造作業に関わったのだろうか？

悲惨な突発事件が起こったのはそのころだった。数カ月前にパプア貿易に出たこの村のプラフが土着民に襲われて１４人が殺されたのである。その一行はパプア島南西部のエッナ Etna 湾にあるラカヒア Lakahia 島対岸の村に上陸して、現地の村人とナマコの取引をしていたところ、襲撃されて皆殺しにあった。プラフの番をしていた６人はすぐさまボートで海上に逃走した。飢えと渇きにさいなまれながら海を渡ったその６人が村に帰って来てその事件を報告し、村中が悲嘆にくれた。

殺された１４人の中にラジャの息子もいた。他の者もすべて村人や奴隷たちであり、夫・兄弟・息子や遠縁の者を奪われた女たちが立てる嘆きの合唱が夜中まで村の中に満ちた。言うまでもなく、ラジャの家は夜遅くまで混雑した。ウォレスはかれらに同情した。

パプア島南西部海岸のその地域はプリブミ商人たちに Papua Kowiyee あるいは Papua Onen と呼ばれており、反逆的で血に飢えた部族が住んでいることでよく知られている。探検時代の初期にその地域を訪れたヨーロッパ船の指揮者や乗組員もしばしば殺された。昨今でも、犠牲者が出ないまま一年を終えた年はほとんどない、とウォレスは書いている。

生還した者たちの報告によれば、一行は数日前にその地に上陸して海岸で野営し、プラフは近くにある小さい川に乗り入れて停泊した。そして土着民とナマコの取引の商談を行っていたとき、襲撃が始まったそうだ。

一行はその地域の特徴を熟知しており、土着民の性質も十分に知っていて、たいていは毎年同じ村にやってきて商売するから、相互に顔見知りという信頼感が商売の中に反映される。ゴロムやセラムの商人たちはあまり攻撃的でなく、誠実に商売を行っており、相手を威嚇したり騙したりして法外な利を得ようとするようなことをしない。ましてやそこの土着民の性質を熟知しているのだから、相手を怒らせればどんな結果がもたらされるかは容易に想像がつくはずだ。[続く]

「イギリス人ウォレス（３９）」（２０２１年０６月０８日）

とはいえ、被害者全員が殺されており、また加害者を捕らえて法廷に引き出すこともできないのだから、襲撃の前に何かがあったのか、襲撃が計画的に行われたのか、そのあたりの事情は推測の域を出ない。しかし歴史をたどって見るなら、４年前にちょうど同じその村でゴロンのプラフ商船の５０人超が皆殺しにされ、プラフに載せられていた商品や装備・艤装品の一切が奪われた事件があり、ゴロンのプラフがそこを訪れるかぎり、適当な期間を置いて同じことが繰り返される可能性は高い。

その状況を改善して、より文明的な通商を行えるようにするためには、その村に対する報復が不可欠であり、そのような蛮行は長期のレンジでバランスシートが黒字になることはありえないという教訓を学ばせる必要がある。ところがかれらに罰を与えようとしても、かれらは外来者の容易に進入できない山岳部の密林奥深くに逃げ込んで、裁きを免れることができる。かれらはいかに蛮人であっても、そのような因果関係と結末を十二分に検討したうえであらゆるチャンスを利用して強奪や殺人を行っているのであって、蛮人だから物事を論理的に思考する能力を持たず、後先の考えもなしに暴力だけをふるっているという見方はあまりにも的外れだろう。

原住民首長を使って強奪者・殺人者を捕らえさせる方法がないわけでもあるまいが、オランダ植民地政庁が行っているシステムは自分の考えとあまり一致していないようにウォレスには思われた。

ウォレスのプラフが完成して進水し、その日に荷物の積み込みを終えると、即座にその翌日、一行は出発した。１８６０年５月２７日のことだ。その迅速な動きに地元民は呆気に取られた。乗組員は三人のゴロム人と少年ひとり、そしてアンボン人の少年助手ふたり。

翌日、ブギス人集落のあるキルワルKilwalu島に到着した。キルワルはセラムラウッ島の北西にある小さい砂州島で、ブギス人の東方の要港であり、島中が集落でいっぱいになっている。島の大きさは５０ヤードもなく、高さも満潮線の３～４フィート上でしかない。ところが素晴らしい真水が湧く泉があって、他の島とつながっていることを想像させてくれる。

ゴロム商人はここへやってきて、ナマコ、マソイ樹皮、野生ナツメグ、べっ甲などかれらの物産を衣服・サゴケーキ・アヘンと交換する。他地方の商人も、真珠や少量の極楽鳥を運んで来る。バリの帆船はコメを運んできて、パプア人奴隷を買って帰る。セラム島からサゴ、バリやマカッサルから米がもたらされて、あまり高くない値段で売られている。

ゴロム商人のここへ来る目的の大きい部分はアヘンの仕入れだ。ゴロム島内自身も大きい市場になっているが、ミソオルやワイゲオも発展しているアヘン市場だ。そこへアヘンを紹介したのもゴロム商人であり、島の首長や金持ち有力者らがアヘンに没頭しているため、アヘンはゴロム商人にとって強い商品になっている。

はるか遠いシンガポールからブギス人は、華人の工作物やインド人の雑貨品、さらにランカシャーやマサチューセッツの織機までをもここに持ち込んでくる。パプアのあち

こちで交易して来たブギスのプラフがここに集まって来て、貨物を乾燥させたり揃え直したりし、更にスラウェシへ戻る航海のために船の手入れを行っている。

ウォレスがキルワルへやってきたのは、集めた標本をマカッサルの船に託してテルナーテの家へ送ること、ならびにバーターのための商品を仕入れることが目的だった。ナイフ・水盤・ハンカチなどをバーター用に仕入れ、斧・布・ビーズなどを自分用に買い、さらに乗組員が海賊対策に絶対必要と言い張ったので長銃を二丁購入した。他にはスパイスや航海中の食料などで、最期のドゥイッがなくなるほぼ直前まで行った。

それらの用事のためにキルワルに二日間滞在したあと、６月１日早朝にウォレスは出発した。強い東風に押されて正午にはセラム島東端を通過したものの、天候が悪化してきたためにセラム島北東海岸部のワルスワルス Warus-warus 村対岸にあるサンゴ礁に入って停泊し、天候の回復を待った。そして夜が来て、スコールに見舞われ、翌朝目を覚ましたとき、ゴロム人クルー全員とプラフが姿を消していた。[続く]

「イギリス人ウォレス（４０）」（２０２１年０６月０９日）

ウォレスはアンボン人助手に銃を撃たせた。遭難信号だ。その結果、村の首長が迎えのボートをよこした。逃亡者が出たことを近隣の村々にすぐ連絡するよう、ウォレスは首長に要請し、それは即座に実行された。ウォレスのプラフは小さい川の中で、引き潮の泥の中に立っているのが見つかった。ウォレスの当座の滞在のために、首長は村人の家に間借りする世話までしてくれた。

ゴロム人乗組員がどうして全員逃亡したのか、ウォレスは考えあぐねた。かれらが望むものはすべて買い与え、ウォレス自身もかれらに親切にしてきたので、待遇の不満から起こったとは思えない。かれらは多分、ヨーロッパ人のご主人様に仕えることに慣れていないため、その気詰まりと漠然とした恐れがこの結果を生んだのではないかとウォレスは考えた。

今ウォレスが滞在している、このセラム島東部地域はサゴの宝庫だ。ウォレスは一週間動きが取れなかったが、その間じっくりとサゴについての観察を行った。サゴはセラムだけでなく、近隣一帯の島々の住民たちにとっても重要な食糧になっているのである。

全長２０フィート、胴回り５フィートにも達するサゴの幹をどのように食料に加工しているのか、しかもそれが意外に簡便な道具と軽い労働作業でなされている、といった実態を旅行者が自分の目で見る機会はそうざらにあるものではあるまい。

生えているサゴの木の一本一本に持ち主がいる。場所がどこであれ、生えているサゴの木を勝手に伐り倒せば盗難事件になるということだ。持ち主は必要に応じてサゴの木を伐り、幹を食料に加工する。その結果得られた、少し赤みがかったでんぷんの塊が生サゴで、それはおよそ３０ポンドくらいにまとめてサゴの葉で包み、円筒形にする。たいてい、一本の樹から円筒形の生サゴが３０個くらいできる。

その生サゴをゆでると、少し渋みのあるゼラチン質の塊になる。ひとびとはそれを、塩・ライム・とうがらしなどと一緒に食べる。それをケーキ型に入れて焼くと、サゴケーキができる。

サゴケーキ製造用の粘土製の焼き型は、幅４分の３インチ、広さ６～８インチ平方のスリットが６または８横並びに空いているオーブンだ。生サゴを砕いて天日乾燥し、篩で細かい粉末にする。それをスリットの中に軽く詰め、サゴの木の皮でふたをし、熾火の上で５分ほど焼くとサゴケーキができる。

熱いサゴケーキはコーンフラワーケーキのように柔らかく、その表面にバターを塗り、砂糖とココナツパウダーをふりかけると、絶品のおやつになる。精製されて売られているサゴ粉を使っても、それに匹敵するうまさが味わえない。

サゴケーキは数日間天日乾燥させて、保存食にすることができる。その場合は２０枚重ねて一包みにする。乾燥させたサゴケーキはカリカリに乾いて硬くなり、数年間の保

存に耐える。それを食べるときは、砕いたものを口に入れて噛み続ける。幼児でさえ、そのようにして食べている。

それを水に浸してからトーストすると、焼き立てのような状態に戻る。ウォレスはコーヒーの友として、それにバターを塗って愛用した。水に浸したまま加熱してやると、プリン状になる。米が得られなかったり、あるいは高価になった場合に、その代替品としての役割をサゴプリンが務めることもしばしばだ。

サゴケーキは一回の食事に２枚食べれば十分であり、大人一人の一日当たりの需要は５枚と考えられる。円筒形の生サゴひとつからサゴケーキが６０枚できる。つまり、一本のサゴの樹からサゴケーキが１千８百枚作れるという計算になる。それを一日５枚食べて行けば、３６０日食いつなぐことができる。ほぼ一年間の食料がサゴの樹一本を加工することで手に入るのである。［ 続く ］

「イギリス人ウォレス（４１）」（２０２１年０６月１０日）

一年分の食料を手に入れるためのコストはどうか？サゴの樹を生サゴに加工するのに、男ふたりが５日間働けば十分だろう。しかも５日間に作業プロセスを分けることで、一日当たりの労働は軽いものになる。続いて生サゴをサゴケーキに焼く作業を行う場合、５日かけて１千８百枚を焼くのなら、一日のノルマは３６０枚で焼き型の６０回転分になる。型を複数持てば実労働時間は短くなる。もちろん、生サゴも日持ちがよいので、一気に一年分を焼き上げる必要などまったくなく、サゴケーキ作りは一年中のいつでも行うことができるから、一年の中のその日数だけ働けばよい。

「一年を十日で暮らすよい男」という日本のことわざは、セラム島人の生活にも十分に当てはまるものだったようだ。しかしそれでセラム島人がよい男になったかどうかは分からない。

サゴの樹のオーナーにとっては上のような話になるが、サゴの樹を持っていない者は金で買わなければならない。樹を一本、丸ごと買うのは７シリング６ペンスの出費になる。労働力を買う場合は一日５ペンスでひとり雇える。樹のオーナーが行っている上のような作業を全部金で買おうとすれば、１２シリングで終わる。一年間の食費が１２シリングでまかなえるのだ。つまり、サゴの食費はきわめて廉価であると言うことができる。

この食料の廉さは決定的な不利をもたらす。サゴの産地の住民は、コメ産地の住民ほど裕福でない。かれらは野菜や果実を食べず、食べ物はサゴと小魚ばかりだ。家での物作りといった換金的仕事もほとんど行わず、小規模な商売や魚取りのために近隣の島々を巡るだけで、暮らしの中の慰安や娯楽はボルネオの内陸ダヤッ族やヌサンタラのもっと未開な種族よりも貧しい。

ウォレスはそのお気に入りのサゴケーキをたくさんのイギリス人に知ってもらいたいと考えたのだろう。かれはもちろんサゴケーキの標本をイギリスに送った。４枚のサゴケーキは完璧な状態で、いまだにイギリスのキュー王室植物園に保存されている。キュー王室植物園には、ムルベイ murbei 樹の木の皮で作られた衣服も保存されている。それはウォレスがバチャン島で入手したものだ。

そのたいへん経済的な食糧であるサゴが、政府方針によって非常食の地位に追いやられてしまった。オルバレジームは全国民に食を与えるためのツールとして米・トウモロコシ・大豆を選択し、コメの生産とコメの消費を根幹に置く一元的な国民食糧自給政策を推進したのである。

言うまでもなく、コメ栽培にあまり適していなかった東部インドネシア地方にもその波は押し寄せた。行政は全国民が同じようにコメを作りコメを食べるように導いた。そのために、惜しげもなく国費が支出された。おかげで、マルクにはブル島やセラム島という米どころが生まれた。ところが、実際にそれらの土地でコメ作りに従事したのはジ

ャワ島から来たトランスミグラシ農民がメインを占め、原住民が行った耕作との間に大きな差が開いたのである。原住民はコメ生産に熟練することなく、生産の場にあまり関わらなくなって、消費者の役割だけを担うことになった。政府が廉くした貧困者用米が順調に送られて来ればそれを買い、その供給に問題が起こったときにだけサゴに手を出すようになってしまったのだ。

マルク州食糧自衛局データによれば、州民のサゴ消費はひとり一日当たり３．２グラムしかなく、コメ消費量はひとり一日３１０．７グラムという大きな差がついた。州民がサゴを顧みなくなるとともにサゴ林面積も減少し、５０年前に１０万ヘクタールあったサゴ林は三分の一になってしまった。

インドネシアに１２５万ヘクタールのサゴ林があって、そこから年々３，７５０万トンの乾燥サゴが生産されるなら２億人の食糧自給は万全である、と言われている。そのサゴが、ただむなしくジャングルの一部を形成するだけになってしまっているのが現状だ。

［ 続く ］

「イギリス人ウォレス（４２）」（２０２１年０６月１１日）

ところが、ウォレスの愛したサゴケーキを作っている住民がいまだにいた！！ジャイロロのドディンガ村にロティサグ roti sagu を昔ながらの手作業で作り、販売している村人が何人かいるのだ。ウォレスがサゴケーキと書いた品物は原住民がロティサグと呼んでいたものであり、ウォレス自身も自著の中でそれに倣ったサゴブレッド sago read という表現を併用している。

サゴの樹の加工をほとんどやめてしまったマルク人の中に、ロティサグを作るためにそれを続けている者がいるのだろうか？残念ながら、その答えはティダッだったのであ

る。昔ながらのロティサグの形をしている品物を、材料を替えて作り、昔の名前で売っていたということで、世間ではよくある話だ。

ドディンガ村のアルウィヤさんは、キャッサバの粉をサゴの代わりに使い、仲間とふたりで一日にロティサグを３百枚作る。作った製品は乾燥させた上で、ロティサグの名前で近隣の商店に卸し販売しているのだ。

朝午前４時から、サゴケーキの型を熱し、その中にキャッサバ粉を軽く詰め、２～３分焼いて食パンの形にし、作ったものを１～２日間天日乾燥させる。乾燥させたものはひと月持つが、乾燥させないものは一週間しか持たない。

ドディンガ村のアブドゥラさんはシンコン製ロティサグの愛用者だ。朝はこれを食べるのが一番だとアブドゥラさんは言う。主食はもちろん、もう米の飯に変わっている。ただ、子供のころから培った朝食のロティサグを続けることが、材料や味が変わっても、かれにとっては意味のある人生なのだろう。

ワルスワルス村は低地の湿地帯にあり、住民は栽培らしいことをしないから、森林へ入って行く道もなく、ウォレスはその地で鳥や虫の採集ができなかった。ウォレスにとってセラム島はあくまでも採集活動に向かない土地であった。

村の住民を長期に雇って遠方まで行くことができなかったため、セラム島北岸中央部にあるワハイ Wahai までという条件で乗組員を集め、５日かけてワハイに移動した。ワハイはセラム島北岸のオランダ人本拠地であり、軍事基地がある。６月１５日にワハイに到着したウォレスは、基地司令官と旧知のローゼンベルフ氏に迎えられた。ローゼンベルフ氏は業務出張でワハイに来ていたのだ。ローゼンベルフ氏はクルーに払う金をウォレスに貸してくれた。

ウォレスと契約して各地で標本採集活動を行っているチャールズ・アレンからの手紙もワハイに届いていた。そのとき、かれはミソオル島のシリンタ Silinta にいて、コメ

などの必需品や標本用ピンなどが欠乏しており、おまけに病気になったために、ウォレスの援助を求めていた。ウォレスが来られなければ、かれはワハイに移動すると書いている。

現代インドネシアのミソオル島にシリンタという地名は見られず、あるのは東南海岸部のレリンタ Lelintah という地名だが、ウォレスが書いた地図にあるシリンタはずっと西の位置にあり、本当に同一なのかどうか確信が持てない。しかし英語版インターネット記事には、そのふたつが同一地であるように書かれている。

ウォレスはミソオル島を経由してパプアのワイゲオ島へ行くことにした。その航海のためのクルーが３人と水先案内人ひとりが集まった。鳥撃ち用に雇ったアンボン人少年ふたりも、ウォレスの助手としてその航海に同行する。セラムとミソオルの間は６０マイルの大海だ。その大海の上を東からの強いモンスーンが吹き付けている。それを考慮したウォレスは、航路をまずセラム島北岸のはるか東方まで進み、北上する時西に流されてもシリンタに着けるように設定した。

６月１７日にワハイを発ち、沿岸を東に進んだ。１８日の夜明けを迎えたとき、プラフはろくに東方へ移動しておらず、まっすぐ北上できたとしてもミソオル島西端部近辺にたどり着けるような位置にいることが明らかになった。水先案内人の不手際だったようだが、本人はここから北上してもシリンタに着けるから大丈夫だと太鼓判を捺す。

[続く]

「イギリス人ウォレス（４３）」（２０２１年０６月１４日）

北に向かって大海に乗り出すと、風が強まり波は荒れ、すさまじい揺れにウォレスはダウンした。日没時、ミソオルの山がはっきりと見えたが、プラフはまだ半分も海を渡

っていない。一夜明けて見ると、プラフはもっと西に流されて、ミソオル島西端の海岸に着けることすら至難のわざであるように思われた。プラフを東に向けようとしても、風と海流がそれを許してくれない。

こうして船は１９日午後、ミソオル島から１０マイルほど北西に離れたカナリ Kanari 島に到達し、ミソオル島南岸に上陸するのは不可能なことが確定した。しかしそこから東航できるなら、ミソオル島北岸部のワイガマ Waigama に上陸する可能性はまだ残されている。

場所がどこであれ、ミソオル島に着きさえすれば、小型ボートで海岸線を回り、シリンタにアレンの必要な物資を届けることができるのである。ウォレスは風待ちをしようと考えた。

カナリ島に上陸して食事とコーヒーで一休みしようと思ったにもかかわらず、自然はそれすら手を貸そうとしない。その位置からミソオル島への接近も既に不可能になったと判断したウォレスは、カナリ島の北にあるポッパ Poppa 島へ向かうことにした。ウォレスの言うポッパ島とは、多分現代インドネシアのコフィアウ Kofiau 島と思われる。

２１日夜明けごろ、ポッパ島に近付いた。島に上陸するべく努めたにも関わらず、風向きがころころ変わって島の西に流された。こうなれば、できるだけ早くワイゲオ島に着いてミソオル島へ行く船を探し、アレンへの荷物をそれに託す方が合理的だ。ただ、ワハイを出てから四日間、どこにも上陸して休息を取ることをしておらず、全員が疲れ切っている。ウォレスの地図にはポッパ島の２５マイル北方に三つの島が描かれているので、そこへ上陸して１～２日休むことにした。

苦労の末に、その島のひとつの南岸に達して投錨することができ、そのまま夜を明かした。朝起きて見ると、プラフを錨だけでそこへ置いておくわけにいかないことが明らかになった。プラフを大岩に縛り付けておかなければ、プラフがいつの間にかどこかに

消えてしまうことになりかねない。上陸して休んでいる間にそんなことが起これば、悲劇的な結末が一行を待ち受けている。

岩場に向かうために錨を上げて動き出したが、またまたプラフは陸地から離れてしまい、少し深い場所で投錨することになった。パプア人とムラユ人のクルーふたりがそれぞれ手斧を持って海に飛び込んだ。泳いで浜に上陸し、ジャングルに入ってプラフと岩をつなぐためのロープに使える蔓を取って来ようというのである。

およそ１時間後、プラフの錨が緩んで引きずられはじめた。すぐにスペアの錨を投げ込み、状況は収まったが安心はできない。上陸したふたりに、すぐ戻るよう銃で合図した。ふたりは浜辺に戻って来て、食用になる貝を集め出した。ちょうどそのとき、また錨が緩んでプラフはゆっくりと沖に流され始めたのである。プラフにいる者はすぐにオールを手にして船を戻そうとしたが、何の役にも立たないことを悟って諦めた。声を限りに叫んでみたものの、浜にいるふたりの耳に届いた気配はまったくなかった。

浜にいるふたりはプラフに視線を向けた。現在起こっている状況が何であるのかをしばし考える姿を示し、突然狂ったように海に走り込んで泳ぐそぶりを見せたものの、考え直したようだった。ふたりは再び森の中に走り込んだ。ウォレスはふたりが森の中の柔らかい木を伐って筏か何かを作り、まだ浜から三分の一マイルほどしか離れていないプラフを追いかけて来るつもりだろうと期待した。ところが、もう追跡の準備ができただろうと思われるタイミングで、浜辺に煙が上がったのを見た。ふたりは集めた貝を焼き始めたのだ。

プラフは浜から１マイルほど離れてしまい、西に向かって流されている。だが、ふたりが置き去りになった島の反対側に上陸できれば、ふたりを収容することはまだ可能だ。そう考えて努力してみたものの、船を東に進ませることは不可能だった。ウォレスの船がふたりを収容するための動きはもう残されていなかった。ふたりがこのプラフを追って来ることだけがクルーの完全な復元の道であり、ふたりがその意志を持つことを

ウォレスは深く期待した。そのために隣の島に上陸して数日待ち、ふたりにチャンスを与えなければならない。いやそればかりか、プラフ内の飲用水はあと二日しか持たないのだ。水の補給も不可欠である。[続く]

「イギリス人ウォレス（４４）」（２０２１年０６月１５日）

その夜、プラフは隣の島の沿岸で停泊し、全員が船内で眠った。翌６月２３日朝、ウォレスはふたりを伴って上陸した。船内にもうふたりを残したのは、朝食を作らせることと緊急事態発生に備えてのものだ。緊急信号用として長銃に弾丸を込め、プラフに残る者に渡した。

島の海岸沿いを歩いて東端へ行くと、焚火の跡が見つかった。薪に付いている葉はまだ緑色で、きわめて最近のものであることが分かる。ジャングルを切り開いて島の高台に上ってみたが、ジャングルがあまりにも濃くて遠くを見渡すことができなかった。

低地に降りて泥と朽ち葉の水たまりを見つけたので、湧水かも知れないと思ってすべてを取り除き、プラフに戻って朝食を摂った。そのあと、その場所へ戻ってみたが、やはりただの雨水溜りでしかなかった。ウォレスは島の反対側へ行って、ふたりのクルーが置き去りになった島から見える場所に、かがり火を用意した。夜に大きいかがり火を燃やして、ふたりに待っていることを知らせるためだ。

翌日、ウォレスは再び飲み水探しを行い、幸運にも数ガロンの真水が溜まっている岩穴をふたつ見つけた。プラフからすべての水桶やコップを持って来させ、真水を全部汲み上げて水桶をいっぱいにすることができた。

２５日夜８時ごろ、プラフはワイゲオに向けて出発した。翌朝、プラフはワイゲオ島西端から２０マイルほど西の地点まで来ていることが分かった。２６日、ワイゲオ島の

前に散らばる小島の間を、サンゴ礁の上に出たり離れたりして不安におびえながら、ますますワイゲオ島に近付いて行く。夜になって、ワイゲオ島の水域に入ったと思われたが、何をどうすればよいのか見当がつかない。ワイゲオ島を知っている唯一のクルーは、あの島に置き去りになってしまったのだから。ウォレスはプラフの帆をすべて下ろし、ただ流されて行くにまかせた。

また夜が来て、プラフはサンゴ礁に乗り上げた。風が強ければプラフは粉々になったかもしれないような危機をなんとか脱し、２７日には帆を揚げて航行を続け、午後に良さそうな島を見つけて停泊し、上陸した。翌朝また出発してワイゲオの南海岸線に達したので、島を分断している狭い海峡を目を皿にして探したが見つからない。村はその海峡の奥にあるのだ。

ワイゲオ島の中央部は巨大な湾になっていて、湾の北の奥が地峡になっている。南海岸からその湾までの間はまるで川のような狭い海峡であり、湾岸の村々へ行くには海峡を通過しなければならない。

船は奥まった入り江に入って行った。ここに海峡があるのではないだろうか。しかし夕暮れが迫っていたから、停泊することにした。プラフの飲み水はもうなくなってしまい、コメを炊くことができない。

２９日朝、上陸して真水を見つけたから、不安はひとつ取り除かれた。そのあとは、海峡を探すか、あるいは海峡を知っている原住民を見つけ出して案内してもらうことに努めるばかりだ。ワイゲオ島南岸を航行して来た三日間、家もボートも人間の姿も、そして一条の煙すら見ることがなかった。一度だけ、一艘のカヌーを目にしただけだ。

入り江の東端まで来たので、西に引き返すことにした。そして夕方ごろ、幸運にも海上に建てられた７つの家屋があるだけの集落を発見したのである。そこの部落長であるオランカヤは多少のムラユ語を話すことができた。

部落長の話によれば、海峡はまちがいなくウォレスが通って来たこの入り江の中にある。しかし密生したジャングルのためにその入り口が分かりにくく、海岸近くまで接近してはじめてはっきりそれが分かるのだそうだ。

海峡の中にある最初の大きい村はムカ Muka 村で、その先の村を三つ通り越してからやっとワイゲオ村に達する。ここからムカ村までは二日の行程だ。ウォレスはオランカヤに依頼した。ここからムカ村まで案内してもらうために、住民ふたりに手伝ってもらえないだろうか。親切なオランカヤはその用意のためにー日待つように言い、ウォレスはその間、そこで鳥を撃った。[続く]

「イギリス人ウォレス（４５）」（２０２１年０６月１６日）

７月１日朝、ふたりのワイゲオ人を加えたプラフは、そのふたりがムカから戻るための小舟をつないで出発した。一日がかりで到着した海峡の入口は小さい川のようであり、おまけに出張った土地で隠されていて、密生したジャングルが海岸線まで覆っているワイゲオ島をよく知らない人間には、見つけるのがきわめて困難だ。

他所では見ることのほとんどない風景を両岸に見ながら海流に運ばれて海峡を進んで来たプラフは途中で進行を停止した。海流が弱まったのである。櫂漕ぎを始めたが、重く短いウォレスのプラフは緩慢にしか前進しない。三日かけて広まった湾の入り口までたどり着いたところ、正面から吹く風に足止めされて、動けなくなってしまった。このままだと何日も、いやー週間以上もそこで足止めのまま日を重ねることになりかねない。

すると何と素晴らしいことに、奇跡が起こった。ムカ村から迎えがやってきたのだ。ムカ村の首長のひとりが、ウォレスがやってきていることを神秘的な方法で知った。かれはすぐにひとを集めて、ウォレスを迎えるためにココナツと野菜のプレゼントを持ち、自ら船に乗って来たのである。

湾内の状況を熟知した多数の人手の助力によって、ウォレスのプラフは難関を抜けだすことに成功し、その日の夜にムカ村の港に到着した。ウォレスのプラフがゴロム島から処女航海に出て以来、ちょうど４０日目のことだった。ワハイを出てからの苦難に満ちた航海、ワイゲオ海域に入ってから５０マイルを８日間漂った末の大団円だった。こうして苦しみは癒され、思い出話に変質して行った。

ムカ村に着いてからウォレスはすぐに、途中の島に置き去りになったクルーふたりの捜索隊を組織して出発させた。ムカ村住民三人とウォレスの部下ひとりが小さいボートで出発した。ところがこの一隊は遭難者を連れないで、十日間で戻って来た。あの島一帯がたいへんな悪天候になっていて島を望むことはできても接近することができず、６日間天候の回復を待ったが同行したウォレスの部下が病気になり、また水と食糧も欠乏して来たために諦めざるを得なかったのだ。

しかしウォレスは諦めなかった。ウォレスはナイフ・ハンカチ・タバコそして十分な食糧を与えて再度のトライを促した。かれらは目指すべき島をもう知っている。この第二次捜索隊が７月２９日にムカ村に戻ったとき、島に置き去りになったふたりがその中にいた。

ふたりはひと月間、あの島で世の中から隔絶された生活を送っていた。飲み水を発見し、島に生えている植物と貝や亀の卵を食べ、病気にもかからず、着の身着のままで生き延びていたのだ。痩せて体力が弱ってはいたが、しかし健康だった。

ウォレスが向かいの島で三日間ふたりを待っていたことをかれらは知っていた。だが、海を渡ることをしなかったのは、途中で海流に運ばれて大海に流されたなら、破滅が待っているだけであることを理解していたからだ。ふたりはウォレスが必ず助けをよこすだろうことを確信していた。そしてその通りの結末になったのである。

湾の南岸にあるムカ村は、浅い海の上と岸に貧相な小屋がおよそ半マイルに渡って不規則に散らばっている貧しい村だ。その周囲をいささかの畑地と二次林が取り巻き、その半マイルほど向こうに処女林が広がっている。処女林の端は１～２マイル中にまで家屋や農園が作られて、そこへ行くための道がある。土地は平坦で湿地もあり、海に向かう流水が小川を作っている。

ウォレスはしばらくムカ村に滞在しようと考え、仕事のしやすさを考えて処女林の中に家を建てることにした。しばらくの期間のつもりであって、ドレの時のような長期滞在はしない意向だったから、たいした家屋は必要がない。[続く]

「イギリス人ウォレス（４６）」（２０２１年０６月１７日）

処女林の中の小川と道からあまり遠くない場所に巨大なイチジクの樹が一本生えている。イチジクの樹だけを残してその周辺を切り開き、そこに家を建てることにした。柱の高い方が７フィート、低い方が４フィートの長く狭く低い小屋を建て、帆布と村の廃材アタップで壁を作り、ヤシの葉のマットを屋根に張った。６人ほどの村人がその家を建てるのに協力してくれ、三日間で完成した。

家の中を快適に整え、そこでの生活を始めた初日の夜、激しい雨が降って雨漏りが家の中をびしょ濡れにした。昼間は太陽が十分に照って、濡れた物は乾く。屋根に上がって雨漏り対策を講じて見たものの、翌夜もまた同じことが繰り返された。結局また廃材アタップ板を買い、ヤシの葉マットを増やして屋根を二重構造にしたので、やっと雨漏りがなくなった。

ウォレスは極楽鳥の情報を村人から集めてみた。ワイゲオ島に来たのは、極楽鳥の収集が最大の目的だったのだから。極楽鳥がいるのはベシル Besir 村であり、ここにはい

ないというのがムカ村住民の答えだった。だがウォレスはこの村で極楽鳥の鳴き声を聞いている。ウォレスがそれを主張しても、村人たちは信じなかった。しかし事実は事実だ。

処女林の中に入って行くと、極楽鳥はたくさんいた。だが人間を怖れて姿を隠す。ウォレスはそれをシャイ shy と表現している。美しい極楽鳥を何羽も目にし、撃ち落とそうと射撃したというのに、他の鳥ならほぼ確実に地上に落ちるものが、この鳥に限って落ちないで飛び去る。動きはたいへんに迅速で、あっと言う間に姿を隠すのである。

家の横にあるイチジクの樹に実がなると、その実を食べにたくさんの鳥たちが集まって来た。極楽鳥がそこに混じっていた。ウォレスがコーヒーを飲んでいるときに極楽鳥を見つけ、すぐに銃を手にして樹の下に立つ。動きがとても速いために狙いをつけるのが難しい。あれよあれよと思っている間に、飛び去ってジャングルの中に消えた。

それ以来、数羽の極楽鳥が毎朝イチジクの樹に朝食を摂りに来るようになった。だがどの鳥も動きが迅速で、しかも長居をしないから、撃ち落とすのは至難のわざだ。ウォレスはじっくりとかれらの動きを観察し、一二度失敗を経験し、数日かけてやっと一羽を撃ち落とすことができた。結局、イチジクの樹にやってくる多数の極楽鳥の中でウォレスの手に入ったのは二羽だけだった。

イチジクの実が残り少なくなったためか、それともこの樹は危険だということを覚ったのだろうか、極楽鳥はその樹にやってこなくなった。しかし森の中に入れば、鳴き声を聞き、飛ぶ姿を見ることができた。一カ月が経過して、ウォレスも鳥撃ち助手たちも極楽鳥の個体を増やすのが困難になってきたので、ウォレスはベシル村に行くことを考えた。ベシル村にいるパプア人の中に、極楽鳥を捕まえて剥製にし、それを売る者がいるのである。

ワイゲオの原住民は先住的土着民でなかったようだ。この島に元々その種の人間はおらず、ハルマヘラからムラユ人、パプアからパプア人がやってきて居住し、いずれもサ

ルワティやドレの女性を妻にして人種混交が進んだようだ。ウォレスがサルワティ Salwatty と書いている島は現代インドネシアのサラワティ Salawati 島のことだ。

各地からこの島にやってきて定住するひとびとが人種混交を複雑にしたことで、ワイゲオ島人というのは純粋ムラユから純粋パプアまでを両極端にするあらゆる段階の外見を持つに至った。言語はパプア島北西部・チュンドラワシ湾の島々・サラワティ・ミソオルなどの沿岸部で共通的に使われているパプア語だ。

それらの現象がパプアとマルクの間の多島海でどのような移住と植民のプロセスが起こったのかを推測させてくれる。ワイゲオ・ゲベ Gebe（ウォレスの綴りは Guebe）・ポッパ・オビ・バチャンやハルマヘラ島の東と南の半島のような元々先住的土着民のいない無人だった地域に雑種的放浪的なムラユ人とパプア人というふたつの特徴的な種族が住み着き、相互に混じり合いながらそれぞれの土地の原住民を形成したというプロセスが起こったであろうことが、強く推測されるのである。[続く]

「イギリス人ウォレス（４７）」（２０２１年０６月１８日）

ムカ村住民の生活は、食料をサゴに頼っている他の島の住民と同様、赤貧と言い得る状態にある。サゴ林のある場所へ行くと、たいていここの村人が住んでいる。かれらは野菜や果樹を植えて育てようとせず、サゴと小魚だけを食べている。そして時おりナマコやべっ甲を獲って売り、必要な衣服を買う。どの家庭もパプア人奴隷をひとりふたり持っていて、生活に必要な労働はすべて奴隷を使い、かれら自身は怠惰な日常を送っている。時に、漁労やいささかの商品を持って商いの旅に出るが、それがかれらの単調な生活の慰めにもなっている。この島の住民はティドーレのスルタンの支配下にあるため、極楽鳥・べっ甲・サゴなどを毎年の年貢に差し出さなければならない。それを手に入れるためにかれらはパプア島に渡り、セラムやブギスの商人から物品をクレジットで仕入れて原住民にふっかけ、年貢と多少の利益が残るくらいの商売をして帰る。

そのような余剰物のない社会は、暮らしやすい場所でない。小さい菜園を作り、使用人が頻繁に魚を獲って来る、ムカ村在住のセラム商人がいたおかげで、ウォレスの食はなんとか確保された。鶏・果実・野菜はムカ村で滅多に買うことができない贅沢品である。ウォレスたちは食用になる鳥や、島にいるイノシシ以外の唯一の四つ足動物であるクスクスを狩って食べざるを得なかった。

ウォレスはアウトリガー船を一隻雇い、ひとりのクルーだけをムカに残して借家と収集品とプラフの番をさせ、残りのクルーと助手を全員連れてベシルに向かった。悪天候に妨げられて数日間出発が遅れ、ついにある朝ムカを離れることができた。やっとその日夕方、島の岸辺の海上に作られたベシルの村に到着したのである。それはムカにやってくる時に通過した狭い海峡の南側にある島だった。

一行は首長の家で夜を過ごし、翌朝、ウォレスが住むのに適した土地を探すために島に上陸した。アウトリガー船は白い砂浜に引き上げた。ベシル村のひとびとは貝を主食にしているのが明らかで、家々と浜の間の浅い海は貝殻の山がいくつもできており、未来の考古学者のための貝塚が作られつつあった。

上陸地点のすぐ上はヤムイモ畑とバナナ畑になっていて、そこに小さい番小屋がひとつ建っている。首長はそこを使ってよいとウォレスに言ったが、こりゃ小人の家だとウォレスは思った。地面から４．５フィート高の４本の柱で持ち上げた８フィート四方の屋内の高さは、一番高いところで５フィートしかない。ウォレスは身長６フィート１インチだから、もっと良い物件はないかと他を当たって見た。そして他の家屋が水場から遠く、汚く、しかも大勢が中で暮らしているのを見たとき、かれの選択は確定した。

高床にせず、その床を外せばウォレスは立ったまま家屋の出入りができるが、そうすると使えるスペースが半減する。ウォレスは高床の屋内をそのまま使うことにして、荷物を運びこみ、居所と仕事場を整えた。こうしてその小人の家がウォレスのベシルにおける６週間の快適な拠点になったのである。

高床の下ももちろん荷物を整頓し、椅子やテーブルを置き、風を防ぐすだれを付け、夜はそこでクルーと助手がマットを敷いて眠った。ウォレスは高床の屋内で、何度も頭を天井にぶつけながら、自分のプライバシー空間を得ることができた。

ウォレスはベシルの村人の中で極楽鳥の捕獲をよくする者を呼び集めてビジネスを開始した。手斧・ビーズ・ナイフ・ハンカチなどの対価を示し、死んだばかりの極楽鳥をもってくればそれらと交換することを告げた。一羽につき、何がどれだけというのが価格交渉になる。この種の交渉は前払いが国際常識だから、ひとりが二羽分を取った。もちろん、本人もそれが二羽分であることを承知している。他の村人はこの地をはじめて訪れた白人が示す奇妙な誘いに戸惑ったか、様子見を決め込んだ。ウォレスのビジネスに乗ったのはそのひとりだけだった。ウォレスの助手たちも森に入って極楽鳥を撃ち、持ち帰って来る。ウォレスは助手たちの猟果に大いに満足した。[続く]

「イギリス人ウォレス（４８）」（２０２１年０６月２１日）

三日後、ウォレスとのビジネスを受けた男が生きた極楽鳥を持って来た。だが極楽鳥は袋に入れられていたため、大いに暴れて尾や羽がたいへん傷んでおり、標本にはできない。ウォレスはその男と６人の仲間たちに、これではだめだと事細かに説明した。自分が何を望んでいるのかを懇切に語り、死んだもので構わないのだが、もし生きているものを渡したいと思うなら、木の枝に足を縛って身体が壊れないようにしなければならない、とかれらに告げた。

その男についてきた６人の仲間たちはやっとウォレスの希望を呑み込み、またこれはどうやらフェアビジネスのようだという印象を得て、全員が前払い品を取った。数人が一羽分、もう数人は二～三羽分、ひとりは６羽分を持って帰った。

自分たちは極楽鳥を捕まえるために遠くまで行かなければならないが、手に入れたらすぐに戻って来るとかれらはウォレスに約束して行った。そして数日後から、かれらは五月雨式にウォレスのところに極楽鳥を持って来たが、袋に入れる者はもういなかったにせよ、外観のどこかが破損していた。

かれらの中には、捕まえた極楽鳥の足を木の枝に縛って家に置き、そうやって数羽ためてからウォレスに渡したから、その間に鳥たちは逃げようとして死にものぐるいで暴れまわり、中には不安や飢餓で死んだものもあった。

かれらの極楽鳥の捕らえ方は、尖った矢で射るのでなく、実に知能的な方法で生け捕る。極楽鳥が大好きなアルムの実を鳥がよく止まる木の枝に細い紐をつけて仕掛け、鳥が止まると紐を鳥の足にからめて地面に落とすのである。

仕掛けた人間は紐の端を手にして、鳥が止まるのをじっと待つ。二三日間、飲食なしにじっと待つこともあれば、時には一日に二羽三羽と手に入ることもある。土着民のそのような狩猟方法をウォレスが見たのはベシルだけであり、他の土地でそのような技が使われているのを見たことがない。ベシルですら、その方法を使って極楽鳥を生け捕っているのは十人足らずだ。

ウォレスはベシルで極楽鳥の数を大幅に増やすことができた。最終的にこのワイゲオの旅で素晴らしい標本個体が２４羽も得られたのである。だがしかし、ベシルでは食料に事欠いた。畑を含めた周辺環境から得られる野菜果実は住民の需要すら満たしておらず、そのためまだ十分に熟していない段階で収穫され消費される。ニワトリはおらず、住民が獲った魚も売ってもらうことができなかった。だからウォレス一行は食べられる鳥を撃ち落とし、コメやサゴと一緒に食べたが、時には鳥が得られない日もあった。プラフに積み込んで来た食料は既にスパイスやバターが使い果たされ、ウォレスは痩せこけて奇妙な病気にかかる始末だった。

９月末が近付いてきたため、ウォレスはムカに戻ることにした。東風の季節が終わる前に西に向かって出帆しなければならないのだから。ウォレスと極楽鳥のビジネス契約をした住民はだいたい取った対価に見合う数の極楽鳥をウォレスに渡した。中に猟果ゼロの者がいて、かれは先に取った対価の手斧をウォレスに返した。６羽分の対価を取った者は、ウォレスの出発予定日の二日前に５羽目を持って来た。そしてすぐに森の中に引き返した。

出発の時が来たが、その男は姿を見せなかった。ウォレス一行がプラフに乗り込み、いざ出発しようとしたとき、かれが極楽鳥を手で掲げながら走って来たのである。かれはウォレスに鳥を渡し、「これであんたへの借りはない」と言った。たとえその男がそこまでしなかったとしても、ウォレスがかれにその責任を取らせることなどできないことを、かれ自身も十分に分かっていたはずだ。文明人の多くが期待していない未開人のそのような正直さや誠実さを目の当たりにして、ウォレスは感動を覚えた。[続く]

「イギリス人ウォレス（４９）」（２０２１年０６月２２日）

ウォレスのプラフがムカを去ったのは９月２９日だった。ワイゲオ島の海域を脱して大海に出るまでに四日かかった。通常のこの季節に吹く風向きに反して、風は南南西から吹いてくる。南南東の風を期待していたというのに、風と潮流がウォレスのプラフの進行を妨げる。

遅々として西航がはかどらないため、飲み水の不安が出て来た。ふたりのクルーが置き去りになったあの島で水を補給しようと考えたが、その方角に向かわせることさえできない。しかたなく、ベシル島の真西にあるガグ Gag 島を目指した。ウォレスはガグ島を Gagie と書いている。

ガレラ人の舟がガグ島で水が得られることを教えてくれたので、ウォレスのプラフが湾内に入ろうとしたが、逆風で入れない。ウォレスはハンカチを報酬にしてガレラ人の

舟に乗せてもらい、上陸してたっぷり水を汲んで来た。ガレラ人はガグ島の北岸にキャンプしているので、ウォレスのプラフもそこへ向かい、食料を買おうとした。しかし手に入ったのは黒い石炭のような亀の燻製肉だけだった。そのキャンプの先にはゲベ島住民が所有する農園があり、オーナーはパプア人奴隷にその世話をさせている。ウォレスは翌朝、野菜やバナナを買ってハンカチとナイフで支払った。

１０月４日、ウォレスはそこを出発しようとしたが、錨が深い海底に引っかかり、結局引き上げるのを断念して切り離した。風は相変わらず南南西で、ハルマヘラ島南端に接近するのは困難であるように思われた。苦労してハルマヘラ島に接近し、海岸に上陸しようとしたが、強い海流に押し戻されて海上を行ったり来たりという状況に陥った。

７日の夜にサンゴ礁の端にたどり着き、錨を下ろして夜を過ごし、翌朝上陸した。鹿やイノシシを狩っているガレラ人がいたが、かれらはムラユ語を話そうとしなかったために役立つ情報は得られなかった。ふたたび海岸と沖の間で行ったり来たりが始まる。通りかかったボートから、もっと先に港があってそこにガレラ人が大勢いるから、舟漕ぎ仕事に雇えるだろうという情報が得られた。

１０月１０日午後、やっとのことで港の入口までやってきた。「ああ、良かった」と船上の一同が喜び合ったのもつかの間、またまた風が真っ向から吹いてきた。そしてスコールに襲われて、プラフはまた沖へ流された。実に容易に流されてしまったのは、スペアの錨がスコールで荒れた波のおかげで切れてしまったからだ。プラフは錨を持たない、まるで水上に漂う枯葉のようになってしまった。逆風と逆流を乗り切るためには櫂漕ぎしか手段がなくなってしまったわけだが、プラフ上のクルーと助手たちの櫂漕ぎの力は既にこの帰途航海の初期から証明されていた。何しろウォレスのプラフは重く、三人のクルーでは、たとえ年寄りの水先案内人を加えたとしても自然の猛威とバランスが取れそうもなかったにちがいない。

穏やかな入江を見つけてそこに駆け込んだ一行は、急場をしのぐために、プラフのバラスト用の石を籐で編んだ袋に詰めて急ごしらえの錨を作った。この錨は、次に上陸してクルーが重い木と石でムラユ式錨を二個作るまで、プラフの航行を助けた。

１１日、ウォレス一行はついにハルマヘラ島南半島部のガネルアル Ganeluar に上陸した。その地の首長は西岸部のガネディダルム Ganedidalem に住んでいるので、ウォレスが助力を求めていることを伝えるためにガネルアルから村人が使いのために出発した。半島を横断するのは半日かかる。ウォレスはサゴ・鹿の干し肉・ココナツを買って飢えと渇きをいやすことができた。ウォレスの著作ではガネルアルは Gani-diluar、ガネディダルムは Gani と書かれている。[続く]

「イギリス人ウォレス（５０）」（２０２１年０６月２３日）

１２日午後、ガニの首長がやってきて、ウォレスのプラフに乗れるだけの櫂漕ぎ人を用意することを約束し、また卵とコメをウォレスにプレゼントした。１６日夜明けと共に、１０人の漕ぎ手を加えたプラフはガネルアルを離れた。その日夕方、半島南端とのほぼ中間まで来て、夜は休んだ。南端を回ると、進行方向が完全に逆転する。櫂漕ぎを続けて、プラフは１８日夕方ガニに到着。ガニの首長と在住ブギス商人の歓迎を受けて、一行はしばしの休息を取った。

テルナーテへの航海に、天候が予断を許さないため、ウォレスは漕ぎ手を更に４人増やして２０日午後、ガニを出発した。２２日正午前、バチャン島とハルマヘラ島間の海峡にある狭まった航路を抜けようとしたが、海流が速くて渦を巻き、容易に通過することができない。風向きは転々と変化し、時に死に絶えることもある。難所を切り抜けて２５日には沖合に出、深夜にカヨア島南端に達した。カヨア島で数日休息し、その間昆

虫採集をしようとウォレスは考えたが、雨季に入ったためだろうか、昔の時ほど昆虫はいなかった。

ウォレス一行が付いた翌日にテルナーテに向けて出発したボートが、悪天候のために戻って来た。１０月３１日、天候が良くなったように思われたので、ウォレスはプラフを泊めてある河口に移動し、１１月１日朝、バチャンを出港した。だが風向きはどこへ行こうが逆風が続く。海流は時に前進を妨げて押し戻したり、時には進行方向に流れて航行を誘導してくれるが、ワイゲオを出て以来の風向きの異常さはクルーに大問題という印象を植え付けた。

今は南東の風が吹く季節であるにもかかわらず、南東の風が半日以上吹いた日は一日もなく、ほとんどが逆風になってこのプラフを苦しめている。これは不吉がこの船にまとわり付いているためだから、それを祓う儀式をしてはどうかとクルーはウォレスに勧めた。それは船底に穴を掘り、そこに聖油を注ぎ込むのだそうだ。

１１月２日の夜明け、プラフはカヨア島とマキアン島の間にいた。午前中は雨が続き、午後は風が凪いだ。その後、弱い西風が起こったので、マキアン島に上陸して夜を過ごした。３日、南風が来たので喜んだものの長続きせず、すさまじいハリケーンに急変した。それはワイゲオからの航海で出会った最大の猛威だった。水先案内人は「アッラー、イラッラー！」と大声で叫び、神の救いを求めた。ハリケーンが過ぎ去ったあと、さっきの嵐はこれまでに体験したことのないすさまじいものであり、このプラフが不吉にしがみつかれているのは疑いないから、ブギスのプラフがみんなしているように、このプラフに付いている不吉を祓う儀式を行うべきだと水先案内人もウォレスに主張した。あんなハリケーンだったのに大過なく通過できたのは、自分が主アッラー Tuwan Allah に助けを求めたからだ、とかれは語った。そのあと、二日かかってやっとテルナーテに到着した。凪・スコール・逆風そして到着直前には最後の最後に突風を受けて吹き戻された。

最終的にテルナーテの家に戻って来ることはできたものの、ウォレスが判定したゴロム島から処女航海に出た後の全行程の総括は、ローカルのプラフでこのような航海はするべきものでないという結論だった。ゴロム⇒セラム⇒ワイゲオ⇒テルナーテという５カ月と一週間の旅の中で、実にさまざまな事件が起こった。最初に雇ったゴロム人クルーが全員逃亡し、ワハイで雇ったクルーふたりが名もない島に置き去りになって一カ月漂流者暮らしをしたこと。サンゴ礁に１０回も乗り上げ、４回錨が失われ、ガニで買ったボートが嵐で粉々になり海の藻屑と消えたこと。１２日で十分踏破できるワイゲオ⇒テルナーテの航海に３８日が費やされ、海上で何度も渇きと空腹に悩まされ、終日順風に恵まれた日は一日もなかったこと等々。ウォレスが自前の船で行ったはじめての航海は、どんな船乗りに言わせても運の悪い旅だったことは間違いあるまい。[続く]

「イギリス人ウォレス（５１）」（２０２１年０６月２８日）

１８６０年のクリスマスをウォレスはテルナーテで送り、年が変わった１８６１年１月、かれは南方のティモール島ディリ Dili に向かった。ティモール島西半分のオランダ領は１８５９年５月に２週間、クパンと近隣の数カ所に合計二週間滞在して調査と採集を行ったことがある。ポルトガル領ティモールのディリでの調査は初めてだ。ウォレスはディリを Delli と綴っている。

１８６１年１月１２日にウォレスと助手の一行はディリに到着し、イギリス人のキャプテン・ハートに迎えられた。ハート氏はポルトガル領ティモールの物産を商い、また自分でもコーヒー農園を経営しているディリの長期居住者だ。ハート氏は友人のギーチ氏をウォレスに紹介した。ギーチ氏は銅の鉱脈を発掘するためにそこに二年も滞在している鉱山技師である。

ディリの家屋が泥土と草で作られているのを目にしてウォレスは、オランダ領の極貧の町よりまだ過酷な、悲惨な土地だという印象を受けた。要塞でさえもが泥土の壁で作

られている。教会も税関役所も何ら違いがなく、おまけに見映えをよくするために飾ったり小ぎれいにしようという意欲も見られない。まるで貧しい土着民の町であり、おまけに町の周辺に栽培や耕作が行われている雰囲気もない。

総督邸だけが他の建物に比べて風格を見せているとはいっても、他の土地へ行けばただの貧相なコテージかバンガローのたぐいでしかない。町は少し離れた距離にある湿地と泥沼に囲まれていて、ひとは容易にマラリアに罹る。ハート氏はその対策として、夜はいつも町から２マイルほど離れた高原部の家に帰って寝る。ギーチ氏も同じエリアに自分の家を持っていて、わたしの家をシェアしましょうとウォレスを誘ったので、ウォレス一行はしばらくギーチ氏の家に同居した。

体調がすぐれなかったために、ウォレスはハート氏の農園の近辺で昆虫や鳥を採集した。２月に入って、山上海抜２千フィートにあるバリバ村を一週間ほど訪れようということになり、馬で７マイル足らずの距離を登った。半日の登攀でバリバ村に到着。

村には家屋が３軒だけあり、数フィートの柱の上に載った低い壁の家屋で、草ぶき屋根はかなりの高さがある。ウォレスたちはまだ建築中の家を貸してもらった。そこからは眼下にディリの町と海の美しい光景が見渡せた。

今は雨季の真っただ中であり、一日に太陽が十分照る時間はほんの１～２時間しかない。多分その天候のおかげで、鳥や他の動物も昆虫も貧しい様相を呈しているのだろう。鹿は一頭もいなかった。

ジャガイモは海抜３千から３千５百フィートという山の高所にまで植えられていて食料には事欠かず、また家畜の羊も二日に一頭が屠られて客人の食糧にされた。ジャガイモと共に高品質の小麦も栽培されている。そこで採れた小麦粉で作ったパンは、ウォレスがこれまで食べた美味しいパンと少しも遜色のないものだった。ヨーロッパやアメリカから輸入された小麦粉で作ったパンと比較しても、決して劣るものではない。またコーヒーも１～２千フィートの高所でたくさん収穫されている。

ディリの町は海岸の低地にあり、マラリアの汚染地区になっている。ところが、ポルトガル人が植民地にしてから三百年間、この地にいるほとんどのヨーロッパ人は不健康なディ

リの街中に住み続け、高原に家を建てて住もうという動きは起こらなかった。今でも、ヨーロッパ人の半分は不健康なディリの街中に住み続けている。ハート氏のように、より健康な生活が営める高原に住み、ディリの町との間によい道路が作られたなら、馬で１時間ほどの通勤時間にしかならないというのに、ディリのポルトガル人はそれをしようとしない。

道路について言うなら、ポルトガル領ティモールには道路らしい道路が作られていない。おまけにハート氏の農園は別にして、ここの広大な丘陵地に農園らしい農園もまったく存在しない。農園の収穫物を港や消費市場に輸送するために、良い道路は不可欠である。道路がなければ農園は十分に成り立たず、農園がなければ道路を作る必然性が低下する。原住民が自発的にそういうことを行わないのであれば、政庁が指導すればどのようにも実現させることができるのではあるまいか。[続く]

「イギリス人ウォレス（５２）」（２０２１年０６月２９日）

政庁が住民の経済活動を促進させ、インフラを整備して経済効率を高めることで、領地は発展し、住民は植民地統治がメリットをもたらすことを認識する。イギリスもオランダもそのようなことをしているというのに、ここはまたいったいどうしてこうなのだろうか、とウォレスははなはだ訝しんだ。

２月２４日にギーチ氏がティモールを去った。ギーチ氏を雇ったのはポルトガルの鉱山開発会社であり、シンガポールにいるポルトガル商人が会社資本金の大部分を担っ

た。そのプロジェクトの発端は、かなり昔にディリの東方にある山で銅塊が発見され、山全体が銅の塊であるという話を政庁上層部以下が信じていたことに始まる。

ポルトガル人は、まず鉱脈探査を、などという悠長な話は時間と金の無駄だと考えて、イギリス人鉱山技師を二年契約で雇った。その人間に採鉱事業を請け負わせて、必要な機材・資材の一切および数人のメカニックを請負者の責任の下に用意させたのである。

すべてがディリに揃い、ディリから総督・軍司令官・判事長のお歴々、現地周辺地域の原住民首長たち、そしてハート氏が通訳として付き添ったギーチ氏とメカニックらが現地に集まって鉱山オープニング式典の運びとなる。ところが銅の塊だと言う山をギーチ氏が見た時、「銅の鉱脈など、どこにもありませんぞ。」という話になった。

「そんなはずはない。ありえない。」と言われれば、多勢に無勢。ギーチ氏は銅の鉱脈を探して歩き出す。ところが、行けども行けども銅の山などという様相に出くわさない。見つかるのはせいぜい、採算性のない貧弱な銅原石程度だった。

ポルトガル側は、銅鉱山の掘削をどこで開始すればよいか、その地点を指示してほしい、とギーチ氏に要請したが、「ここに銅はないので、そんなことをするのは金と時間の無駄だ。」とかれは主張した。しかし総督はギーチ氏の言を信用せず、「鉱山技師のあなたは場所を示すだけでよいのだ。やるやらないはわれわれが決めることだ。」と決めつける。

ギーチ氏は再度同じことを言い、あるかないか判らない地底の銅を探すために峡谷を削り取って行かなければならず、そんなことに時間と金を使うことはできない、と説明した。通訳の言葉を聞いたお歴々一行は突然背を向け、何の一言もなしにその場から帰って行ったそうだ。その後、この事件に関してポルトガル人の間では、イギリス人技師は銅を掘り出す意志がなく、このプロジェクトは陰謀がらみのものだった、という話が広まったと言う。

ギーチ氏はシンガポールのポルトガル商人に手紙を書き、メカニックは帰国させること、自分は契約期間をティモール領内の鉱物資源探査に当てることを説明して同意を得たものの、ディリのポルトガル政庁はギーチ氏をディリから出さないように努め、かれの行動をさまざまに妨害した。しかし最終的に鉱物資源探査行動は許可され、ギーチ氏は助手と共に東部地区を調査して回った。そして得られた結論は、鉱山として採算の合うものは何ひとつないということだった。銅鉱も数カ所で見つかったものの、低品質でビジネスになるものでなかった。

たとえ何かマシなものが見つかったとしても、まず道路建設から始まり、更に必要な機材・資材・人材をすべて輸入して採鉱活動に入ることを思えば、採算性がきわめて厳しいことは想像がつく。この地がもっと文明化した後でなければ、鉱業ビジネスは成り立たないだろうというのが最終結論だった。

これは無知盲信の徒と、権力に押されて無恥猛進する愚挙を拒否した人間の姿を浮き彫りにしたような話だ。山を切り崩して地底の底まで見せてやれば、ディリのお歴々は最終的に銅がないことを信じただろう。ギーチ氏にとっては、自分の意見が正しいことを証明する方法がそれだったように思われる。だがそんなことをすれば、ギーチ氏の契約報酬はすべてが吹っ飛び、自分の財産をその愚挙のためにつぎ込むことになりかねない。

その愚挙に合わせて契約内容を変え、契約金額を上増しするような契約主がいるわけがあるまい。契約主にもっと金を出させるためには、ギーチ氏は嘘をつくしか方法がなかったのではあるまいか。だが、かれは自分のプライドを護るために詐欺行為を行うことも拒否した。[続く]

「イギリス人ウォレス（５３）」（２０２１年０６月３０日）

無知盲信の徒というのは、迷信や偽言虚言を信じて頑なになっているものだ。かれらに真理真実を「信じさせる」のがいかに困難なものであるかということは、現代社会においても何も変化していない。その種の人間に真理真実を「信じさせる」ことは、エベレストの山頂からチャレンジャー海淵に至る千差万別の知性レベルを持つ人間への大いなる挑戦であり、真理真実の敗北という挫折が常に足元に大きな口を開いてひとを待ち受けている。直立歩行するようになったサルがたいへんな進化を遂げたと言われている中にあって、この問題はいまだに栄枯不変の障害を人類に与えているようだ。

だからこそ人類は、その無知盲信の徒を手玉に取るために、実体を言葉で描き出すことがほぼ不可能な「社会」という、人間でできた空気のようなものを操作する方法を使って来た。個人を相手にすると失敗する確率の大きいその障害が、社会という空気の膜でかれらを包むことによって失敗の確率が大幅に減少したことをわれわれは歴史の中に多々見出すことができる。実に、進化したサルの扱い方を十二分に心得た超進化したサルが歴史の中で世界中のあちこちに出現したのである。われわれの周囲にもきっとそんなサルがいるにちがいあるまい。だからこそ人類は社会性を低下させて個人主義の方向へと邁進しているように見えるのだが、それが超進化したサルの手管を知り尽くした無知盲信の徒の反撃なのかどうかは別にして、社会性が深まる以前の段階に展開された人類生活形態への回帰がそれであるなら、もちろん全く同一になるわけがないのだが、人類の進化とはいったい何なのかという疑問に襲われるひとも少なくないだろう。閑話休題。

ポルトガル領ティモールの中央山岳部に住む土着民はパプア系だ。一方、海岸部の住民はムラユやインドあるいはポルトガルが混じっていて、パプア系より背が低い。山岳部で家屋は３～４フィートの高床にするが、海岸部では土間になっている。

死者の遺体は地面から６～８フィートの高さに敷かれた板の上に載せられ、露天のままに置かれているものもあれば、屋根が設けられているものもある。埋葬の際に宴を開かなければならないので、遺族がそれを行えるようになるまで遺体はそのままだ。

ティモール人は概して偉大なる泥棒であるものの、血に飢えている者たちではない。かれらは常にかれら同士の間で抗争し合っていても、ヨーロッパ人に危害を加えることはない。機会があれば他部族の保護されていない人間を誘拐して奴隷にする。町中に住む混血者を除いて、キリスト教徒原住民はいない。

原住民は自分たちを支配しようとする人間をたいへん嫌い、自分たちの自由独立を維持しようと努める。だからポルトガル人にせよオランダ人にせよ、かれらに受け入れられて共生できるような雰囲気は見られない。

ポルトガル領ティモールには、過去三百年間の植民地時代を通して、ひとつの道路も作られていない。街と近隣の村や何らかの関りを持つべき土地をつなぐ道路がひとつもないのである。それは領内の発展を望む者がポルトガル側にも原住民側にも、ひとりもいないという状況を示しているようだ。政庁の官僚たちは原住民から搾り取り奪い取ることだけを考えている。その一方で、原住民が反乱を起こして攻めて来たときのことは、たいして想定されていない。

この地は土壌も気候も農栽培を助けるものでなく、植生も単調であまり魅力的でない。特に乾季はたいへんに厳しく、自然水の水流が涸れてしまうこともしばしば起こる。しかし高さ２～４千フィートの高所は十分な湿気があり、ジャガイモや小麦を繁茂させることができる。

産業と呼べるほどの産業がまるでないティモールでは、輸出商品は小馬、白檀、蜜ろうなどくらいだ。白檀は主に中国に輸出されて、寺院や富裕層の邸宅で消費されている。

ウォレスは１８６１年４月２５日に期待外れだったディリを去って、セラム島の西に浮かぶ大きい島、ブル Buru 島に向かった。オランダ植民地政庁の郵便船は５月４日にブル島のカイェリ Kayeli 港に入り、ウォレス一行を下ろした。ウォレスは自著の中でブルを Bouru、カイェリを Cajeli と綴っている。Cajeli はオランダ式綴りだろう。
[続く]

「イギリス人ウォレス（５４）」（２０２１年０７月０１日）

カイェリは２０世紀初めごろまでブル島の首府だった。オランダ要塞が造られ、オランダ政庁行政官が駐在していた。ところがすさまじい洪水のためにカイェリが壊滅した結果、政庁は１９１９年に首府を湾の対面にあるナムレア Namlea に移転させたのである。

ウォレスはブル島に二カ月滞在する予定を組んだ。郵便船はマルクの島々をひと月かけて巡回するからだ。ウォレスの乗った郵便船が港に入ると、ブル島要塞指揮官が原住民の小舟でやってきて郵便物を受取り、ウォレス一行と荷物を積んで陸地に引き返した。郵便船はそのまま港を出て行った。

要塞指揮官が直々に郵便物を受取りに来るぐらいだから、ブル島要塞とは言ってもわずか１２人ほどのジャワ人兵士と指揮官付き副官がいるだけの小世帯である。それでも要塞建物は堅固に作られ、ちゃんとした装備を持ち、戦争の役には立つようになっている。ディリのポルトガル要塞には少佐・大尉・中尉などの士官や兵士が大勢いて、兵力を比べれば比較にならないものの、そのあまりにも見すぼらしい姿を比べれば、戦闘力の大きさは一気に逆転するようにウォレスには思われた。

指揮官は郵便物をブル島取締官 Opzeiner の居宅兼事務所に運んだ。ウォレスもそれに付いて行った。ブル島は副レシデンが置かれるほどの要所でないために、もっと下級の植民地官僚が現地の監督者として駐在している。ブル島取締官はアンボン生まれの混血者だった。

取締官が手紙を呼んでいる間、ウォレスはガイドを付けてもらって借家を探しに村に出かけた。村は沼地の中にあって、地面は水と泥でいっぱいだ。家は１フィートほど水面から高く盛った土の上に作られ、周囲を湿地が取り巻いている。家の木製の枠組みはたいてい上手に作られているものの、床は土間であり、外の道と床の間には段差がない。床は湿気に満ちている。

ウォレスは最終的に道路から１フィートほど床が高くなっている家を見つけて、家の主と交渉した。家主は家財道具を置いたままで家を空けることを同意し、ウォレスはその夜、屋内を片付けて自分の好む配置に自分の荷物を整頓し、自分のライフスタイルをその家で満喫できるようにした。家主はどこか親戚の家に転がり込むだけで数個の銀貨が手に入るのである。たいていの原住民はその簡単な金稼ぎを否とは言わない。

ブル島のいくつかの土地を見た後でウォレスはブル島民について、人種面で優勢な特徴はスラウェシのムラユ型だと考えた。ウォレスがバチャン島で見た東スラウェシのトモレ人に類似している者がしばしば見つかる。次いで優勢な特徴はセラム島のアルフロス型だった。ブル島人の外見にそれらの特徴の混在を見出すことができる。

東スラウェシのスラ Sula 島からブル島北岸までは４０マイル足らずの距離、セラム人にとってブル島への航海はマニパ Manipa 島から簡単に行える。その仮説は、使われている言語からも証明できるものだ。

ウォレスはカイェリに家を借りて近辺を探ってみたが、どうやらブル島に早く来すぎたことが明らかになった。ここはまだ雨季が終わっておらず、生物相がたいへん貧しい

ことが判明したのである。もっと奥地に入ってみたらどうだろうかと考えて、ウォレスは５マイルばかり川をさかのぼったアルフロスの村への訪問をアレンジした。するとカイェリのラジャが、その村はわが支配下の村だからということで、ウォレスの訪問に同行することになった。ラジャはたいへん落ち着いたひとがらの老人だった。

泥まみれになりながらの奥地訪問もたいした成果が上がらなかったため、情報を集めることにした。島の北側は丈の高い草に覆われた沼地や湿地だらけだが、南部海岸はワイポティ Waypoti から森林が続いていることが分かった。但しペラ Pelah から向こうの海はモンスーンに直接さらされるので危険であるため、プラフでペラまで行き、そこから徒歩で進まなければならない。

現代インドネシアには Waepotih と Pela という場所がある。Pela は位置的につじつまが合うのだが、Waepotih はブル島北岸にあってウォレスの文に従うとおかしなことになる。昔は別の場所がその名で呼ばれていたと理解せざるを得ないようだ。[続く]

「イギリス人ウォレス（５５）」（２０２１年０７月０２日）

徒歩となると荷物担ぎ人が必要になるため、オランカヤが一日先行してペラへ行き、荷物担ぎのアルフロスを集めておくことになった。計画は順調に進んで、ペラから海岸沿いに１０マイル歩き、５月１９日にワイポティに到着した。そこには、村はなく、家屋と農園が散在しているだけだ。

ウォレスが使える家は屋根の腐った背の低い小屋だけだった。幸運にもその夜は雨が降らず、翌日すぐに屋根の修理を行った。その家から半マイルほどのところにきれいな水流があり、その向こうが森林に包まれた丘になっている。水流を越えて丘に入ってみたところ、その辺りには踏み分け道も何もないようだったから、採集はあまり期待できない場所だとウォレスは考えた。

丘にはトウモロコシやバナナの畑がたくさんあるのだが、新開地が見当たらない。それでウォレスは自分で森林の一部を切り開くことにし、ふたりの原住民を雇って適当な広さの空き地を作った。しかし、他の島で得られたほどの種類と量をそこで得ることはできなかった。特に、美しい種類の虫があまりいなかった。

ウォレスはブル島での二カ月間で甲虫を２１０種類得たが、１８５７年にアンボンで、かれは三週間で３００種の甲虫を採集しているのである。ブル島での採集活動も、行く前に期待していたほどのものでなかった。ウォレスがブル島で得た鳥は６６種で、その中に新種が１７種あった。そのひとつがヤイロチョウPitta科の美しい小鳥だ。

ウォレス自身も、かれの鳥撃ち助手たちも、週に何度かこの鳥を目にしているというのに、深い茂みの奥で鳴き声が聞こえてもすぐに飛び去ってしまったり、時には近すぎる場所にいたために撃てば鳥の身体が砕け散って標本にしようもない状況だったりして、なかなか手に入らないままワイポティを去らなければならない日が近付いてきた。

助手のアリはこの鳥を手に入れることができないのをたいそう気に病み、ワイポティ出発予定日の二日前の夕方、植物のトゲで負傷した足をかばいながら森の中に入って行った。数マイル離れた森の中の小屋で休み、夜明け前に起きて日の出を待ち受けるためだ。日の出と共に森の鳥たちは餌を食べるためにやって来る。アリはこの最期のチャンスを見過ごすことができなかったのだ。

翌日の夕方、アリが戻って来て土産をウォレスに渡した。アリは念願のその鳥を二羽、持ち帰った来たのだ。一羽は頭が吹き飛ばされ、身体も傷んでいたので標本にできるものでなかったが、もう一羽は完璧な姿をしていた。ウォレスはこの鳥が他の島にいるものとは異なる、全くの新種であることを確認した。

翌日、ウォレス一行はカイェリに戻り、すべての荷物を梱包して郵便船が来るのを待った。ウォレスがテルナーテの家に戻るのは、このときが最後だった。ウォレスと助手

たちはテルナーテの家に二日間滞在してすべての荷物を梱包し、すべての友人たちに別れを告げ、１８６１年７月７日、マナドに向かう郵便船に乗った。

１８５６年９月にはじめてマカッサルを訪れてから、ウォレイシアを中心にした東部インドネシア地方での４年１０カ月の旅の終幕がそれだった。ウォレスは二度と訪れることのないマルクの島々に永遠の別れを告げたのである。

船のスケジュールに従ってマナドとマカッサルにそれぞれ数日間滞在し、そして７月１８日に郵便船はスラバヤに到着した。ウォレス一行はスラバヤで降りると、集めたコレクションをそこで二週間かけて梱包し、ロンドンに向けて送り出した。身軽になったウォレスはジャワ島での採集活動に励む。[続く]

「イギリス人ウォレス（５６）」（２０２１年０７月０５日）

ジャワの都会は自然から離れすぎている。大自然の中にある絶好の狩場へ行きたいのはやまやまだったが、いかんせん、ジャワは交通費が高すぎた。ジャワ島内の旅は、豪華だが金を食うものなのだ。

遠方へ行こうとするなら、馬車を雇うか借りなければならない。そして、６マイルごとに置かれている替え馬の常設交換所で馬を取り換え、１マイル当たり半クラウンの金を支出しなければならない。このシステムを使うことによって、ジャワ島の端から端までを時速１０マイルで走り続けることができるのである。一方、標準外の荷物は牛車や荷担ぎ人に運ばせなければならない。ウォレスの活動とこの移動方法はまったくのミスマッチングだったから、行き先はできるだけ近い森林にしようと考えてウォレスはアルジュナ山麓の森を行き先に選んだ。

スラバヤの郊外はまったくの平坦地で、あちらこちらに耕作地がある。開けた平地に道路が数マイルの距離にまっすぐ伸び、その両側にタマリンドの並木が列をなしてい

る。１マイルごとに警備ポストがあり、警官がそこで任務に就いている。そこには木製のクントガン kentongan が吊り下げられて、非常事態を周辺住民に告知するために使われている。時おり通過する集落は、竹の群生、白い建物、製糖工場の煙突が単調な風景を見せている。

ウォレスはスラバヤの南方４０マイルにあるモジョクルト Mojokerto の町に住むイギリス人、ボール氏の家を訪れて紹介状を差し出した。ボール氏はジャワでの滞在が長く、夫人はオランダ人だ。良い借家が得られるまでここに住んではどうか、とボール氏はウォレスに勧めた。

モジョクルトには副レシデンと原住民首長であるレヘントが住んでいる。街はこざっぱりしていて、巨大なブリギン beringin の樹の下にはパサルが作られ、終日、住民が集まって来る社交場になっている。

翌日、ボール氏はウォレスを誘ってモジョアグン Mojoagung 村を訪れた。かれはそこに住居とタバコの取引所を建てているのだ。続いて、古都モジョパヒッ Majapahit の遺跡を見に行った。半ば崩れた巨大な煉瓦の塊がふたつあり、明らかにジャワ風ゲートの遺跡であることが分かる。モルタルやセメントのような煉瓦を接着させる素材の跡が見られないことから、ウォレスはジャワの煉瓦建造物の精密さに舌を巻いた。煉瓦の一個一個が緻密で硬く、正確な角度と均一の表面をしている。これほど驚嘆されるような煉瓦作りをこれまで見たことがない、とウォレスは書いている。そこから数マイルに渡ってあらゆる方向に建物の跡が見られ、道路や小道はその下に煉瓦で基盤が敷かれていることがわかる。多分それが古都の舗装道路だったのだろう。

モジョアグンのウェドノ Wedana（ウォレスは Waidono と綴っている）宅を訪問し、そこで溶岩石に彫られた美しいロロ・ジョングランの彫像を目にした。その彫像は村に近い場所で地面に埋まっていたものが掘り出されたそうだ。ウォレスはボール氏に、このようなものはどこで買えるだろうかと尋ね、ボール氏がウェドノにそれを取り次ぐと、

ウェドノはためらいもなくそれをウォレスに進呈した。その高さ２フィートでかなり重量のある彫像は、翌日、ウェドノ宅からモジョクルトのボール氏宅に運ばれた。

ウォレスはアルジュナ山西側斜面にあるウォノサラム Wonosalam にしばらく滞在することにした。滞在許可をレヘントから現地のウェドノに出してもらうために、副レシデンにそのことを依頼し、一週間後にウェドノの許可が下りたので、ウォレスはモジョアグンから荷物と助手を伴ってウォノサラムにやってきた。

折りしも、ウォノサラムではウェドノの弟と従兄弟たちの割礼の祝宴が開かれている最中だったため、ウェドノ邸は住民で満ち溢れており、ウォレスは別棟の小さい部屋を使うよう案内された。ガムランが夜っぴて演奏され、ウォレスはガムラン音楽を堪能した。

しかしこの場所は標高１千フィートの高所にあるものの、森林はコーヒー農園のずっと向こうにあって、毎日そこへ往復するわけにいかない。他の方角には、ウォレスにとって良い狩場は存在しなかった。鳥撃ち助手たちはその一帯で豊富に見られる野生の孔雀を狩った。孔雀肉は白身で七面鳥並みの柔らかさとデリカシーがあり、ウォレスたちの舌を楽しませたようだ。[続く]

「イギリス人ウォレス（５７）」（２０２１年０７月０６日）

ウォノサラムの滞在三日目にボール氏が様子を見にやってきた。ボール氏が物語るには、一昨日の夕方、少年が路上でトラに食い殺されたそうだ。牛車に乗って帰宅する途中の少年に、村から半マイルも離れていない場所でトラが飛び掛かった。そして少年の身体を近くのジャングルにくわえこんで食い殺した。翌朝、骨になった少年の遺体が発

見され、ウェドノは７百人近い住民を指揮して人食い虎を狩り、ついに発見して殺した。

このようなケースでは、原住民は槍だけを使い、広範なエリアを取り囲んで獲物を追い立て、その輪を狭めて行って、最終的に槍を構えた人の輪がトラを串刺しにしてしまう。トラは逃げ道が無くなったことを知ると、ジャンプして槍の輪を跳び越えようとする。そのときに十数本の槍が突き立てられて、トラはたいてい即死する。ズタズタにされたトラの皮はもはや何の値打ちもない。頭骨は切られて歯が取り出され、それがひとびとのお守りにされるのである。

ウォレスはウォノサラムを一週間で切り上げ、麓のジャパナン Japanan 村に下った。ウォレスは Djapannan と綴っている。その村は周囲が小さい森で囲まれており、ウォレスを期待させるに十分な姿をしていた。村長はウォレスのために、自宅の中庭に竹造りの部屋をふたつ用意してくれた。ウォレスの役に立とうという意気込みが村長の姿から感じられた。

気候はたいへん暑くて乾燥しており、数カ月間雨が降っていないから、昆虫の採集は不可能と諦め、全員が鳥の採集に取り組み、満足できるコレクションができあがった。

ある朝、ウォレスが村長宅の中庭で標本作りを行っていると、ここで裁判が開かれると突然言われた。４～５人の男が入って来てマットにしゃがみ、続いて村長と事務員がやってきてその対面に座った。マットにしゃがんだのは囚人・告発者・警官・証人たちで、それぞれが自分の話を物語った。ウォレスがじっくり観察したところでは、中のひとりの手首にひもがからめられており、それが囚人を示す合図であることが判った。ひもは緩くからめられているだけで、まったく縛られていない。

これは強盗事件の裁判らしく、証拠品が示され、村長がいくつかの質問を行い、告発者が何か言い、そして村長の判決が下された。罰金刑だったのである。しゃがんでいた連中が立ち上がり、和気あいあいの雰囲気で去って行った。その裁判進行の中で、だれ

ひとりとして激情に駆られたり、気分を害して不愉快になった姿を示した者はおらず、実にムラユ的性格を絵に描いたようなものだとウォレスは思った。

ウォノサラムとジャパナンでのひと月間の滞在で、ウォレスは９８種の鳥を採集した。昆虫の標本は貧弱そのものだった。東部ジャワはこれでもう十分だと考えて、ウォレスは西部ジャワに向かうことにし、モジョクルトからスラバヤへ戻るのに川をボートで下った。

ゆったりしたボートにウォレスと助手たち、そして多くの荷物を積み込んでの優雅なこの旅にかかった費用は、スラバヤからモジョクルトへ来る時に支出した費用の５分の１で済んだ。

スラバヤへ戻って数日後の９月１５日、一行は蒸気船でバタヴィアに移動した。バタヴィアでは、一週間ほどホテルデザンドに宿泊してバタヴィアを見て回り、これからの活動計画を練った。このホテルは居間と寝室およびオープンのベランダが付いており、たいへんに快適だ。朝のコーヒーと午後のティ—はそのベランダで愉しめる。方庭の中央には大理石の浴槽がいくつもあって、いつでも利用することができる。１０時の朝食、６時の晩餐も素晴らしい食事であり、そして宿泊料金はたいへん妥当な金額だ。

バタヴィアの街は訪問者にとって不便な所だ。ビジネスセンターは港の周辺にある一方で、公職者やヨーロッパ人ビジネスマンたちの住居、あるいはホテルなどは港から２マイル南の地区に集中している。その地区には広い道路や広場が設けられて、広大なエリアになっている。

訪問者にとっての不便というのは、何よりも移動の足が賃貸しの馬車しかないことであり、その二頭立ての馬車は最低でも半日５フルデンかかるので、午前中の一時間のビジネスでも、また夕方の私邸訪問でも、半日分の金額を二回出費しなければならなくなる。

バタヴィアでひとは誰も歩かない。道路は砂利道だが、置かれている石は粗いもので、そこを歩くと足が痛くなる。みんな馬や馬車に乗るのが普通であり、庭を歩くひとさえいない。[続く]

「イギリス人ウォレス（５８）」（２０２１年０７月０７日）

バタヴィアから４０マイル離れた奥地にある、標高１千フィートのバイテンゾルフをウォレスは乗合馬車で訪れた。有名な植物園は、確かに素晴らしい植物が集められているのだが、レイアウトが決して素晴らしいと言えるものになっておらず、ウォレスは大した感銘を受けなかったようだ。おまけに園内の遊歩道は砂利が疎らに撒かれた道だったために、歩くのに疲れて足が痛くなった。世界に名高いこの植物園はどうやら、素晴らしい植物類の世話を正しく行える人間の数が不十分なのではないかとウォレスは感じた。

バイテンゾルフを後にした一行は、ダンデルスが造った峠越えの郵便道路に向かった。荷物担ぎ人を雇い、ウォレスは借り馬に乗って上り道を進む。馬と人足は６～７マイルごとに交代する。現在のプンチャッ Puncak 街道であるその道は徐々に高度を増して行く。

果樹に囲まれた原住民の村や瀟洒なビラがあちこちにある。農園主や退職したオランダ人公職者たちが住んでいるそれらのビラはこの地域一帯が文明化された快適な土地であることを物語っているようだ。だがそれにもまして、ウォレスは道の両側に開かれた棚田の風景に感動した。棚田はバリとロンボッで初めて目にし、大いに感嘆したものだが、ここで再び目にした棚田のシステムを世界に二つとない優れたものだとウォレスは思った。山の斜面をある高さまで棚田が取り巻き、かなりの距離にまで奥地につながって数百平方マイルの土地が原住民の生産活動に使われているのだ。ウォレスはそのシステムがインド人によってもたらされたものではないかと推測した。

その峠越え郵便道路をバイテンゾルフから２０マイルほど上って行くと、海抜４千５百フィートのメガムンドン Megamendong 峠に達する。現代インドネシアでその峠はプンチャッパス Puncak Pass という名称になっており、メガムンドゥン Megamendung はプンチャッ街道チアウィ Ciawi 入口から近い別の土地の名称になっている。

ダンデルスが大郵便道路建設に際してグデ＝パンラゴ山系を突っ切るルートを選択したとき、オランダ人はスンブル峰をメガムンドゥン山と呼んだようだ。多分、原住民がそう呼んでいたからだろう。

山越えの道路建設工事を視察しているダンデルスの姿を描いたラデン・サレ制作の肖像画には、ダンデルスが持っている地図にメガムンドゥンという文字が記されているし、１９０４年に作られた地図にも、現代のプンチャッパスはメガムンドゥンと記されている。

その現象から、グデ＝パンラゴ山系の全体が昔はメガムンドゥンと呼ばれていたのではないかという憶測が生じるかもしれないが、グデ＝パンラゴ山系は正しくグデ＝パンラゴ山と称されており、ウォレスも著作の中で Pangerango and Gedeh と書いているから、どうやら現在のスンブル峰がメガムンドゥン山と呼ばれていたのではないだろうか。

峠から５百フィートほど下ったところに道路番の住居があり、ウォレスはその半分を二週間借りて採集活動を行った。確かにその一帯は鳥も昆虫も豊かな場所で、ウォレスと助手たちは一週間に２４種の鳥を手に入れ、二週間でそれは４０種に増えた。大型で美しい蝶もかなりいて、珍しい蝶もコレクションに加えられた。

峠から道路を４マイル下ったところにチパナス Cipanas 村があり、そこには植民地政庁総督用カントリーハウスがあって、そこにバイテンゾルフ植物園の支所が設けられている。カントリーハウス管理人は一晩、ウォレスの宿泊を許可してくれた。

庭には美しい木々灌木が植えられ、また総督の食卓に載せられるヨーロッパの野菜が植えられていた。一方には蘭の咲き乱れる一画もあって、露天のその蘭園は珍しい風情を見せていた。ウォレスはこのグデ＝パンラゴの山中で二三泊したいと考え、荷物担ぎ人をふたり雇い、助手二人と一緒に登攀を始めた。チパナス植物園はグデ山の麓に位置しており、そこからグデ山登山道が伸びている。[続く]

「イギリス人ウォレス（５９）」（２０２１年０７月０８日）

しばらく登ってチブロン Tjiburong の高原に達し、そこの山小屋で昼食を摂る。更に上って高度７千５百フィートのカンダンバダッ Kandang Badak と呼ばれる地点にまた山小屋があった。ウォレスはそこをベースにして数日間、熱帯の高山の登頂を愉しんだ。グデ山の火口もかれは観察している。その一帯はほとんど毎日、雨と霧の悪天候で、ほんのわずかな鳥の採集しかできなかった。昆虫も同様であり、一匹の蝶も手に入れることができなかった。ここは乾季に来るべきだったとウォレスは口惜しんだ。

その後、プンチャッ峠の西側にあるトゥグ村に場所を移し、数マイル北側のコーヒー農園で鳥と虫を探したが、雨季の始まった天候のためにたいした猟果は得られず、西ジャワを去ることにした。バタヴィアに戻って標本をロンドンに向けて送り出すと、ウォレス一行は１１月１日に出港するシンガポール行き郵便船に乗った。

バンカ島のムントッ Muntok 港で下船した一行は、パレンバン Pelembang へ行くための船を求めて、数日滞在した。帆船でムシ Musi 川の河口まで行き、漁村で櫂漕ぎボートを雇って川をおよそ百マイル遡った。ウォレスはムシ川のことをパレンバン川と書いている。

パレンバンの町に着いたのは１１月８日で、町に住む医師宛の紹介状を持って来たウォレスは医師の家に泊めてもらった。良い採集場所を教えてもらおうとしたが、川の両側はどこも洪水で水浸しになっており、乾いた地面の森はずっと奥地へ行かなければない、と誰もが言う。それでウォレスは、行き先を決めるためにもっと情報を集めようと考えて、パレンバンに一週間滞在することにした。

パレンバンの町はテームズ川ほどの広さがあるカーブした川に沿って、４～５マイル広がっている。しかし川岸には杭に乗った住民の家が並び、場所によっては筏に乗った家が列をなして、川幅を少し狭めている。それらの家のほとんどは店舗であり、川面に向かって開いている。客は舟で買い物にやってくるのだ。

ここの原住民は真のムラユ人だ。かれらは住むことのできる水辺があれば乾いた土地に家を建てることをせず、行こうとしている場所がボートで行けるのなら、決して歩こうとしない。他にはかなりの数の華人とアラブ人がここに住んであらゆる商売を行っており、ヨーロッパ人は政庁の文民と軍人の職員がもっぱらだ。

情報を集めた結果、期待できそうなことが分かった。ムシ川を一日遡ると、山越えをしてブンクル Bengkulu までつながっている軍事道路があるという話だ。その道を進んで行けば良い採集場にたどり着けるだろう。

ウォレスたちは軍事道路の出発地点になっているロロッ Lorok 村目指して朝早く出発したが、到着したのは真夜中だった。ロロッ村へは、ムシ川の支流を遡る。その村の様子をよ

く観察するため、ウォレスは数日そこに滞在した。しかし村の周辺は耕作地になっており、わずかな森は湿地の中にあった。ロロッ村で新種の鳥をひとつだけ得ることはできたが、そこで採集活動を行うのは無駄が多すぎる。村人たちはウォレスに、軍事道路をどこまで行こうが、いずこもこの村の周辺のようなありさまであり、一週間かけてもウォレスにとって格好の狩場は見つからないだろう、と熱心にアドバイスした。だった

ら、何日も移動に時間を費やすことになるだけであり、これほど馬鹿々々しい話はない。

しかし、良い場所があるとウォレスに教えてくれる者がいた。その村から３０マイル足らずの距離にあるレンバン Rembang へ行ってはどうかと言うのである。それなら一日の距離だ。ウォレスはレンバンへ行くことにした。

道路は１０～１２マイルで規則的に区切られていてステーションがあり、常時６～８人の村人が警備に就いている。道路の区切りは荷担ぎ人が一日に進める距離であり、ステーションで荷担ぎ人もすぐに手配されるので、たいへんに便利だ。その報酬も定価が決まっている。近隣の村々が回り持ちで警備と荷担ぎの者を出す。一回の勤務は５日間。またステーションには旅行者の宿泊設備があり、料理場も付属している。[続く]

「イギリス人ウォレス（終）」（２０２１年０７月０９日）

ウォレスはその一区間を午前中に歩き、午後は近隣の村々を回って借家を探した。逗留するのにも、煩雑な手続きなど何もない。そうやって三日間道路を歩き、レンバン地区の最初の村、ムアラドゥア Muara Dua に着いた。地面は乾いており、森が波打って続いている。そこに二週間滞在したが、昆虫は貧しく、鳥もマラッカのものとたいてい同一で、独特のものは稀にしかいない。

次の村、ロボラマン Lobo Raman に移動した。スマトラのムラユ村は個性的で絵になる。数エーカーの土地が高いフェンスで囲まれ、そこに家屋が規則性など一顧だにされずに散在している。家々の間に背の高いヤシの木が満ち溢れ、地面は踏み均されて滑らかだ。家屋は６フィートほどの柱の上に板材と竹を使って建てられている。家屋外面の板や横桁はたいてい趣の深い装飾が彫り込まれているが、この辺りの家屋の装飾はミナ

ンカバウの家屋ほど凝ったものではない。屋根は急傾斜で、破風の上に突き出している。

床は割竹で、いささか危なっかしい。屋内に家具と呼べるようなものは存在しない。椅子などまったく見当たらず、ただマットを敷かれた平らな床があるだけで、住人はそこに座ったり寝転がる。

村の外見はこざっぱりしていて、掃除が行き届いているが、臭い。それは、各家が建っている下の土地にある汚水穴のせいだ。高床の上での生活から生じた汚水や汚物が、床の穴から下の地面に落とされる。

ムラユ人の生活習慣はだいたいにおいて清潔度が高いのだが、この不潔な習慣はきわめて例外的なものと言える。ウォレスはこの習慣について、ムラユ人は元来、水上生活者だったことに端を発しているのではないかと推測した。

元々は海中に杭を打って、その上の家屋で生活していたかれらは、徐々に内陸部に移って行った。最初は川岸で同じようにした。水上生活であれば、生活排水は床の穴から下に落とせば事足りた。暮らしの清潔さは維持されただろう。ところが、徐々に陸上に家を建てるようになったとき、先祖代々の生活習慣をかれらは変えようとしなかったのではないだろうか。村の中に下水システムを設けるアイデアが生じないまま、内陸部における村でのライフスタイルがそのように固定されて行ったのかもしれない。

スマトラ島の雨季に、ウォレスは食べ物に難渋した。野菜も果実も採れなくなる。せいぜいバナナくらいだ。ニワトリも出回らない。原住民はコメの飯だけでその間生きている。飯に塩とトウガラシだけの食事を一日に二回摂る。これは決して貧困の象徴ではない。単なる生活習慣なのである。その証拠に、妻子たちは銀の腕飾りや銀貨を束ねたネックレス、あるいは銀の耳飾りを着けている。

このレンバン地方は昔からアブナイ地域として名が知られていた。旅人はしばしば強奪や殺害の被害者になった。村の境界線や女がらみの問題で村戦争も頻繁に起こり、住

民の生命が失われた。しかし植民地政庁の行政システムが開始され、監視官が村々を巡回して住民の不満を聞き、係争を決着させることに努めるようになると、アブナイできごとは徐々に姿を消して行った。ウォレスが東インドで見聞したオランダ植民地行政の優れた実例のひとつがここにもあったのである。原住民の実情に合わせて、公平な法執行を厳格に行うことが、東インドの各地で原住民の尊敬を招く結果をもたらした。

ウォレスと助手たちはまたパレンバンに戻り、１８６２年１月１６日にバンカ島に向かった。バンカ島で二日過ごしてからシンガポール行きの船に乗り、１月１８日から２月８日までシンガポールに滞在したあと、ウォレスはイギリスに向かう船に乗った。イギリス人ウォレスのほとんど８年間に及ぶマレー諸島の旅は、こうして終わりを告げたのだった。

［ 完 ］

再編集 2023/7/26